

---

# 世界征服を企む漢達

九条 水菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界征服を企む漢達

### 【NNコード】

N9450T

### 【作者名】

九条 水菜

### 【あらすじ】

兄弟喧嘩が原因で聖域を飛び出したカノンは、神奈川県川崎市高津区溝口にたどり着く。…行く当てがないカノンはひょんなことから知り合いになつた怪人に紹介され、なんやかんやで世界征服を企む悪の組織『フロシライム川崎支部』に居候することになつてしまつたのだった……。天体戦士サンレッド……この話は、神奈川県川崎市で繰り広げられる善と惡の壮絶なる戦いの物語である。たぶん……。　　ハーデス聖戦後、黄金聖闘士復活前提で話を進めていきます。

## 設定（前書き）

この回は設定のみです。

のちに付け加えるかもしれません。

## 設定

- ・天体戦士サンレッド

世界征服を企む悪の秘密結社である怪人組織フロシャイムと、彼らの野望を阻もうとする正義の味方サンレッドとの対峙構造を主軸として、ときに行われる戦い、馴れ合い、心温まる友情などを描く、特撮変身ヒーロー物のギャグ漫画。

舞台は神奈川県川崎市。…主に溝口周辺が舞台。

現在もヤングガンガンで連載中。

### ・聖闘士星矢

この世に邪悪がはびこるとき、必ずや現れるという希望の闘士…聖闘士。その拳は空を裂き、蹴りは大地を割るという。彼らは神話の時代より女神アテナに仕え、武器を嫌うアテナのために素手で敵と戦い、天空に輝く88の星座を守護としてそれを模した聖衣と呼ばれる防具を纏う。6年もの厳しい修行を経てアテナの聖闘士となつた少年星矢が、同じ境遇の仲間の聖闘士たちとともにこの世に蔓延する邪悪と戦う。

…この作品内では、戦いが終わり、三界神…アテナ・ポセイドン・ハーデスの話し合いの結果、黄金聖闘士+が復活したという前提で話を進めていきます。

現在、チャンピオンにて、外伝が連載中。



## 設定（後書き）

もし、誤字脱字、誤りがあつたら、「」指摘して下さるといつれしい  
です。

## FIGHT 1 溝口に現れた鬼

FIGHT 1 溝口に出現した鬼

「つたく…あの愚兄が…」

ブツブツ文句を言いながら歩く男がいた。  
服装こそは…まあ…ジーンズにシャツというラフな格好だが…  
明らかに日本人…というか歐米人でも珍しいのでは?と思うような  
長い青い髪…  
しかもかなりのイケメンの男だった。

…彼の名前はカノン。

職業は自宅警備員…ようは無職の28歳独身。  
日本人ではなくギリシャ人だ。

…なぜ、そんな男が日本に…しかも神奈川県川崎市高津区溝口にいるのだろうか?  
もちろんこれには、わけがあった。

「時をさかのぼる」と一時間前

「…ひりカノン!…!」

ギリシャの聖域内にある十一宮の一つ…双児宮…  
そこから怒鳴り声が沸き起につた。

「貴様はいつになつたら掃除・洗濯・料理をするのだ!…!  
すべて私にまかせっぱなしではないか!…!」

カノンの同居人であり双子の兄のサガが、まだ自室でグッスリのカノンの頭に拳骨を落とした。

「ついつてえ……何しやがんだよ…朝っぱらから…」

「もう十時だ……」の愚弟が…！」

「ああ…じゃあ起きるよ。起きればいいんだろ?」

もぞもぞと起き上がるカノン。

「まつたく…いいか?お前はもう28歳だ。  
さつさと私から自活しろ。さつさと職につけ。  
そうでなかつたら一緒に住んでいる以上、家事をこなせ。  
いつまで居候する氣だ?」

まるで母親のよつに口を酸っぱくするサガ。  
カノンはめんべくそつに口を開いた。

「でもよお…仕事がねえのはサガのせいだろ?  
俺がアンタの後任の双子座ジョニーのセイントの聖闘士だったのに、復活したアンタは  
教皇職補佐兼双子座の聖闘士になつたんだからな。  
…つたく…そろそろ聖闘士は辞めて、教皇職補佐一本に絞れよ。」

「それはダメだ。」

「なんでだよ…！」

「とにかくダメなものはダメなのだ。

だからとつとと就活に行け。…」の愚弟が…！」

去りかけたサガ…だつたが…

「そうだ…ひとつ言い忘れていたな…」

やけに明るい笑顔をうかべて振り返るサガ…

「近頃…私が雑兵を恐喝して金を奪う事件が多発しているとかないとか…」

ギクウ……とするカノン…冷汗が滝のよつに流れる…

「へ…へえ…そーなんだ…さあ…俺は出かけないと…」

「待てカノン。…お前はこの兄に隠してることがあるのではないか?」

「ハハハ…と笑うサガ…

「…答えないのなら…仕方ないな…」

両手を頭上でクロスさせるサガ。

「そ…そのポーズは…!…ま…待てサガーじつくり話し合おう…!…

カノンが必死に止めようとした。

そのポーズは双子座最強の技…銀河をも碎く『ギャラクシアン・エクスプローション』…

生身で受けたら…チリになつて消える可能性大…

「問答無用だ…!…ギャラクシアン・エクス…」  
「やめてくれ…!…」

「…あれ?」

何も起こらない…見るとサガが撃つ寸前の格好で硬直している。

「くつ…こんな時に…邪魔をするな黒…！」

「…説教でそんな技使つお前がおかしいと私は思うがな…」

髪の色が変色しまくつているサガの口から発せられる言葉…

そう…サガは二重人格…

先ほどまでカノンを殺そうとしていたほうが白サガ…つまり外面だけは神のように優しいがカノンには全然優しくないサガだ。

…もう一つの人格は黒サガ…

こちらは白サガの逆…のような存在で、外面は完全に悪…なのだが、なぜかカノンにだけは甘い…

謎の存在だ。…まあ…どちらも厄介なのは変わりないが…

「説教ではない！愛の鞭だ…！」

「それが説教だ！…まったく…人はカノンくらい悪なのが丁度いいのだ。」

「何を言つ！…そもそもお前がカノンを肯定するから、カノンがああ育つてしまつたのではないか…！」

「お前の教育方法も悪いだろ…！」

「だいだい、お前は私に寄生する分際で…発言をわきまえる…！」

「そうは言つが、私のおかげで今のお前がいるのではないか？ 私に感謝してほしいくらいだ！」

「それはこっちのセリフだ…！」

「そもそもだなあ…」

「…」

終わる気配のない白と黒の喧嘩…

…カノンは決意を完全に固めた…  
…家出をしよう…と…

（回想終了）

…という感じで光の速さで海を渡り…まあ…簡単に言つと日本にカノンは密入国した。

日本にはサガの上司であり、カノンの元上司…城戸沙織が総帥を務めるグラード財団がある。

一文無しのカノンはそこで金を貸してもらおうと思ったのだが…  
…よくよく考えると足が付く可能性大だ。  
そんなことをしたら、確実に喧嘩の終わったサガがカノンの居所をすぐにつきとめてしまうだらう…。

（どうしようか…）

とつあえず、その辺を歩いていたら、溝口にたどり着いたというわけだ。

…まさか今更帰れない…

その時だつた…途方に暮れるカノンの前に現れた謎の影…。

…はたして…それは敵か味方か！？

## FLIGHT 1 溝口に現れた鬼（後書き）

えつと…『鬼』といつのは、LJにでてくるカノンの前世が『カノン島の鬼』と呼ばれていたところから取りました。

こんな感じで不定期でやつていきます。  
よろしくお願いします。

## FIGHT 2 魔界の狂えるキバ

### FIGHT 2 魔界の狂えるキバ

「ん…あれは…？」

カノンがぶらぶら歩いていると、通りの真ん中にポツン…と立っている影…

…青いオオカミのようなぬいぐるみ…いや…かすかに小宇宙コスモを感じるから生物が立っている…

数分くらい「何するのかな～」と思つてみていたカノンだった

が、ほとんどオオカミは動かない…

動くとしても、一・三歩歩いてキヨロキヨロとあたりを見わたすくら…だった。

「なんだお前…」

カノンがオオカミの前に立つて見下ろすと、オオカミはカノンを見上げた。

「……………」

「……………おまえ…迷子か？」

「……………」

何も答えないオオカミ…はあ…とカノンはため息をついた。

「…つたく…仕方ない。…どうせ迷子なんだろ?…家はどこだ?

…文字くらい書けるだろ?…連れて行つてやるよ。」

やつぱり紙とペンを出した。

「オマハ… チュキー」

オオカミはカノンを描きはじめて言った。

「チュキー… む… 好きのことか?」

「……」

無表情のままのオオカミ… だが、『クニヒトナシ』たとひひを  
見ると…

『好き』と書いたらいい。

なんか照れてしまつカノンだった。

「あ… あ… セヒニ住んでる場所と名前かけや。」

「……」

たどたどしい字で何かを書き始めるオオカミ…。

「どれどれ… 『ふろしゃいむ』? なんだそつや? マンションの名前か?」

「オマハ… ロロチャ…!」

今度は『殺す』と書かれた。

「… 殺すだと?… お前ではこのカノン様には百年たつてもかなう  
わけなかろうが。」

「… まあ… 探してやるからついてこ。」  
「えつと… 『ヘルウルフ』。」

用紙に書いてあつた名前を呼び、カノンは歩き始める。

後ろからトコトコとついてくるヘルウルフ。

(まつたく……こんなことしてゐ暇ねえのに……)

ちつ…と心のなかで舌打ちをするカノン。

……あ……いい。こいつの仲間から礼をたんまりもらえばいい。

その札を元手になにかする事も出来ぬし……

「あれ？ヘルウルフじゃない？」

前方から兜をかぶり、紫色のマントですっぽり身体を覆つた男が現れた。  
手にはマルシのレジ袋を持っていると見ると、買い物帰りなのだろう。

「どこいつてたの？ウサコッソたちが心配してたわよ。それに…この人は？」

「カノン…チニキ！」

そこがハンサムでいいんですか

「ありがとうございます、カノンさん。

あつ：申し遅れました。

井上義郎著『井上義郎』

「もう夕方だから夕ご飯ご馳走しますよ。」

タ「飯と聞いて、カノンの目の色が変わった。

「ほんとか！すまんなあ。」

「いえいえ、ウチ、人数多いので一人くらい増えてもなんともありますんから。」

首を上下させて笑うヴァンプ。

「…そんなに大人数なのか？」

「ええ。だつてワタシ、フロシャイムの川崎支部で將軍やっていませんで。」

「ふるしゃいむ？なんだソレ？」

首を傾けるカノン。

ヴァンプは笑つて平然と答えた。

「世界征服をたくらむ悪の組織ですよ。」

…と…。

## FIGHT 2 魔界の狂えるキバ（後書き）

『魔界の狂えるキバ』っていってはヘルウルフの通り名です。

## FIGHT 3 潜入！－フロシャイムのアジト！

FIGHT 3 潜入！－フロシャイムのアジト！

「う…うま…」

白米を口に入れたカノンは思わずつぶやいた。

隣の富…巨蟹富の主、デスマスクも結構な腕前だが、それとはまた違う美味さだった。

なんというか…こういうのを家庭の味…といつのだろつか…物心がつく前に親を亡くし、聖域の非常食に近い料理のよくなモノを食べ…

海界で過ごすようになつてからは、サバイバルに近い魚料理を食べていたカノンの知らない暖かい味だった。

「だよね～ヴァンプ様の料理はおいしいよね。」

隣に座つて味噌汁をすすつている、ぬいぐるみのウサギ…型の怪人が答えた。

…カノンは今、悪の組織・フロシャイム川崎支部にいる…のだが…

(ここつら、本気で世界征服する気あるのか?)

この支部とは…「」普通の一戸建て住宅。築23年、木造2階建て、庭付き。

玄関に回覧板が置いてあつたところを見ると、町内会にも所属しているみたいだし…

夕飯をとるのはちやぶ台の上だし…

(まあ…おこしいけど… ) 白米・味噌汁・鶏のから揚げが食事だし…

「はーはー、おまたせ。追加のから揚げよ。」

…「」を統括する将軍…ヴァンプが鶏のから揚げがどりかつ盛られた皿を台所から運んできた。

(…「の礼の仕方といい…主婦か！？）

「あれ？カノンさん、食べないんですか？」

口をもじりもせぬままのは、全身黒タイツの男…「」の戦闘員だ。

「い…いや。今からもじり…。」

と言つてカノンは慣れない箸でから揚げをつまみながら…ちりつ…と戦闘員を見た。

…彼には口がない…

なのに茶碗を持ち…口はもぐもぐと動いている…どうやつて食べているんだ！？

失礼かと思つたが、じいと見る。

戦闘員は気が付かないらしく…箸で器用に白米をつかむと…

「そういうえばカノンさん…ビーム出身なんですか？」

ヴァンプが話しかけてきたので戦闘員から視線を放した。

「ギリシャだな。」

「そ…そんな遠くからですか！？」

「まあ……兄貴とこうじろとあつてな……。」

聖闘士といつ」とは伏せたが、ここにいたるまでの大方のことを話す。

「それ……きっとお兄さんはカノンさんと心配して言っているんだと思うの、私。

私にも弟が一人いるんだけど……ほんとにもう一ートだつたからフロシャイム静岡出張所に就職させたんだけど……

まだまだ半人前だから、帝王学をたまに教えてあげてるのよ。

『本人の将来は本人で』って私、分かつてはいるんだけど心配で心配で……。

「はあ……そうか……。」

「ねえカノンさん……ようしかつたらお兄さんとの事が落ち着くまで、ここにいたら?」

「えつ……? いいのか?」

驚いて、ヴァンプをマジマジと見るカノン。

「平気平気。一人居候が増えても問題ないし。」

「しかし……世界征服が……」

「それは大丈夫! 当分できないから。」

キッパリと言い放つヴァンプ。

……そこは自信満々に言うところじゃないだろーー!

……つとツツコミ! そうになつたが……

「すまん。世話になるな。」

まあ……住処と食べる心配がなくなつたし……いいか。

と思ひ直し、少し頭を下げるカノンだった。

## FIGHT 4 ミイラの呪い

「…つたく…これで本当に世界征服する気あるのか?」

モップがけをしながらカノンはつぶやいた。

将軍の小宇宙は白銀聖闘士並み…つまりカノンには到底かなわないレベルだし…

部下たちは…まず戦闘員は雑兵レベルだし…

オオカミ型怪人のタイザはカノンがみるかぎり『寝る』『食つ』しかしていない…

初めてであつた怪人のヘルウルフとその仲間…ウサコツ・デビルネコ・Pちゃんにいたつては、ぬいぐるみ型怪人だし…

「おい、ヴァンプさん! 次はなにすりやいいんだ?」

「あら、モップ終わったの? ありがとうカノンさん。」

台所から顔を出した割烹着姿のヴァンプ…

明らかに悪の組織の将軍のイメージからかけ離れている。

「そうね… それじゃあ…」

「何やつてるんだよカーメン!…

つーか逆恨みすんなよ、溶かすぞ!…」

「つっせえよ。呪つぞ!…」

玄関がなにやら騒がしい…

「あらもお…喧嘩はやめなさい、カーメンマン君、メダリオ君。」

ヴァンプはコンロの火を止めると、玄関に走った。

カノンも後を追う。

そこにいたのは…干からびたミイラ怪人とピンク色で筋肉ムキムキで両肩に砲台を担いでいる怪人だつた。

「ん？ そいつは？」

ピンクの怪人がカノンに気が付いた。

「ああ…しばらくウチに居候することになつたカノンさん。

カノンさん、こっちのミイラみたいな怪人がカーメンマン君。

それでこっちの怪人がメダリオ君。

二人とも川崎支部の怪人よ。

…………それで、どうしたの二人とも？」

「俺は何もしてねえよ。」

「お前が前に飛び出したから、車が側溝にはいつたんじゃねえか。」

見ると中古車と思われるビツツが側溝に片輪落ちている。

「だいたい、お前が安全運転に心がけてないからいけねえんだろ？ あんなサングラスかけて、かつこつけて運転しているのがいけねえんだ。」

「お前こそ、しっかりと周囲を注意しねえからいけねえんだ。いい加減、呪うぞ！ ！」

「事故は100%運転者が悪いんだよ！ 」

「被害者にも責任あんだろ！ ？」

「はいはい、二人とも落ち着いて。」

ヴァンプがいつまでも言い争いを続けそつない人の間に入る。

「とつあえず、そのままじやじ近所に迷惑だから、車をひきあげよう。」

「近所迷惑を悪の組織が考えていいのかよ……」

「ヴァンプ様……やつしたいのはやまやまなんですが……俺、昨日レッドに腕折られてて……」

確かにメダリオの片腕にはギブスがまかれていた。

「やつだつたわね……困ったわ……私、明日は町内の清掃だから、手を痛めたくないのよ……」

そういう問題か！？

心中でシッコむカノン……カーメンマンはミイラだからヨボヨボで力なんて皆無そうだし……ヘルウルフたちは無理そうだし……戦闘員とタイザつて怪人は留守だし……

「……仕方ない……」

カノンは指一本で車を持ち上げると、側溝から出した。

「……でいいか、カーメンマン？」

「あ……ああ……」

なるべく一寧におひすカノン。

「あー」いわカノンちゃん……」

「レベル高え～。」

感心するカト、ン♪♪とメダリオ。

「……」じゆく、出来なじで世界征服なんてムリだろ……」

思わずカトの言ふやうにカノンだった。

## FIGURE 4 ハヤラの呪い（後書き）

ハヤラはもう少く、カーメンマンのことです。  
ちなみに彼の必殺技は『太古の呪い』…。  
メダリオとカーメンマンは悪友同志つて感じですね。  
…あまり悪友感がだせませんでしたが…

## FIGHT 5 ヴァンプ、殺人兵器を手に入れる！

FIGHT 5 ヴァンプ、殺人兵器を手に入れる！

「カノンさんって… プラモ MODEL 得意ですか？」

「プラモオ～？」

寝転がってテレビを見ていたカノンは、青白い顔のヴァンプを見上げた。

「悪い… あまり得意ではない。

… といふか… 遊んでいる暇があるなら、さっさと世界征服しろよ…！」

「遊んでなんかいませんよ…！」

本部から送られてきた『RX77+』を組み立ててたんです…！！

「… なんだそりや？」

みるとヴァンプの足元には、彼とほとんど同じ背丈の箱が置いてあつた。 中には巨大なプラモのパーツ… 一部、組み立てようとした痕跡があるが…

「俺に聞きたいうことは… 苦手なんだな？」

「そりなんですよ… 自慢ではないんですけど、掃除や料理は得意なんですけど、

こりこりのは苦手なんですよ、私。」

はあ… とため息をつくヴァンプ…

「…」これは、フロシャイムが開発したロボット型兵器の試作品で、レッドさん抹殺用なんです。

平均的怪人より強いとされていて、

初期動作の調査などモニターとして川崎支部へ部品の状態で送られてきたんですよ。

…そうですか…カノンさんもできませんか…

「戦闘員も今田は出かけているからな…」

…そう…本日、支部にいるのはヴァンプと居候のカノンくらいだった。まあ…天井に住んでいる謎の生物がいるが、そこは気にしないでおぐ。

「…しかたないです。

またレッドさんにお願いしてきます、私。」

「そうか…ちょっと待て…！」

『また』ってことは前にもあつたのか…?』

「ええ。…」これ、『+』なんですよ。つまり試作品一回目つっことなんです。

『今度こそは…!!』って思つたんですけど…

前作より機能性をUPした結果、より複雑になつてしまつたらしくて…

私にはもう歯が立たないんです。』

「だからつて…レッドつてやつはその…『敵』だろ?」

カノンはまだ会つた事がないが、相当強い正義の味方…

それが天体戦士・サンレッド。

…白銀聖闘士並の小宇宙をもつ川崎支部の怪人達を手駒にとる正義の味方…

「でも…『困った人』を助けるのが『正義の味方』じゃないですか？」

「『困った人』じゃなくて、お前は『困った悪の組織』だろ！？とにかく！…敵に助けを求めるようなことはするなって…」

カノンは起き上がって設計図を見た。

…正直ちんぶんかんぶんだ…

カノンは今年で28なのだが、育った土地があまりにも偏狭だったため…

また、彼自身があまり細かい作業が得意ではないため、プラモモデルは苦手だ…

「…仕方ない…ちょっと待つてろ。」

カノンは十円玉をいくつかポケットに入れると、公衆電話へと走った。

…ある男に救援をもとめるために…

## FIGHT 6 ヴァンプ、殺人兵器を手に入れる！ ＜後編＞

FIGHT 6 ヴァンプ、殺人兵器を手に入れる！ ＜後編＞

「へえ～等身大のプラモか。

こんなものも作れないのかよ、カノン。」

「仕方ないだろ？やつたことがなかつたんだからな。」

「にしても……なんで電話……よりもよつて公衆電話から俺の携帯にかけたんだ？」

フツーに小宇宙をつかつた念話をつかえば、金かからないのに……

テレパシー

「プラモ……というか、サンレッド抹殺用ロボ『RX-77+』を組み立てながらカノンに話しかける男がいた。

カノン同様、明らかに外国人と一目でわかる風貌をしている。人目を引く青髪の長い髪の持ち主……

彼の名前はミロ。ギリシャ人でカノンの友人で蠍座の聖闘士をしていた。

「……下手に小宇宙を高めたら、サガにバレるだろ……」

「あー確かにな。

……つてか、ここに書いてある『サンレッド』ってなんだ？

「あ……それは……」

「正義の味方ですよ、ミロさん。」

そう言いながら、麦茶と菓子を運んでくるヴァンプ……

「正義の味方かあ……つまりこれは、その正義の味方を倒すロボなんだな？」

「……まあな。」

「くえ～。なんか面白いな。」

と言ひながら組み立てるミロ。……結構楽しんで作っている…

「いいのか? ツツ「まなぐて…」

聖闘士も…まあ、一種の正義の味方みたいな感じだ。カノンは正規の聖闘士ではないが、ミロは聖闘士…しかもその中でも頂点にたつ十二人の一人だ。

そんな易々と悪の組織に協力していいのだろうか?…自分で頼んでおいてなんだが…

「だつてさあ、万が一、俺たちを襲つてきたら一瞬で粉々にする自信あるし。

それにカノンが認めた悪の組織だろ?

昔のカノンだつたら分からぬが、今のカノンが認めたなら、いい奴なんだよな?」

「ありがとうございます、ミロさん!いい奴だなんて…」

「うぬうぬはじめたヴァンペ…」

(…認めたというか、居候をせてもうつているので逆らいつりこというのが、現実なのだが…)

カノンはなんとも言えない気持ちになつた。

…ミロは、一度『仲間』と認識した奴を売るようなマネは決してしない男だ。

だから、今回、彼に頼んだということもあるが…

いくらカノンを居候させているからと言ひて、そう簡単に人(…と

「うより怪人）を信じていいのだね？』

「とにかく……このこと、誰にも言つてないよな？」

万が一、サガにばれたら大変だ。念を押すカノン。

「もちろん……仕事のあるカミコの代わりに、アイツの弟子の氷河に手紙を届けるつていう名前があるからな。」

鞄からハーネッター程の厚さのある封筒を取り出した。宛先の部分には『氷河へ』と書いてある。

「……それ、本当に手紙か？」

「みたいだぞ。書くのに一日かかったんだってさ。それから……サガが心配してたぞ？」

「……そうか……まだ、帰らないからな。」

アイツの泣きが入るまでは……」

「ふうん……ほら、終わつたぞ。」

ちゃんと組み立て終わつたようだ。

気が付くと、もう夕田が部屋に差し込み、あたりを蜜色に染める時間帯になつていた。

「ありがとうございます……これ、ほんのお礼です。」

ヴァンプは川崎名物『たろづの夢最中』を渡す。

満面の笑顔でそれを受け取るカノン。

「サンキューな、ヴァンプ……また何かあつたら呼べよな。それからさあ、区切りついたら帰つてこいよカノン。」

「サンキューな、ヴァンプ……また何かあつたら呼べよな。それからさあ、区切りついたら帰つてこいよカノン。」

「ああ。悪かつたな。」

ミロが去っていく。

…持つべきものは、友人だ…  
カノンはそう思った。

……さて、後日談だが……

ヴァンプが翌日のレッドとの決闘で、

『RX77+』を起動させたのはいいのだが、起動させた瞬間に、なぜか怒り爆発させていたレッドによつてバルンバルンにされてしまつた。

なんでも…

「次、似たようなものが送られて来たら、真つ先に俺の所にもつてこい！！」

つと約束させられていたのを、ヴァンプはすっかり忘れていたようだ。

忘れていたヴァンプもヴァンプだが、

「俺の所にもつてこい！！」

つて言つたレッド（正義の味方）もレッドだよな…と思つたカノンだつた。

## FIGHT 7 間を照らす黄金の光

FIGHT 7 間を照らす黄金の光

「えつ！？カノンさんって、ギリシャ人だつたんですか？」

川崎支部の昼休み…カノンが他の怪人に混ざつてカツブ麺をすすつ  
ていると、

カメ型怪人・ガメスが驚いた声を上げた。

「ああ…」

「ギリシャって…あんまりいい思い出がないんですね…」

「行つたことがあるのか！？」

「ええ…たしか十四年前ですが…海でぼんやりと泳いでいたら、い  
い海流に乗つてしまい…

そのまま泳いで、ギリシャまで…」

ガメスの顔に、少し青い線がはいつている。

「そんなにいやな思いでだつたのか？」

「はい…実は…」

——回想シーン——

ガメスは達成感を感じていた。

まさか、こんな遠くまで泳げるなんて、考えたことがなかったからだ。

心を満たす達成感…そのまま岩肌に身体を預ける。

…泳いでいた時はエキサイトしていて、気が付かなかつたが、今になつてドツつと疲れが押し寄せてきたのだ。

「…おい、なんだあれ？」

子供の甲高い声が聞こえる。

うつすらと目を開けると、そこには茶髪の少年と青髪の少年…一人の共通点は、黄金に輝く鎧を着ていること…

ギリシャではやつているのだろうか…とガメスが考えていると…

「カメだよミロー！大きいな。」

「へえ～つまそっだなあ…アイオリア…」

ミロと呼ばれた青髪の少年が涎を垂らしている。

「あよ・・・食ひのかミロー…？」

アイオリアと呼ばれた少年が啞然としている。

「『おいしい』って実家にいた時に隣のオッサンが言つてた。それに…腹減つてるし…」

「だ…だが…カメを食べるつて…」

グウウ～

アイオリアの腹が鳴り響く…

「確かに、兄さんとの修行で、腹と背中がくつつきついだ…  
ためしに食べてみるか！」

パンツと手をたたくアイオリア。

「えつと… まずは首を絞めた方がいいのか？」

と言しながら、ガメスの首に手を回すアイオリア。

「あ… あのお… 僕を食べても不味いと…」

じたばたしながら必死で抗議するのだが、残念ながら、それは一人  
に伝わらなかつたらしく…

「首絞めるより、腹を切つた方がいいんじゃない？」  
「でも… ナイフないし… どうせなら、甲羅を俺の拳で割つたりどう  
だ？」

「おお！ いいなそれ。」

「待ちなさい！…」

ぴたつとアイオリアとミロの動きが止まつた。

視線の先にいたのは、麻呂眉の少年と金髪で田をつむつている少年  
… じゅらも、黄金に輝く鎧を着ていた。

「ム… ムウにシャカ！？」

「むやみやたらの殺生をしてもいいと思つていいのかね？」

「いくら、あの筋肉馬鹿… いや失敬… アイオロスとの修行でくたび  
れていのだとして、も、

カメを殺して食すなど… かわいそつではないのですか？」

「で… でも…」

「私たちに逆らうといふのかね、ミロ？」

仮に、大地に額をこすり付けて私を押むのであれば、考え直してもいいが……」

「誰がシャカなんて押むかよ……同じ年だろ？」

「いや……ミロ……なんかツツ『ミロ』じろが違う気が……」

「ともかく、カメをいじめちはなりませんよ。」

「いじめてなんてない！食べようとしただけ……」

「それをイジメというのですよ、アイオリア。」

「……文句をそれ以上いふのであれば……」

「いたしかたない。」

シャカがなにやら印を結ぼうとする……

「すまんシャカ！」「悪かつたシャカ！ムウー！」

駆け出して逃げてしまつたアイオリアとミロ……。

この時、本当にこの、ムウといつ少年とシャカといつ少年が、天使に見えた。

まるで、闇に照らされた一筋の黄金の光のよつ……

「さあ……カメよ……」

音もなく近づいてくるシャカとムウ。

「……いじめつこれから助けた礼だ。」

「いまから私達を『竜宮城』へ連れて行け。」

「はい？」

おもわず声を出すガメス……

「いじめっ子から助けられたカメは、竜宮城へ連れて行ってくれるのですよね？」

『浦島太郎』でも『銀』の『竜宮城編』でも、カメは恩人を連れて行つてくださつたではないですか？』

「いや……」

「さつさと連れていきたまえ。」

「…知りません…」

「クスッ…嘘はいけませんよ？」

「仕方ない…竜宮城に連れて行く気になるまで、五感の一感ずつ、はく奪していくか…」

「それとも、私達を連れて行く気になるまで、私の『スター・ダスト・レビュー・リュー・ショーン』

を食らい続けますか？」

二人とも笑みを浮かべながら迫つてくる…

だが、明らかに彼らからは漆黒のオーラがにじみ出でていた。

ガメスはいじられキャラなので、ひょんなことから命の危険を感じることは、わりとあつたが…

ここまで恐怖を感じたのは、始めてだつたりしたのだった。

――回想シーン・終了――

「…」のあと、彼らの『保護者』となる少年…たしか、アイオロスとサガという二人がやってきて、

彼らを引き取つてくれたから帰つてこれたようなモノの…」

ぶるぶる…と当時の恐怖を思い出し、震えるガメス。

「そ……そつか……きつと、そいつらは例外中の例外だと思ひついで。」「そりですよね……あつ……もう休みも終わりなんで行きます。」

時計を見たガメスが去っていく……

（……なにやつてたんだ……アイツら……）

ガメスの話に出てきた、カノンのよく知った少年たち……  
……食べるだの、竜宮城に連れて行けだのの前に……  
……まず、カメがしゃべるところにツツ「めよーつと思つた、カノン  
だつた……。

## FIGHT 8 忍び寄る魔の手

FIGHT 8 忍び寄る魔の手

「……何を託さんでこる……」

カノンは立ち止ると、振り返らずに言った。

「……早く答えないか?……俺の背中は感じている……。」

背を焼くような、すさまじい殺気をな。」

「フフフ、『氣』がきましたか……カノンさん……」

あなたは……本当は正義の味方なんじやないですか?」

「……俺は正義の味方なんてたいそくなものではない。」

「どちらかといふと悪よ。」

俺は兄とは違い、悪の心しか持ち合わせていないのだからな。

「……それよりも、なぜ俺が正義の味方だと思った?」

カノンはまだ、後ろを振り向かずに言った。

徐々に小宇宙を高めていく……

「……知りたいですか?……それは……」

「目見たときから、ぶつ殺したかつたからです!……」

「なんだその理由は!?」

振り返ると、そこにはいたのは、額に『F』というシールがついた、ヒーローのような戦闘服を着ている、  
全体的に黒いイメージの青年……まあ……マスクで顔が見えないの

で、なんともいえないと、  
声の具合からして、自分より年下だらう。

「…………なんだ? お前……『正義の味方』から『怪人』に転職した

「…………お前は…………フロシャイムの一員なのか?」  
「はい。フロシャイム怪人のナイトールです。」

「なんだその薬みたいな名前は!?

「…………まあいい…………その…………ほんとに理由はそれだけなのか?」

「う~ん…………そうですね。」

なんか、レッド先輩を見ているみたいな気分になるんです。  
カノンさんってなんかこう…………ただ見ているだけで『ぶつ殺してえ

!……』って

思うんです。

あつ…………他の怪人さんはどうかわかりませんけど。」

「…………そうか…………」

ナイトールの話も分かる気がする。

今までこそ、『一般人』だが、少し前まで、兄……サガの代理の聖闘士として、世界の平和を護る……いわば、正義の味方のようなことをやっていたのだ。

「…………ん?…………ちょっとまて。」

「お前…………さつき、レッド『先輩』つていつたか?」

「はい。」

「…………レッドつて…………よくヴァンプが対決挑んでる相手だろ?」

「つまり、正義の味方だよな?」

「はい。天体戦士サンレッドは僕のヒーロー時代の先輩なんです。」

ケロッとしたかんじで言つナイトール。

のか？」

「そうですよ。元々は『ナイトマン』について、山口県出身のヒーローで、

一族みんなヒーローの家系なんです。

実は、ヒーロー界の期待の新人だつたんですよ。」

「一族みんなヒーロー！？……そ……それなら、なんで怪人に？敵だろ？」

「えつと……それは……」

少し恥ずかしそうな感じのナイトール。

だが、意を決めたのか、うつむき気味だつた顔を上げて、しつかりカノンを見た。

「なんというか……幼いころから、『自分はヒーローじゃなくて、怪人になりたい』って思つてたんです。

みんなでヒーロー『』とかやつても、なんか……『』いんなの自分じやない！』って……

物心ついた時から感じてたんですね！

『身体と心が違う』って……！」

「……どつかで聞いたことのあるような、告白シーンだな……。」

なんとも言えないカノン……

「で……その……一族は知つてるのか？お前が転職したつてこと？」

「はい。最初は反対していたんですけど、ヴァンプ様が電話で説得してくれたんです。

『息子さんの人生は息子さんのモノです！！』って。」「なにやつてんだよヴァンプ！？」

フツー、怪人がヒーローに電話かけるか！？……ってか、それで説得

されていいのか？

「父さんが言つてました。『悩みに気が付いてやらなくて』『めんなつて…』

「いや、フツー気が付かないと思うぞ？  
ヒーロー一族に怪人になりたい奴がいるつて発想がまず思いつかんと思つ…」

……というか、まずなんでヒーローをフロシャイムに入れたんだ！？  
そのカノンの疑問に気が付いたのか、ナイトールは答えた。

「ヴァンプ様曰く『来る者拒まず』らしいですよ。」

「拒めよ…！」

「まあ…そこが、ヴァンプ様の長所といつひと  
そろそろぶつ殺していいですか？」

「はああ…？」

的外れの声を出してしまったカノン…

そういうえば、そんな話だったなあつと頭の片隅で思い出す。

「……小宇宙は……白銀聖闘士の驚座並みか…  
いいだらう、受けて立つ。」

少し構えるカノン…そして…

「あつ…すみません…対決はまた今度でいいですか？」

時計をみてあわてるナイトール。

「どうした？」

「実は、きょうは兄のナイトブラザーが僕のアパートに泊まりに来  
るんです。」

「はい?」

「なんでも、山口県に足を踏み入れたら、ヒーローとして怪人にな  
つた僕と戦うらしいんですけど、  
山口県外だと、フツーに家族として付き合ってくれるみたいなんで  
す。」

えっと…迎えに行つていいですか?」

「……………行けよ。」

「ありがとう」「や」

次は必ず、ぶつ殺します!!」

ナイトールは笑顔で駆けていった。  
はあ…………とため息をつくカノン。

こいつらが世界征服を完了する日が来るのだろうか……

ひゅ～っと風が吹く、夕方の出来事だった。

## FIGHT 8 忍び寄る魔の手（後書き）

魔の手とは、もちろん、カノンをぶつ殺そうとしているナイトールのことです。

一応、フロシャイム怪人達の中でも強い連中は、白銀または青銅聖闘士並みの力を持っているという、設定にあります。ちなみに、レッドは黄金並みの力ということです…

## FIGHT 9 灼熱の炎熱地獄！？

「ふふふ…我がフロシャイムの怪人達よ…」

怪しげな空気が漂つ作戦会議室（居間）……

将軍・ヴァンプの前に勢ぞろいするは、川崎支部の怪人達…

「ついに、この日がやってきた…思い出せ、我らの悲願を、今日こそ叶えるのだ…！」

槍を宙に向かつて突き出すヴァンプ。

…ようやく、世界征服つぱくなつてきた…と思つカノンだつたが…

FIGHT 9 灼熱の炎熱地獄！？

「なぜスーパー銭湯に来ているんだ！？」

そこはスーパー銭湯の番台…

「え…だつて、前に支部のみんなと骨休めで来ようと思つた日に、レッドさんからの呼び出しがかかっちゃつて、来れなかつたんです。

「だから前から予定してたんですよ。」

「アノなあ…」

「あつ！心配しないでください…！カノンさんの分は私が払いますから。」

「そういう問題じゃない…！」

…少しでも、こいつを見直した自分が馬鹿だった…と後悔する力ノン…

その時だつた…知つてゐる小宇宙を感じ、カノンは思わず青ざめてしまつた。

「馬鹿な！なぜ奴らが！？」

「？どうしたんですか？」

「悪い！俺は先に帰つていいか！？」

必死な形相のカノン。いまいち状況が分かつていない、ヴァンプ。

「ま…まさか…温泉嫌いですか！？」

「いや…そうではなくて…アレだ！俺はギリシャ人だから…」

「大丈夫ですよ。怪人も入れますし、目立ちませんよ。

それにこの後、みんなで外食しようと…」

「僕はこどもじゃないやい…！」

みるとウサコツツ達、ぬいぐるみ型怪人・アニマルソルジャーの面々が番台で切れていた。

「どうしたの？ウサコツツ？」

「あつ！聞いてくださいよ、ヴァンプ様！」

『「ココは12歳以下はいらっしゃいけない』って言われて、入れさせてもらえないんですよ…？』

「…」

プリンスカプリンスカしているウサ「コツツ。

「それは仕方ないなあ～俺と外で待つていいのか！？」

「そうですね。カノンさん、アニソル達と待つていてくれますか？」

「そんなあ～」

「僕たち、入れないんですか？」

抗議の声を上げるアニソルの面々……だったが……

「ほり、ここにいると邪魔だぞ……」

ひょいっとカノンに抱えられて、そのまま外へ出されてしまった。

「……間一髪だな……」

知っている小宇宙と鉢合わせにならなくてすんだようだ。

「だが……なぜ奴らがここに？」

疑問に思うカノン……なぜなら……その小宇宙とは……

「ん？」

「どうかいたしましたか？」

「……いや……カノンの小宇宙を感じたような気がしたのだが……」

その人物はあたりを見わたした。

「いませんよ。あの双子なんて…

疲れがたまっているから、そう感じます。

せっかくここまでいらしたのですから、羽を伸ばしてください。」

「……だが……不安でな。俺達が帰った時に、執務室が崩壊しているのではないかと…」

「安心してください！あの『万年サボリ』と『ドジ馬鹿』がさぼらないように、

私がしつかり対策をしてきたので…

だから、おくつろぎください……ラダマンティス様…」

そつ……じい……スーパー銭湯に来た、カノンの知っている小宇宙とは、

冥界三巨头の一人にして、カノンと命の取り合いをした男……翼竜のラダマンティスと、その部下一同だつたのだ！

カノンはやり過げすことができるのか…？

## FIGHT 10 進化する魔物

### FIGHT 10 進化する魔物

「ねえ、カノン。なにビクビクしてるので？」

「うつ……いや……なんでもないぞ！」

ウエストポーチをつけたネコ型のぬいぐるみ怪人。アーマルソルジャーの一人・デビルネコが心配そうにカノンを見上げる。

「そう?なんでもいいけど、ストレスをためるのはいけないよ。僕みたいに、円形脱毛症になっちゃうから。」

「……僕みたいに?……お前、円形脱毛症になったことがあるのか?」「うん……そうなの。……自然治癒はしたんだけどね……実は、そう見えないかもしないけど……家庭の事情で……」

そのさきの言葉は風が強く吹いていたので、カノンの耳まで届かなかつた。

「……つてことなの。」

「……そつか……」

とつあえず、ひきつった顔で答えるカノン。

「あれ?そつこえればウサちゃんとアチャーンは?」

「ああ……あこつひませ、やここで寝てゐる。お前も面倒でもしたひだりつあらわす」と呟きを見わたす「ビルネ」。

「ああ……あこつひませ、やこで寝てゐる。お前も面倒でもしたひだりつだ？」

「うそ……やうあるよ。」

寝息を立て始める「ビルネ」…

さて……とカノンは小宇宙を探り始めた。

…先程感じたラダマンティスとその部下たちの小宇宙は銭湯の中…  
ひとまず、ここでおとなしくしていれば、バレずにやつ過せりせるだ  
らう…

…と考えていた時だつた。

「あれ、カノンさんですか？」

そこにはカノンに近づいてくる歯しげなマントの男…

「だれだ？」

「あ……顔が見えませんからね。」

はらりと頭部をあらわす男、触覚が生えたそいつは…・・・

「ラダマンティスの部下の地妖星ペピコンの//マーーー?」

「覚えていてください、光榮です。」

「そりや……お前はインパクトあるからな……。」

牡羊座のムウから//マーーのことを聞いていたとはいえ、実際、聖戦後にアテナの護衛で冥界へ行つたとき//マーーを見て、マジで化け物かと思つた。

「…なんでカノンさんがここに…」

私はラダマンティス様の護衛で来たんですけど…」

「ああ…ちょっといろいろと事情があつてな…頼むから誰にも言わないでほしい。」

「…事情?…まあ…黙つておきますけど…」

「ありがとな。で…なんでお前は銭湯に入らないんだ?」

ミコーは悲しそうな顔をした。

「私は田立ちすきますから…」

「だが、その触覚と羽は冥衣の一部なのだろ?…だったら脱げば問題ないんじやないか?」

聖闘士が聖衣という鎧を着るより、ミコーたち冥王ハーデスに仕える冥闘士達も冥衣という鎧を纏うのだ。かなり凝ったデザインとはいえ、ミコーの蝶のよつた羽や触覚も冥衣の一部であることに変わりはない。

「ダメですよ!私の特徴がなくなつてしまいますよ…!」

それに、この地妖星の冥衣は簡単に取り外しきないんです…!」

「……そなのか?」

「はい。私の冥衣は成長するんです。」

第一形態のスライム上の卵 幼虫 マコ 最終形態の成虫…つまり蝶へと進化するんですよ。

だから、いま、冥衣を脱ぐと、せつかく最終形態になれているのこ、一瞬で第一形態に戻つてしまふんです!」

だから、自宅で風呂に入る時も、冥衣装着のままシャワーを浴びているんです。

…ですが、ここは公共の場……タオルも許されていないのだから、

冥衣なんてもつてのほかでしょ？』

はあ…とため息をつくユニークー…だが…

「問題ないんじゃないか？」

「！？」

「お前はそのまま入つても人間に見えないから平氣だろ。』

『私は怪人だ』って言えば、こここの職員も納得するだろ？…』

『怪人！？私はれっきとした人間です！…』

『いや…見た感じ人間には見えないから安心しろ。』

九条（作者）もWikipediaで、

『年齢：19歳。身長：178cm。体重：65kg。誕生日：1

月27日。血液型：B型。出身地：オーストリア。』

というデータを見るまで、人間とは気が付かなかつたそうだぞ。ほんとうに触覚や羽が生えているのかと思ったそうだ。』

『……ですが…怪人が銭湯に来ていいのでしょうか？…』

『問題ない…！…』

きつぱりと言い放つカノン。

「どこからどう見ても蛾の怪人…モスキーやどつからどつ見てもモグラの怪人…モギラとモゲラも堂々と入つていつたから、問題ない。』

『蛾？モグラ？…いまいちよくわからないんですけど…』

『入ればわかる。とにかくお前はそのまま入つても全く問題がないということだ。』

『本当にそうですか？…ですが…本当に私はニシング…』

『はつ…！…』

バツとカノンの横で寝ていたデビルネコが飛び起きた。

「どうしたー？」

「……………まだ…

最近よく自分の匂いで田覚める」とが多いんだ…」

不幸オーラを放ちながら答えるデビルネコ。

言われてみれば、デビルネコから加齢臭が漂ってきた気が…  
「この間のメンテナンスの時に匂いを落としたつもりだったのに…  
ん? その怪人だれ、カノン?」

まつすべ//コーの方を向いて尋ねるデビルネコ。

「ほら、怪人に見られたじゃないか。 …? //コー?」

//コーの動きが止まっていた。

「ね…猫のぬいぐるみがしゃべって…」  
「僕はぬいぐるみじゃないの。ぬいぐるみ型怪人のデビルネコって  
いつの。」

「…や…せっぱつ…言語を操つて…」

半ば放心状態の//コー。

「そんなに驚くなら、まず自分の顔を見ろよ…」

カノンは呆れ声で言つたが、//コーは聞こえていないのか、返事は  
なかつた。

ちなみに、彼の放心状態がとけて、結局、冥衣を着たまま銭湯に入

つていったのは、それから15分後のことだった。

## FIGHT 10 進化する魔物（後書き）

「進化する魔物」とは、ミューの通り名です。

ミューはどこからどう見ても怪人です。最終形態で人間型になったとしても、

リアルな蝶の羽と触覚があるので、どう見ても人には見えません。

「デビルネコ」は、見た目可愛いのに、中年男性みたいな悩みを抱えているキャラです。

ちなみに、彼のウエストポーチには糖尿の薬…インシュリンが入つているそうです。

もう少し、銭湯ネタが続く予定です。

## FIGHT 11 翼竜部隊現る！（前書き）

この回は、ラダメンティスの部下、<sup>てんじくせい</sup>天哭星ハーピーのバレンタイン視点で書きます。

それでは、どうぞ。

## FIGHT 11 翼竜部隊現る!!

FIGHT 11 翼竜部隊現る!!

「…いかがでしょつか、ラダマンティス様。」

白い髪をもつた田つきの鋭い青年が言った。

彼の名前は、天哭星ハーピーのバレンタイン。

目の前にいる金髪の男…どう考へても外見年齢20後半…本当は23歳の天哭星ワイバーンのラダマンティスの腹心の部下であり、今回日帰り温泉旅行を計画した張本人である。

冥闘士の中でも最強の強さを誇るラダマンティス…だが、彼は典型的な中間管理職的ポジションなのだ。

毎日毎日…仕事を何かにつけてサボる同僚のアイアコスとミーノスの二人の分の仕事をこなし、

ついでに上司(?)で毎日遊んで暮らしている双子神の仕事までこなし…

…『今の冥界は彼がいないと成り立たない』と言われるほど、仕事をこなしている。

そのせいで、彼の食事は朝・昼・夕…カロリーメイトとビタミン剤なのだ。

…23歳健全男子が、仕事が恋人なんて…なんか部下としては泣けてくる。

そのうえ、最近、死相が本気で無視できなくなつてきているのだ。

そこで、バレンタインは、今回の日帰り旅行を企画したのだ。

日頃から、しつかり働いている功績を上司に認めてもうこ…そして、少しでもラダマンティス様の死相が消えるように…

「ああ。いいぞ。…日本の温泉はいいものだな。

…それにしても…やはり執務室が…」

「問題ありません。」

間髪入れずに答えるバレンタイン。

「ファラオに賄賂を渡して、  
万が一、アイアコス様とミーノス様が執務をほつたらかした場合は、  
遠慮なく魔琴を奏でるよう言いつけてあるので…」

ファラオというのは冥鬪士の一人で、重苦しい音色で人間の神経を  
狂わせる魔琴の使い手だ。

ラダマンティスは同僚が置かれている立場を少し哀れに思ったのか、  
少し眉をしかめた。

「仕方ありません。そもそも…あの一人がしつかりと仕事を普段からラダマンティス様に押し付けている罰が当たったのですから…」

「いや…そうではなくて…俺は少し疲れているようだ。」

そういうと、ラダマンティスは目を押さえた。

少しじやなくて、死相が目に見えて分かるほど疲れているのでは?  
…と思つたバレンタインだつたが…

「…………なんですか…アレは…」

思わず、バレンタインはつぶやいてしまつた。

「！？やつぱりバレンタインも見えるよな！…よかつた…」

同じくラダマンティスの部下の天捷星<sup>てんじょうせい</sup>バジリスクのシルフィードが、ほつと息をついた。

二人の目線の先にいたのは……

「いやあ…マジ暑いっす…そろそろ俺、出させてもらいますわ。」

そういうながら湯船から上がるの……人間サイズのカラフルな蛾<sup>…。</sup>

「アレは……ミューの仲間か？」

「いや……一応ミューは人間ですけど……」

「あれは……本物の蛾ですよね？」

ひそひそと話す三人……

「ガルル……いい湯加減だぜ……」

横から聞こえる獸の唸り声……

「虎？」

見るとそこにいたのは……人間のように湯船につかっている虎<sup>…</sup>

「おい、バレンタイン！…」こいつて本当に人間の温泉なのか！？  
「さつきから人間外の奴らをよく見かけるんだけど…」

文句を言いに来るのは天牢星<sup>てんらうせい</sup>ミノタウロスの「オーデン」と、天魔星<sup>てんませい</sup>アルラウネのクイーン。

「彼らにも見えてこるとこり」とは、あの生物たちは幻術ではないといふことだ。

「いつたい……」されは……

「……ラダマンティス様……」

「……ミコー……」

「ぶつぶつお湯をかき分けようつに歩いてくるのは、冥衣着用中のミコーだった。

「お前!? なんで……」

「え……えっと……」のままでもいいかと思いまして……せりせ、私は人間には見えませんし……

それよりも、私だけ、もつ一日・休暇をもらえないでしょうか?」

「? なんでだ?」

「実は……」

「あつ! あなたがミコーさんの言つてこたラダマンティスさんですか?」

やつてきたのは、温泉なのに、兜をかぶつている男……

「ああ……お前は……」

「私、悪の組織・フロシャイム川崎支部の將軍・ヴァンプと申します。」

実は、明日、宿敵の正義の味方・レッドさんとの対決があるんですけど……

今回の予定していた怪人のリギー君が、『もつレッドとは戦いたくない』って言ってきて……

困っていたら、ミコーさんが、

『正義の味方なんて、私の手にかかれればイチロロですよ』

って言つてくれたんです。

明日の対決には、ぜひ、ミコーさんをお借りしたいんですけど…あつー明日だけでいいんです。無理にとは言こませんが…ようして でしょうか？』

沈黙…

「あ…つまづ、ミコーにあと一日、休暇を『さてほしことこうのだな？』

「そうです。』

「なら、この、バレンタインも使つてくれないか？』

「へつー？…ひ…ラダマンティス様？』

なんだか分からぬバレンタイン。そんなバレンタインを見て、少し笑うラダマンティス。

「こじつは、部下の誰よりも、いつもよく働いているからな。

それに、こじつはミコーより強い。

きっと、その…正義の味方とやらを倒す力になるはずだ。』

「ラダマンティス様…』

じへへんつときているバレンタイン。

「べつに私は構いませんよ。

あつーでも、レッドちゃんと連絡を取らないと…』

——数分後——

「あつーもしもし…かよこさん、ヴァンプ。  
……えつ？ヤダ困るう。……そつ……だから、そういう時は～～」

温泉の休憩室で携帯をやつしているヴァンプ。

「あれ…本当に正義の味方とやらに連絡とつてたのか？」

少し不安になる一同。  
なんというか…聞こえてくる内容が明らかに主婦同士の会話だから  
だ。

「…あつ…そつそつ、レッドさんに変わつてもうせませんか？」

よつやく本題に入るよつだ。

「……あつーレッドさん？…実は明日の対決なんですけど、一人怪  
人…というか…えつと…相手を追加してよろしいでしょうか？  
…いいですか？ありがとうございます！…それから、言い忘  
れました…

『明日は冥界の入り口に立つことになると思え、サンレッドよ…』

「

ピッ…と一方的に電話を切るヴァンプ。

「大丈夫です！レッドさん、オッケーしてくれました。」

嬉しそうに話すヴァンプ。

「そつか、短い間だが、部下をよろしく頼む。」

「 イトウジンや、貸していただき、ありがとうございますーー。」

……なんか……よくわからない男だ……と思つたバレンタインだった。

## FIGHT 11 翼竜部隊現る！（後書き）

翼竜部隊とは、ラダマンティス率いるバレンタイン・シルフィード・ミコーなどか所属する精銳部隊のことです。

次回は、ついに原作主人公…サンレッドの登場…予定です。バレンタインとミコーは勝てるのか！？

## FIGHT 12 正義の味方VS冥闘士

…この物語は神奈川県川崎市高津区溝口で繰り広げられる善と惡の壮絶なる戦いの物語である…。

FIGHT 12 正義の味方VS冥闘士…！

「人つて誰でも『成長』することが大事だと思うんです。成長することで、新たなる力を身に着け、前よりも一段階も強さを増す…」

「やかましいわ！…！」

…ここは溝口周辺のとある公園…

ヴァンプの話を遮り、そこに響き渡るは一人の男の声…  
『いかにも戦隊もの』つて感じの赤い仮面<sup>マスク</sup>で顔を隠し、  
『音楽の街 川崎』と書かれたTシャツにジーンズといったラフな格好…

彼こそ、川崎市の正義の味方・天体戦士サンレッドだ。

「れ…レッドさんは『成長』が大事だと思わないんですか？」  
「あんな…だつたら成長してから連れてこいよ…！」

レッドに対峙しているヴァンプ・戦闘員1号2号・白髪の男の横にあるのは…  
巨大なマユだった。

「さ……昨晩までは、ちゃんとミュー君は最終形態だったんですね！！でも、仕事仲間とやつた王様ゲームで……その……罰ゲームで脱ぐはめになつたみたいで……

第一形態の卵に戻つてしまつたみたいなんです。

あつー！でも、ミュー君は努力したんですねーーー！

今日対決があるからつて必死で進化して……

「……で、肝心な対決の時に第三形態かよ？」「ついさつきまでは幼虫だつたんです！

ミュー君は『こうなつたら、糸でグルグルにして成虫になるまで待つてもらうしかない……』

つて言つて必死で進化を我慢してたんですね！一度マコになつたら中々成虫になれないから……

でも、レッドさんが遅いから我慢の限界でマコになつてしまつたんですねーーー！」

「はいはい、俺のせいだよ……つたく……」

やけくそ気味に答えるレッド……。

「……で、そつちの白髪怪人は大丈夫なのか？」

レッドの視線の先にいる白髪怪人……もとい、冥闘士のバレンタイン……  
彼は彼で、ものすごく顔色が悪かつた……

「大丈夫だ……それに怪人ではない……ラダ……マンティス様の部下……  
天哭星……ハーピー……のバレンタインだ……。」

「いや、ぜんぜん大丈夫そうに見えないんだけど……なんかふらついているし……」

「バババレンタイン君は昨日の飲み会で飲みすぎちゃつたらしいんですねーーー！」

同僚のシルフィードつて人が無理矢理飲ませたらしくて……

「どうでもいいよ……ってか、今何用だと思つてんだ！？」

とつぐにバレンタイン過ぎてるだるーが！！そういう怪人はちゃん  
と時期に消化しとけつて何べん言つたら分かんだよ……」

「バレンタイン君は今日だけのアルバイトなんです……」

今日予定してたりギー君がどうしてもレッジでせんと戦いたくないと  
……」

「……あのなあ……なめてんだろ？」

「大丈…夫です…いけます…スワイート…おひまほまおおお。」

必殺技を繰り出せようとし、彼の背後に鳥人間ハーパーが浮かび上がった途端、  
彼はリバースしてしまった。

「きつたねえ！…」

「バレンタイン君！…ちょっと休みなつて！ほら、水でも飲んで！

！」

ヴァンプは持つていた盾に入っていたペットボトルを取り出す。

「…すまん」といしながら飲むバレンタイン…。

「情けないなバレンタイン。」

公園の入り口に現れたのは…

「お…前は…地暗星ちあんせい『ティープの二オベ…？』」

爪のテカい小鬼のような形状をした鎧を着た男…二オベは笑う。

「ラダメンティス様からの命令だ。

『おそらくバレンタインも//コーもろくに戦えんから、お前が行つ  
て来い』だとよ」

「うう……ラダメンティス様……なんとお優しい……うう……おめでとうござ  
まおお」

「ああ！バレンタイン君しつかり……えっと……じゃあ二オベさん、  
やつてくれる？」「もつらんですよ、ヴァンパイアさんよ……」

「オベガレッシュド回を合つて、前回、ヴァンパイアの近くに寄る。

「ドがつててくださいよ……ヴァンパイア。俺の技は……ひそひそ……」

「ヴァンパイアはつなずくと公園の端まで避難（？）する。そして槍を高  
く上げると叫んだ。

「くわくわ……サンレッシュよ……今日じゃお前が、誰を叫ぶ時だ……  
その仮面マスクが役に立たないことを眞界で悔やむがいい……やれ、二オ  
ベ……」

「こくせ兄ちゃんよ……トイーフフレグ……ぐははあ……」

「ああ……なんか甘い香りが……と感じたか感じないかの所で、二オベ  
はレッシュの拳一撃で地面とキスすることになった。

「な……」

「なんだ？ しめえか？」「

恐怖を浮かべる二オベとせめ反対に、けらけら笑ひしちゃ……。

——数分後——

「つたく……何度も言つたらわからんだけよ？」

次、襲つたら……トロカブト（毒草）を口こなせめてやるから、覚悟しとけよ~」

正座したままのヴァンプ・戦闘員・一オベに一通りの説教をすると、煙草を吸いながらレッドは公園を出て行つた。

「……怖い奴だな……あれが正義の味方かよ……」

「ふるふる震える一オベ。」

「トロカブトを口こなせばいいだなんて……怖い怖い……。」

同様に震えているヴァンプだったが……

「じゃあ、次はいつレッドちゃん襲う~。」

と平然に戦闘員に向かつて言つたのだ。

「えええ！？怖くないのか！？」

「だつて……それが私たちの仕事だし……それに、レッドちゃんは口だけだから。」

命を奪うようなことはしない人なのよ。

今日はありがとね一オベ君。これ、回復したバレンタイン君と成虫になつたミニー君と食べてね。

「今日はラダメンティスさんじ。」

盾から包みを四つ取り出し一オベに渡すと、ヴァンプ達は去つて行つた。

「……なんか……どつちが良い奴なのか分からないな……」

ベンチで横たわっているバレンタインがつぶやく。

「ああ……世の中は広いな……」

二オベモヤツヒツヒ、しばらく公園の出口を眺めていた。

ちなみに、ミューが成虫になれた（戻れた？）のは、その日の夜のことだった。

## FIGHT 12 正義の味方VS冥闘士（後書き）

サンレッドは、ヴァンプ達悪の組織が良心的で世間体もいいのに対し、その真逆の存在です。昼間はパチンコで正義の味方が職業なので、収入ゼロ。

恋人の、かよ子さんの家に居候……もといヒモですね。  
戦い方も不良ですし……

地暗星の二オベがやるうとした技は『ティープフレグランス』  
二オベの小宇宙コスモが作り出した甘い香りを嗅いだ人の枢神経を冒し五感を麻痺させ、死に至らしめる……まあ、毒ガス攻撃です。

レッドの仮面は、あらゆる毒ガスも効かないようになっていますが、二オベの毒は、皮膚からも浸透するため、レッドの仮面は効果なしです。

実際、聖闘士星矢原作では、この技で最強の十一人の一人、牡牛座のアルデバランが負けています。

でも……私が思うに、レッドはこの技をくらつても、  
「なにコレ？なんかいい香りすんだけど？」  
って言われて、二オベ終了な気が……。

## FIGHT 13 恐怖！魔笛を奏でる者

FIGHT 13 恐怖！魔笛を奏でる者

「…………本当にいかないの！？」

「行きたくないんです！！」

フロシャイム川崎支部に朝っぱらから響きわたる問答…

「でも、レッドさんとの対決…」

「どうしても行たくないんです…！」

「君ねえ、学校に行きたがらない小学生じゃないんだから…」

「どうしたんだよ、朝っぱらから…」

あぐいをしながらカノンは、個室の前に立つヴァンプに尋ねた。

「あつ！カノンさんも言つてください…！」

かれ、どうしてもレッドさんとの対決に行きたくないって…

「対決って…昨日したばかりだろ？」

カノンの記憶が正しければ、昨日の『ヒーローバレンタイン』  
がレッドと対決したはずだ。

結果は…まあ、彼らが万全でなかつたこともあるが…レッド  
の圧勝だったそうだ。

加勢に来た万全な状態のはずの二オベも全く役に立たず……結局、  
彼は不意打ちでしか勝てないといふことが判明した日でもあった。

「いらっしゃんでも、連日はきつこですよ、私も。」

「じゃあ、なんで…」

「……実は……この中に引きこもつていてる怪人……リギー君っていうんですけど…

彼が本来なら昨日の対決にでる予定だつたんです。

でも……だだこねちゃつて……バレンタインさん達に頼むことになつてしまつたんです。

でも……このままじゃ不味いって思うんです、私。

だつて……レシドさんとの対決スケジュールが崩れちゃいます…

次こそはリギー君に行つてもらわないと困るんです…

だから……とりあえず、部屋から出でもらおうつて…

ヴァンプが青ざめた顔で言つた。

なんというか……海底時代を思い出すカノンだつた。

今は昔……カノンがポセイドンを騙して地上を手に入れようと企んでいた頃…

カノンが筆頭として所属していた海将軍（ジェネラル）という大海を支える7本の柱を守護する7人の海闘士の一人……クラーケンのアイザックが、

『どうしても海闘士（マリーナ）として戦いたくない…!!』

つと、当初は駄々をこねて、北氷洋の柱に閉じこもつたまま出てこなかつたのだ…。

海闘士として目覚める前まで、ポセイドンの宿敵……アテナの聖闘士になるべく厳しい修行をしていたためもあるだろうが、だが、何よりも…ポセイドンの配下として……アテナのために拳を振るう（……はずの）愛すべき師匠（水瓶座の聖闘士）と拳を交える運命になるかも知れないという未来に絶望していた。

そんな現実が受け入れられずに、引きこもつていたのだ。

「……あれはあれで大変だつたな…」

「?どうしたんですか、カノンさん？」

「いや……それなら、てりとう早へりあればいいではないか？」

アイザックを柱から出した時のようだ。

ビックリマン

見事に扉を破壊したカノン。

「ひいいい！」

なかにいたミイラ……といつても、カーメンマンのよつじヒジフトチックではなく、どちらかといつと日本っぽい感じのミイラ怪人小さくなつてた。

「か…カノンさん…！…どうするんですか！？」

問題ない。ちゃんと直す。

たては海底神殿は行くまで船を出さなければならぬが、

「細かい」とは氣にするな。

「ひいそんでもす。

「なんで、そんなに戦いたくないんだよ？」

美が笛を吹くのと、就つたつ邊のかなしきだつで

一度もまともに吹かしてもらつた事がないんです!!

それは当然なんじやないか?と思うカノンだったが

「笛つといつたか？」

「はい、ここの横笛です。」

「……まさか……頭脳に直接響いて相手の精神をズタボロにした挙句、

最終的には身体をバラバラにするような技を使うのか！？」

カノンの脳裏に一人の男が浮かんだ。

「まさか……この怪人……アレの弟子かなんかか！？」

「そ……そんな恐ろしい技使いませんよ……！」

僕の技……『魔笛の音色』は聞いた人の身体の自由を奪うだけです！

「！」

「なんだ……その程度か？」

「そ……その程度……」

なんかカノンの淡白な態度のせいで、撃沈するリギー……  
「どうせ自分は弱いですよ……」つとブツブツ言つている。  
カノンは頭をクシャクシャとかいた。

「……つたく……そんな落ち込むなつて……よつはパワーアップすればいい話だろ？」

笛つかう怪人……ではないが、笛の音色で戦う奴なら一人知つている。

そいつに師事すれば少しは強くなれるのではないか？

（命の保証はしないが……）と心の中で付け加えるカノン……

「ほ……本当にですか！？」

身を乗り出してくるリギー……若干カノンは引いたが、しっかりとソイツのいる場所を教えた。

——その日の午後——

「あ……あの……海魔女<sup>セイレーン</sup>のソレントさんですか?」

日本の某音楽大学に顔を出したリギー。  
そこにいたのは、女性のような顔立ちの男だった。手にフルートを持っています。

「なぜ、海魔女のことを見つけてる?」

少し……いや、かなり疑わしい視線を向けられる。

「えっと……カノ……じゃなくて、バイアンと名乗る人から聞いたんです。

『笛殺法を鍛えるなら彼を支持するところ』って。

『ぐれぐれもソレントの前で俺の名前を言つないで』  
いうならくバイアンと『奴から教えてもらつた』と『ひとしきり。

バイアンなら馬鹿だから、ソレントが確かめようとしたが……いやむやにできそだからな。』  
つと、カノンが厳しい顔で言つていたのを思い出す。

「へえ……バイアンがねえ……あなたはなんて名前なんですか?」  
「リギーです。」

「やつ……リギーって、この……」

「じゃあ……やつそく修行を始めますか。」

ポンっと手を叩くソレント。リギーは笛を持つ手に力を込める。

「……では、簡単なことから始めましょうか。

そうですね……やつぱり『習つより慣れり』っていいますから……私の技をとつあえず受けみてください。」

フルートを口元に持つていくソレント。

リギーの脳裏にカノンが言つていたソレントの技がうかぶ……

「や……」心の準備が……

「死の旋律を聞きなせこ……『トッド・ヒンデシンフォニー』」

「つぎやああああ……」

死の旋律と共に、リギーの切ない悲鳴が辺りに木霊する……

結局、次のレッシュとの対決には、重症で入院中のため出られなかつたりギーなのでした。

## FIGHT 13 恐怖！魔笛を奏でる者（後書き）

『笛を奏でる者』とは、怪人のリギーと海將軍の一人、セイレン海魔女のソレントのことです。

リギーはミイラの人性怪人。戦闘能力は高くないものの、笛を吹く事で相手の動きを封じ込める能力を持ちます（ただし、相手が動いていると効果を発揮できない）。

本編ではレッドが一方的に悪いように書かれていますが、実際には『リギーが本屋で立ち読みしていて対決に遅刻したせいでレッドがキレていたうえ、走ったせいで息が乱れ笛が吹けなかつた。

『笛の音色をカセットテープに録音したが、テープの調子が悪く、効果がなかつた』というように、リギーにも非がかなりあるんですね……

セイレン海魔女のソレントは、歌声で旅人を惑わして死に至らしめたというセイレン同様、自らも横笛の音色で相手の小宇宙を奪う技を使います。

その音色は相手の脳に直接響き、鼓膜を破つても防ぐことはできません。また笛の音は物理的破壊力も備え、黄金聖闘士の血で強化された聖衣をも碎く程の破壊力があります。

リギーの音色が『動きを止めるだけ』に対して『+聖衣さえボロボロにする』ソレントの音色は色々とチートな気がします。

ソレントをカノンが騙していたから、カノンのことをソレントはあ

まり……といふか結構嫌いです。一応、表面上の和解はした……といふ設定にあります。心の底ではまだまだ恨んでいて……という人です。

ちなみに、原作で生き残った数少ないキャラの一人です。

## FIGHT 14 夕暮れ時の着信音

FIGHT 14 夕暮れ時の着信音

「みんな～もうすぐ揚かるよ、サーティアンダーギー

ヴァンプが楽しそうに言つと、戦闘員や支部待機中の怪人達がぞろぞろ（……といつても数体）と会所へ入つてくる。

「あつ！ほんとだサーティアンダーギー」

「おいしいですよね、サーティアンダーギー」

「……サーティアンダーギーとはなんだ？」

疑問符を浮かべるカノン。

「えつ！？カノンさん知らないんですか？」

「当たり前だ。……どこの国の食べ物だ？」

ヴァンプが上げているのは、カノンがのぞいてみる限りだと、丸っこいドーナツのようなモノだった。

「沖縄ですよ。」

「オキナワか……つて、日本の食べ物なのかー？」

カノンが驚きの声を上げるのとソレは同時だった。

ジリリリリリン

やかましい音で鳴り響く電話の音…

「やだあ～もう、だれかしら…

はい、もしもし、フロシャイム川崎支部ですが…  
あ…ロウファー？悪いけど今手が離せないの、私。

サーダー・アンダー・ギー揚げるから、五分後にまたかけてね。」

がちゃり

と電話を切ると、ヴァンプは、いそいでサーダー・アンダー・ギーの元へと戻る。

「ロウファーってだれだ？」

「カノンさんは知らなかつたわね。私の弟で静岡出張所で修行中のよ。

でも…本当にだめな弟で…行く末が心配なのよ、私…  
さあ、出来たわよー！サーダー・アンダー・ギー！」

ヴァンプが皿に盛り付ける。

「ねえ、僕これがいい！！」

ウサコツツが大きい奴を取り立てる…が…

「これは俺の～！」

メダリオが横からかいつらつてしまつた。

「あつーひじいよメダリオ！殺すよー…？」

「殺せるもんなら殺してみやがれ。」

早いもん勝ちなんだよ、ウサ。」

「おめえーは一生カップ麺食べればいいんだよ、だからウサに譲つてやれよ。」

横から口をはさむカーメンマン。

「うひせえなあカーメンーこれは俺のだつてのー。」

「うひせえよー早くウサにあげるよな。文句あんなら呪うぞー。」

「……お前らがつるをこつての……」

「ぼそり……とそういうと、サーダー・アンダーギを口に入れるカノン。口の中で生地のふわっとした感じと、ほのかな甘さが広がっていく。」

「うまいな……これ……。」

「そうでしょ？ おいしいわよね、サーダー・アンダーギ。」

「あれ？ デビルネコは食べないの？」

「あつ……ヴァンプ様……」

「うん…… そうだね、糖尿も最近節制してるからだいぶ良くなつてしまし……」

「いただきますーーー！」

デビルネコもサーダー・アンダーギに手を伸ばす。

「さやかで温かい感じがする匂さがり……が、夕方鳴り響く電話によつて崩れた。」

ジリリリリリリ

けたましく鳴り響く電話の音…  
ヴァンプが電話に出た。

「はい、もしもし。……あつーロウファー？」

「ごめんな、わつきは出られなくて……うん。知ってるわよ。だからもう少ししたら行くつもりだったの。サーダー・アンダーギを持つて。

「えつー？ 乗り遅れたですって！ ？ どうするつもりなの？」

「うん……うん……とにかくとは、その人の家から電話かけてもらっているのね？」

「ちょっと代わってくれないかしら？」

「あつー！ もしもし。私、ロウファーの兄で悪の組織フロシシャイム川崎支部で將軍を務めさせてもらっています、ヴァンプと申します。ほんとうにロウファーが迷惑をおかけして……」

「えつー！ そこまで面倒を見てくださるんですか！ ？ ありがとうございます！」

「何から何までみません……あつー。そうだ。

「お礼を送りたいので住所を教えてくれないでしようか？」 いえ

「いえ、ほんの気持ちだけです！」

「頼りない弟が迷惑をかけちゃって……あつー！ ありがとうございます！」

「電話番号はいいです。通話履歴に残りますし……えつと……」  
(書きものを探す音)

『グランド財團・ギリシャ支部・双児宮・サガ様』でいいんですね？ はいはい。では、よろしくお願ひします。本当にすみませんでした。』

がちゃり

「…………どうしたの、カノンさん？ 顔色悪いけど……ま……まさか、サーダー・アンダーギでお腹壊したとか！ ？」

ヴァンプが蒼白な顔のカノンを見て言った。

「い……いや……なんというか……さつきの電話の相手つて……」

「弟のロウファーです。あの子、今ギリシャに旅行中だつたんです  
けど、

事故で帰りの飛行機に乗れなかつたので、サガさんという人の所に  
泊まらせてもらつてゐるみたいなんです。  
まったく……人様に迷惑かけて……」

「……」

カノンは頭を押さえた。

「本当に大丈夫ですか？」

「ああ……問題ない……ただ、世界つて狭いなつと思つただけだ。」

遠い目をしたカノン……まさか、兄の所にも怪人……しかもヴァン  
プの弟がいるなんて……  
もしかして、自分の使つていた部屋を客間代わりに使われてるのか  
もな……

部屋を蜜色に染める夕暮れ時の出来事だつた。

## FIGHT 14 夕暮れ時の着信音（後書き）

「ヴァンパイアのやつと一品

カノン「おい！なんだこのコーナー！？」

ヴァ「原作で私が担当している料理コーナーですよ。今回出てきた『サーダーアンダーギ』は知らない人が多いみたいなので…特別にやらせてもらうことになったんです。」

カノン「……勝手にしろ……」

ヴァ「では、今回のメニューはサーダーアンダーギです。

材料は	卵	2個	砂糖	120～140g	薄力粉	2
20g	ベーキングパウダー	小さじ1・5	サラダ油	大さじ1	サラダ油（揚げ油）	適量

作り方は簡単！下準備として 薄力粉とベーキングパウダーを合わせて、ふるつておきます。

次に卵を割りほぐし、砂糖を加えて混ぜ合わせます。出来上がったものに薄力粉を加え、粉っぽさがなくなる程度に混ぜ合わせ サラダ油を加えて、混ぜ合わせます。

次に生地を丸めるんですけど、生地がくつ付かないように ちゃんと水で掌を濡らして、大きじ1ほど生地を取り 直径2～3cmくらいに丸めてください。

出来上がつたら、160度くらいの油で揚げるんですけど、この時に手に付けた水が揚げ油に入つて油ハネしないよう気をつけてください。

最後に生地が浮いてきて割れ目ができる、全体にキツネ色になつたら、引き上げ、油を切つて完成！！

一応、揚げ具合が足りないか心配な時は、竹串をさしてナマ生地が付いてこないか確かめたまうがいいかもせんね。

どうですかカノンさん？

カノン「（もぐもぐ…）たつた五分で出来るなんて凄いな……」

レッド「外がカリッとしてるのに、中はフワッとしているし……結構いけるドーナツだな。」

ヴァ「砂糖を黒砂糖にすると、もつと沖縄っぽくなつておいしいですよ～」

カノン「…………あのなあ…………これは川崎市が舞台なんだろ？なんで沖縄料理…」

ヴァ「細かいことは気にしないでください。

そういうえ、次回は『もふつと』さんのリクエストにお応えして、聖域舞台らしいんで、カノンさんや私達はお休みだそうですよ。」

カノン「なつ！？最近あの生物戦闘士に出番とられたり、影が薄くなつてたりしたから、この辺りで

『俺が主役だ！…』って印象付けようとしたのに……」

レッド「あきらめな。これが運命なんだよ。

俺だつて主人公なのに一回も単行本ヨミグスクの表紙になつたことないしな。

」

ポンポンっと落ち込むカノンの肩をたたくレッドだった。

FIGHT 15

聖域に乗り込む悪魔の使い &lt;前編&gt;

「……ああ……ほんとにバラそうかな……」

ミロはそう言つとため息をついた。

現在ミロは聖闘士の総本部…聖域の周りのパトロールをやつていた。本来なら雑兵がやる仕事なのだが、今の聖域には使用可能な雑兵はほとんど残つていなかつた。

原因是サガとカノンの兄弟げんかの延長のせいだ。

…教皇補佐であり双子座の聖闘士のサガ…の弟カノンの家出が発端だ。

…最初の内はサガはいつもと変わらなかつた。  
が…三日ほどしてからおかしくなつてきた。なんとなく、普段と違う雰囲気をかもし出すようになつたのだ。

そして一週間もすると…独り言が多くなつていた…たとえば…

「カノン…なぜこの兄に連絡をよこさない…まさか…のたれ死んだのか！？」

…ふふ…あのスニオン岬でも生き延びられた奴がそう簡単に死ぬわけなかろう…

いや、そうは言つが、アレはアテナの小宇宙のおかげであり…あの愚弟の力ではない！

そもそも、お前に連絡をよこすようなマトモな弟なら、十三年間の

内に一回は連絡をとるはずだろ！？

アレは……きっと海界の整備で忙しかったのだ！！

それならば……

といった独り言が、執務しながら永遠と続いている……はつまつ言つて、怖いからやめてほしい。

髪の色が青から灰色にと田まぐるしく変わつてゐるといひから判断すると、

どうやら田まぐるしく彼の中の人格が変わつてゐるのが分かるのだが……だが、理論は分かつてゐるとはいえ、怖い……。

そして、さらに一週間もすると、それはなくなつたのだが、『神のようだ』と謳われたサガの面影はすっかりなくなつていた。

代わりに、ものすごく乱暴で適当な暴君のよつたなサガ、……つまり、偽教皇時代のサガのよつになつていた。

つまり……そのせいで雑兵の死傷者多数。怖がつて健全な雑兵も里帰りをするモノが多数。

ということで、雑兵不足のため、黄金聖闘士がパトロールに出ないといけなくなつたのだった。

「あ～あ、でも、裏切るわけにはいかないしな……」

この状態を改善したいので、唯一カノンの行先を知つてゐるミロはサガにバラしたかったが、  
彼はミロの友人だ。友人を売ることは自身のポリシーに反するから、  
できない。

となると…カノンが帰つてくるのを促さないと…

「長老…しつかり…！」

人の声が聞こえる…はあ…とため息をつくミロ…  
本来は結界だのなんだのの影響で一般人が入つてくることはないの  
だが、たまに迷い込む輩がいるのだ。（例・城戸光政）  
そういうつた連中を追い出す…というか…安全にアテネ市内へ返すの  
も、パトロールの一環だ。

「おい、何をして……」

ミロはそこで言葉を止めた。

そこにいたのは……

「しつかりしてもう……！」

「長老…！」

「わ…ワシは…もう…無理じや…」

「…怪人か？」

そこにいたのはカノンの所で見たことのあるような…怪人だつた。  
カノンの滯在先にいたヴァンプという男に似た怪人…なんか髪が真  
ん中から二つに分かれて立つていて奴がミロの方を向いた。

「あつ！現地の人！？」

「まあ…そんな感じだ。どうしたんだつて……おい！その老人や  
ばいんじや…」

ヴァンプに似た怪人ともう一人の怪人に見下ろされているのは…  
血まみれの老人だつた。

「ふん！自業自得だ。」

「ゴル君……それは言い過ぎだよ……じ……実は、長老はそここの石に  
つまづいて血まみれに……」

「……仕方ないな……これで一命は取り留めたはずだ。  
あとは病院へ連れて行こう。」

血止めの真央点を撃つたミロは長老をおぶつた。

「で……でも……どうしよう……こんなことになるなら、旅行保険に入  
つておけばよかつた……」  
「はいってないのか！？」「  
「は……はい……くつくつく……」

なぜか笑い出すソイツ……

「おい！なんで笑っている？」「  
「ひい……す……すみません……くつくく……僕、緊張す……すると、笑いが  
止まらなくて……くつくく……」

……笑いが止まる雰囲気はない……

だが、困った……まさか、旅行保険に入つてないなんて……病院のほ  
かに休めるところと言つたら……

ミロの頭に浮かんだところは一か所しかなかつた。

「（一般人は入れてはいけないが……休ませないといけないし、  
もし、この怪人たちが反旗を翻したとしても、瞬殺できそつだし……）

よし……ついてこい。俺の所で休めよな。」

——数時間後——

「おー……じんなとじひでへばつたのか！？」

長老を背負つたミロが呆れた声を出す。

「ゼー……ゼー……もつ……ムリ……」

ヴァンプにそつくり……つてか、ヴァンプの弟、ロウファーは、その場に座り込んだ。

ミロは軽く舌打ちをする。  
どうせ、力尽きてぶつ倒れるなう、この下の富で倒れてほしかつた。  
なぜなら……じじは……

「ミロ……なにをしてこる？」

カノンの兄、サガの住まつ双児富だつたからだ。

「え……えつと……この人たちは、フロシャイムつて組織の静岡出張所つてとこの所長のロウファーと、その部下のゴルと相談役の長老。  
なんか疲れてるみたいだつたから、連れてきた。  
俺、こいつの兄貴と知り合いだしな。」

「さうか……弟か……」

やばい…… 田の色が真っ赤だ！ハバネロみたいな田だ！！！

「それなら、本日は、ここに泊まるがいい」

「へつ！？いいのか！？」

「問題ない。部屋なら、なぜか帰つてこない愚弟の部屋が空いているしな……」

田の色が真っ赤で、髪が灰色のサガ…つまり、黒サガは不敵な笑みを浮かべた。

「本当に平氣か？」

「問題ないと言つてはいるではないか。

フロシヤイムは聖域と…いや、教皇時代の私と友好関係にあったのだからな。

さあ、こっちに来い。」

サガについて中に入つていくロウファー・ゴル…

「マジでかよ……」

フロシヤイムは悪の組織のはずだ。……まあ、ミロも人のことを言えないが、仮にも『世界の平和と愛を護る』とされる聖域が、悪の組織と友好関係だったら、不味いんじゃないか？

……と思つたが、何か事情があつたのだろうと、思い込むことにする。

ミロは長老を背負いなおすと、彼らの後に続いて、双児宮へ消えて行つた。



静岡出張所の面々が、聖域に来るという話です。

木元君と戦闘員は出てきません。理由は次回書くよていです。

ロウファーは、フロシャイム静岡出張所の所長。ヴァンプ将軍の実弟です。兄に似て料理が上手いのがメリットです。

基本的に氣弱でダメな性格。フロシャイムに入るきっかけも、いい年をして定職に就いていないことを見かねた兄の紹介。

緊張すると笑いがこみ上げる性質のため、レッドと対峙したりヴァンプに説教されているよつたな真面目な場面でへラへラしてしまうなど問題が多い。

次に、ゴルは静岡出張所の唯一の怪人。

ロウファー達に反抗的な態度を取つていて、心が大変狭い。

最後に長老は、静岡出張所顧問。長い白髪がチャームポイントの人。

元々フロシャイムの構成員で、定年退職した後、同じバイト先であつたロウファーの個人的な雇用という形でフロシャイムに再就職する。本来は、その経験や知識を買われて顧問に就いたはずであるが、小心者であるため、ゴルを気にして全く助言を行わない(ロウファー曰く「以前、ゴルに「アンタはもうフロシャイムじゃないんだからでしゃばんな!」と言われたから」)。

以上です。次回も聖域編が続きます！

## FIGHT 16 聖域に乗り込む悪魔の使い 中編

FIGHT 16 聖域に乗り込む悪魔の使い 中編

「……」

(……)

「……」

(何をしている黒)

「ほう……久しぶりに『カノン』以外の単語を口にしたな。」

(うう……カノン……じゃなくて、なぜ私の富に怪人を入れたのだ！?)

白サガは黒サガの胸ぐらをつかむ。

……つとはいっても、白サガの手は黒サガをすり抜けたが……

現在・サガの肉体は黒サガが支配していたため、白サガには実体がない。

……ようはアレだ。遊 王の主人公さんを思い返してくれたら分かりやすいだろう。

(しかも、ミロの奴は『フロシャイムの怪人』だといつていたではないか！！

悪の組織だろ？あの四年前の事件を忘れたか？)

……四年ほど前、アメリカのユタ州で起きた惨劇を思い出す白サガ……悪の組織とはいって、あまり目立った行動をしていないフロシャイム

をサガは放置していたのだが、

あの事件が起こってからは、彼らの動向に目を光らせていたのだ。

「ああ……正義の味方と怪人の決戦だろ？死者は数百名で生き残ったのは、怪人一匹という事件のことか？」

「ふつ……安心しろ。我らの敵ではない。」

（しかし……）

「聖域を襲いに来たとしても、相手がアテナではあるまいし、我々が負けるとでも思うのか？」

「だいだい、奴らは私の傘下のモノだ。」

（貴様）アテナ様を侮辱したな……！……

「そこか！？ツツコミ！どいろは……！」

（この不届き者が……！ギャラクシア……）

「幻魔拳！……！」

（うつ）

……ばたん……と倒れる白サガ。

……通常の攻撃……主に、殴る・蹴るといった攻撃は、幽霊のように肉体を持たない状態の白サガには効果ないが、小宇宙を始めた技……先程、白サガがやろうとした、ギャラクシアン エクスプロージヨン とか幻魔拳といった技は特殊なので当たるのだった。

「ふん。正義は勝つのだ！……さつと冥界帰りすればいいものの……」

（そのセリフそっくりそのままかえすぞ……）

「……さすがに復活が早いな……」

(…、無視へ…、そういえば、さつきなんか言つてたな？

アロシャイムと聖域が友好関係にあるだと? ふざけたことを

「 そ う か お 前 は 知 ら ん の か 」

(貴様!!今、鼻で笑つたな!?何をしたのだ一体!?)

「ふん……ちよつとばかし裏取引をな。

あの絶縁は人当たりも悪い  
……その二毛を利用して金のありそこ

アラブの要人だの大都会に本社を構えるCEOだのに近づき幻朧魔  
けんろうま

おうけん  
で

操り人形にしたまでは

：フロシャイムに取り入るのは造作もない」とだつた。

短所』を送つただけで

## おしみなく協力を

がちや  
り

「あ……あの……平氣でしたか？」

ロウファーが恐る恐るドアを開けたのだった。

「ああ。まったく問題ない。心配しなくて大丈夫だ。ちょっとと真っ黒なゴキブリが出たから始末しただけだ。」

二ヶ「リと神のような微笑を浮かべる、自身の肉体の支配権を取り戻した白サガ」

「え……あ……そうですか？」

あ……あの、夕食できたので来てくれますか？」

先程までと正反対なサガに戸惑うロウファー。  
少し眉をしかめるサガ。

「夕食？」

「えつ！？サガさん言ってましたよね？」

『いくら客人とはいえ、こにはこのサガの富。

働きもせず「ロロ」ロしてたら、どうなるか分かっているな？』 …つ  
て…」

「（「Jのあ～黒め～……）……そつか……すまないな、迷惑をか  
けて……」

これからは、客人らしく、ゆっくりしてくれ。

……まあ、夕食は、せっかく作ってくださったので、いただいて  
おけ。」

サガはロウファーに続いて部屋を出た。

……これを機に、フロシャイムの実態を明かしてやる……と躍起  
になっていた。

そして、食卓に並んでいたのは、白米・味噌汁・焼き魚・かぼちゃの  
煮つけだった。

見た目は良さそうだが、毒が入っているかもしね……。

サガはフツ…と微かに笑った。

「（……Jのサガに毒は効かんぞ）……では頂くぞ。」

以前、アテナの警護で行った日本で購入した箸を器用に使い、白米

を口に運ぶ。

「サガは毒には免疫があった。

なんでも、13年間も毒バラの匂いがブンブンする宮にもうとも近い教皇の間で、過ごしていたのだ。

こんなバカそうな奴らが持つている毒なんて効くわけがない。

……もし、効いたとしたら……その時は、一つ上の宮の主・蟹あたりがサガの小宇宙の異変を感じ、

こいつらを冥界へ送つてくれるはずだ。

だから、何のためらいもなくサガは白米を口に入れた。

パクリ……もぐもぐ……

「う……これは……！」

結構美味だ！！！

毒の気配も、まったく感じられない！！

「おかわりありますよ！気にしないでくださいね。」

ロウファーはシャモジを持っていた。

「あつ……もしかして……口に含いませんでしたか！？」

「いや、なかなかいけるぞ。私が愚弟に見習つてほしくらいだ。」

「そうですか……よかつた～」

バタン！――！

食卓に着いていたゴル（怪人）が派手な音を立てて立ち上がった。半分ほど残したまま、ゴルは、自身にあてがわれた部屋へと入つて

いつた。

「……彼は調子が悪いのですか？」

「……まったく……困ったものだよ……ぶつぶつ……」

もともと顔色の悪いロウファーの顔が更に悪くなつた。

「サガさんのせいじゃないんですよ！――

なんか知らないけど怒つてているだけだから――

ほんとうに困るんだけど。

一応、僕がゴルの上司なんだから……ちやんとしてほしこよ全く

……

ぶつぶつ言つロウファー。

なんかサガはじ～～～んとなつてしまつていた。

料理がしつかりできて、就職をしている上に、直属の部下までを持つていて、

その上……部下の事を思いやれるなんて……

(思いやつてこるよには見えないが……)

「黙れ黒――」

「あ……な……何かこつていたかのぉ？」

すっかり完全回復をした長老が、サガの独り言に気づいて、声をかけた。

「いえ、なんでもありませんよ、疲れているのでは？」

サガは、後ろに花が咲きそうな満面の笑みを浮かべて言つた。

「それにしても……ロウファーさんのような弟が欲しかったものですね。

あなたのお兄さんが、羨ましいですよ。」

「えつ……あ……ありがとうございます……」

めつたに褒められることがないロウファーは真っ赤になつた。

そのまま、サガは夕食を食べ、夕食をつくるついでにロウファーが焚いた風呂を満喫し、

満足な気持ちで眠りについた。

……客人が『悪の組織・フロシャイム』の怪人だということをスッカリ忘れて……

えつと、夏休みに入ったのはいいんですけど、22日から25日まで合宿があるので、しばらく更新が止まります。

そのあとも、いそがしいので更新が遅くなるとおもいますが、出来るだけ早く更新するように努力するので、よろしくお願いします！

FIGHT 17 聖域に乗り込む悪魔の使い／後編

「あ～……どうしよう……」

午前5時頃……

ロウファーが、あたふたあたふたしていた。

「お……おちつけ！ なんとかなる……」

「そんなこと言つたつて、もう飛行機のチケットを買になおすお金  
ないよ……」

……ロウファーのセリフから分かつていただけただろうか？  
……そり……

ロウファー一行は飛行機に乗り遅れたのだ……

正確に言えば、飛行機に乗ることを忘れていたのだ。

「つたぐ……なんで忘れるんだよ……」

「お前のせいだろ！ デスマスク！ ！」

黒髪の目付きの鋭い男が、デスマスクと呼ばれた青っぽい短髪の同  
じく田付きの悪い男を殴る。

「痛つてえ！ ！ なにじやがるシコワ！ ！」

「フン……当然の制裁をくわえたまでだ。お前が、ここにいらっしゃる間  
つから酒を飲ませたのが原因だろ！ ！」

「いいだろ？俺は今日は非番だしね！」

「お前は非番でも、何もこいつらを巻き込むのは……」

「い……いいんですよ、シユラさん……」トスマスクさんも悪氣ではなかつたと……

「いや、こいつが100%悪い。俺がお前の代わりに細切れにするから……」

「ま……待てよシユラ……悪かつたつて……つーか、なんでお前がここにいるんだ！？」

「忘れたのか！？お前が念話テレパスで

『おい！今飲んでるから、お前も来い……』

つて夕方頃に呼んだんだろうが……』

「あ～～忘れてた。スマン。』

「すまんだと～！？昼間つから『記憶飛ぶほど飲んでたのか！？やつぱり殺す……』

「おい、少し静かにしろ……』

サガ：白サガは午前の執務のせいでとっくに引きもつてこるため、黒サガが叫んだ。

黒髪のシユラと呼ばれた男が氣まずそつに拳を下ろした。

「……こんな方法に頼りたくないが、人間外生物の支配するグランド財団からチャーター機を要請すれば問題ないだろう。

それよりも、こいつの知り合いでにでも誰にでも連絡を取つたほうがいいのではないか？

心配しているはずだからな。』

「おつ……黒サガが珍しくいい」と言つてんじやないか！？

「めずらしく……だと……『スマスク？』

「いや、なんでもねえよ。

ほら、やつやと国際電話かけやがれ。』

ロウファーにポンッと電話の子機を投げるデスマスク。

ちなみに、書き忘れていたが、長老どゴルはまだ酔いつぶれている。

戦闘員

「えつと……確か、山田君は今、大学のゼミで旅行中で……この旅行券を当てた木元君も、友達と旅行中だしつとなつたら、兄さんか……」

ピツツポツパ

「…………あつー兄さん? ロウファーだけビ  
あ…わかつた。」

ピツ (電話を切る音)

「どうしたんだ?」

「今、サーダーアンダギーを揚げてるから、あとでかけ直して……」「わけわからんねえこと言つてんじゃねえ……」

デスマスクがバンッと、机を叩く。

「え…ええつと……沖縄の菓子で……」  
「そんなことを聞いてるんじゃねえっての……」  
「まあいい……ふあ～～あ。俺は少し寝るぜ。」  
「お前は寝るな!! デス!!」  
「そつだ!!!! お前が元凶なんだからな……」  
「えええ!!!!」

デスマスクが抗議の声をあげた。

—数時間後—

口ウフアーハ、もう一度電話をかけていた。

「…………あつーー！兄さん？ロウファーだけど。

それより、今ギリシャにいるんだけど……

実は知り合つた方がさうて人がね、

黒サガが舌打ちをした。

「 」 うのは、白がむいているんだが…

代わつたぞ。  
私がサガだ。

安心しろ。私の僕といつより知り合いで

なことか出来た

礼か？何をするつもりだ？…………… そうか……………まったく……ど

電話番号は  
やつが 一らな一か

『グランド財團・ヨリシャ支部・双兎宮・サガ』で通じるそ

では、切るぞ……」

ピッ（電話を切る音）

「……お前の兄つて……主婦だな。將軍には見えん。」「そ……そりですかー？僕よりずっと將軍っぽいって言われていて……」

「そんなことよりも、さつさと朝飯用意しやがれ。」「デスマスク！！お前が作ればいいだろ！！！」

「あつ……いいですよ。まだ、時間ありますし、お礼に僕が作ります！……」

「おい……その怪人たちは聖域の客だぞ！……」「シユラ。気を使わせるな。」

「ここは私の富……そこに無駄賃で住むなどといつ行為が許されると思つてゐるのか？」

「つといふことで、朝食を頼む。」

「サガ……あなたは……」

「話が分かるぜ黒サガ！……」

「お前は黙つてろ！テス！……」

「うつ……分かったから斬るうつとすんな……！」

なにやら早朝からにぎやかな聖域だつた。

——数日後——

双児富に川崎から小包が届いた。

……そこには『フロシャイム印・完全無農薬国産果物ジュース』をワンセットと

『弟がお世話をになりました。本当にありがとうございますーー！』  
『フロシャイム川崎支部・将軍・ヴァンプー』  
と書かれた手紙が入っていたのは、また別の話……

## 更新延期のお知らせ

「めとなさい！……

前回の前書きを参考にしてくださいと嬉しいのですが、

合宿に行っていたので、更新がとどけられてしまつてしましました。

なので、いままで、頑張ってくれた私への褒美といつことで、

『合宿も終わつたし、せめて今日中には投稿！！』

をスローガンに、生き込んでいたのですが、

自分で書つのはアレですけど、倒れそうな疲労と眠気のため、無理  
そのので、あさつて投稿予定です。

読者の人には申し訳ありませんが、延期をせてもうります。



遅くなつてすみません!!

本編を読みつい。

## FIGHT 18 最凶のヒーロー 来襲！！

FIGHT 18 最凶のヒーロー 来襲！！

「…なにしてんだ？」

パチンコの帰り道、知った小宇宙を感じたカノンは、ゴミ箱を開け、中にいた人物に話しかけた。

「あ…カノンさん…近くに誰もいませんか？」

「ん？…いないが…」

「よかつた！！！」

いそいそとヴァンプ、戦闘員一号…二号…最後に蛾型怪人のモスキーが這い出てきた。

「なんでこんなところにいたんだ？」

あと、少し臭いから離れる。」

「あ…スママセン…じつは…」

——回想シーン——

…高津区にあるとある公園…

『平瀬川』と印刷されたシャツに短パンといったラフなヒーロー…

サンレッドがいた。

その前に立ちはだかるはヴァンプ將軍と彼率いる戦闘員一名そして  
怪人だ。  
モスキ

ドーン！！つと槍で地面をたたく、ヴァンプ。

アーティストは、さめざめてアーティストのアーティスト……今アーティスト!!

「ヰチユ」

鳴き声を上げるとレジでパンツ「ぬモスキー。

ドカツ

レッドがモスキーに拳を一発入れた。

モスキーは地面とキスした……勝負がついた。所要時間・一分ジャスト。

「はい、終わりだ。じゃあな。」「

それが太陽を向かう。アシ。アシ。

いつもならこの後は説教をしているのに、どうしたんですか？

「…………お前らなあ…………負ける気まんまだつたのかよ…………」

つたく… 今日は午後から急に客が来ることになつたんだよ。先輩の北海道の兄弟戦士・アバシリンの二人がよ。」

「えつ…！」

真っ青になるヴァンプ。

「あれ? ヴァンプ様何か知つてるんッスか?」

復活したモスキーニがティッシュを鼻に詰めながら尋ねる。

「うん… レッドさんが引くべらりタチの悪いヒーロー… モスキーニ君は知つてる? 北海道 最凶の悪の組織… デスピグマ団… あそこを酔つた勢いで、へらへら笑いながら壊滅させたんだって。」「えつ…！」マジぱねえッスね… レッドさんよりヤバいって。」「でも、午後からならまだ時間がありますよね?」

戦闘員一号が時計を見ると、まだ11時にもなつていな。レッドはため息をついた。

「いや… あの人達、怪人狩るのが趣味だからよ… 少し早くに来て怪人探しをしかねないからな… だから、お前らは、とつとアジトに帰つて今日は一歩も外に出るんじゃねえぞ。」

「分かりました!! みんな!! 急いで帰るわよ…!! 命はまだ捨てたくないですし、私。」

その時だった。

「おー…!! 見ろよ、レッドが怪人に襲われてるぜ…!!」

サア―――つと血の氣が引いていく一同……

恐る恐る公園の入り口を見るヴァンプ一行が目にしたのは、

……胸に北海道のマークが入っている、アニメ原作共々顔が映つた  
ことがないほどの巨漢の二人組……

北海道の兄弟戦士……アバシリンの一人……アバゴールドとアバシリ  
バーだった。

みるかたはしておらぬ

## ――回想シーン終了――

「……とこいつがアツヒ……いやこで、この『マリ』箱の中に隠れた  
んです、私達…」

## 「生きた心地が

「俺、ぜつてえー北海道行かねえツス。

「アノ人達、僕たち探しながら

「あゝ正義の血が騒ぐ（笑）」

『ボクボクにしてやるから出てこいやー!』

『ハツ裂きにしてやるーーー!!』

「一言一力力極<sup>シテ</sup>ニ及<sup>シ</sup>」

確かに、毎近くからいつもは、感じない小宇宙を感じていた。

この町で黄金聖闘士なみの小宇宙を秘めているのはカノンと、まだ会つたことはないが、そのレッドという男くらいなのに、同等の小宇宙が一つも増えたので、驚いていたのだ。

……だからといってパチンコに夢中で確かめに行く気にはならなかつたが……

（……正義の味方つてろくな奴がいないな……）

アバシリンという奴は聞く限り、戦闘マニアにしかみえないし……レッドという奴はヒモらしいし……

正義の味方……聖闘士にもろくな奴がいない……

自身の兄・サガを筆頭に……唯我独尊のシャカ……腹黒のムウ……などなど……

まともなのは牡牛座のアルデバランと山羊座のシュラくらいだ。その一人でさえ、シュラはアテナと射手座のアイオロスのことになると、すぐ自殺しようとするし、アルデバランも最下級の青銅聖闘士に負けて、『ウワーッハハハ』だったし……

正義の味方つていつたい……

夕日に向かつてそう思つた、聖闘士予備のカノンだった。

せいぎのみかた

## FIGHT 18 最凶のヒーロー来襲!!（後書き）

兄弟戦士アバシリン（兄・アバゴールド／弟・アバシルバー）

北海道のヒーロー。アバゴールド、アバシリバーの兄弟戦士。名前は網走から。胸に北海道をもしたエンブレムがあるのが特徴。

レッドの先輩……2人共に見上げるほどの巨漢で、巨漢過ぎてアニメ原作共々顔が映つたことがない。

レッドが認めるくらい凶悪。酔った勢いで北海道の怪人たちを皆殺しにしてしまい、獲物を求めて上京してくる程……

レッドとかよ子に対しては優しいが、そのような性格のためヴァン・ブランフロシヤイムの怪人は勿論、レッドとかよ子にも恐怖感を持たれている。甥っ子の存在が確認されている為、少なくとも三人兄弟であるのは間違いない。

FIGHT 19 それゆけ！－アニマルソルジャー ＜生態調査＞

「ねえ、カノンって何者なのかなあ？」

フロシャイム川崎支部に所属する、ぬいぐるみ型怪人の集団『アニマルソルジャー』のリーダー・ウサギ型怪人のウサコッソが唐突に言った。

「どんなつて……そりゃあそつだね、ウサちゃん。」

デビルネコが腕を組む。

支部に居候しているカノンの実体は謎に包まれていた。

例えば…カーメンマンの側溝にはまつた車を、指一本で持ち上げていたりとか……

他には……『冥闘士』といつ謎の奴らと知り合いだつたとか……

「…もしかしたら、静岡支部のロウファーさんなら何か知つてるかもよ？」

この間ロウファーさんがギリシャ土産を持ってきてくれたとき、こそそと隠れてたし……」

「うーーん……そうだけど……あの人、ヴァンプ様の弟つてだけで、面識ないし……」

「…確かに……よし！尾行しようよ！…そしたら何かわかるかも！」

「！」

「うん！！それはいいかもね！！」

「カノン外出！カノン外出！」

突然アーマルソルジャーの一員、緑色のヒヨウ型怪人、Pちゃん改が頭部の赤いランプ点滅させた。  
玄関の方をみると、確かにカノンが外に出ようとしているところだつた。

「うわあ！！急いで追いかけなくちゃやーーPちゃん、ありがとうー！」

「No problem」

「急げ！つよ、ウサちゃんーPちゃん！」

三四匹は外に出た。……」つそりカノンの後をついていく……

「あれ？ そういうえばヘルウルフ君は？」

カノンと最初に出会った張本人、アーマルソルジャーの一員で青いオオカミ型怪人のヘルウルフの姿がどこにもなかつた。

「きつと、いつものことだよウサちゃん。」

「デビルネゴがため息交じりに言つた。……一匹オオカミのようなくるウルフ……一員なのに一緒に行動することがほとんどないのだ……ウサコッシは少し落ち込んだ。」

「そつか……あつー！カノンが角を曲がったよ。」

カノンが一つ先の角を曲がってウサコッシュ達の視界から消える……。一同が、あわてて走り出した時……

「あつーーー将軍の所のウサコッシュじゃねえかーーー！」

サアーーーーとウサコッシュ・デビルネコの背筋に寒いものが走った。後ろから響いてくる悪魔のような声……振り返るとそこには、よく知っている三人の小学生男子……

「じ……じん君ー？今日は平日だよ？学校は？」

「今日は創立記念日だよ、ばーかーー！」

じん君は、そつまつとウサコッシュの耳をギュウーーと引っ張った。

「痛い痛いーー耳が取れちやうよーーーー！」

「じゃあとつてやるよ。とつてもあんまり変わんねえだろ？」

「やめて！僕のウエストポーチ返してーーー！」

向こうでは、じん君の取り巻き一号が「デビルネコ」のウエストポーチを取り上げている。

「ばーか。返すつて言つて返す奴がどーこーるよー。」

「その中には大切なインシュリンが……」

「知るかよ。嘘つくなって。」

「 本当にだから返してよー僕、糖尿なんだってばーーー！」

「 デビルネコが必死で訴えている向こうで、マちゃん改はっこつと……

「 ……」

取り巻き | 叫も為す術がない。

……なぜ、怪人なのに反撃しないのか……それは彼らが弱いからではない。

……そもそも、ぬいぐるみ型怪人とは、フロシャイムが子供を人質にするために作った怪人であり、そのため子供に危害を加えられないように設定されていいのだ。

だから子供の為すがまま……いよいよイジメられてしまつのだ。

（……今日は本当に危ないかも……）

ウサコツツの耳のあたりの布がビヨビヨッと嫌な音を立て始める……。

「 お…お願い…早く薬か…糖分をとらないと…」  
「 演技してるんじゃねえって！…」

「デビルネコには本当に命の危険が迫っていた……が、敵はそんなことに気を使つてはくれない……」

唯一無傷のPちゃん改は、自分の保身の事しか考えていない……

「[四]の絶望がMAXになつたとき……！」

「おこ……やめひみな……！」

一人の少年の声が響く……が、ウサコッソ達の位置からは見えない……

「ああん？ なんだよお前！？」

「あつ……じん君！……こいつ……前にテレビに出てたセイントってのだよ！……！」

「……言わせてみたら……あんな化け物がなんでこんなところに……ちつ……行くぞ。」

じん君はウサコッソの耳を開放し、取り巻き一号はデビルネコのウエストポーチを放り投げ、二号は何もしないまま去つて行つた。

「うーん……糖分を……」

「ね…ネコ類…しつかり…！」

「甘いものが欲しいの？…これでいい？」

そつとビルネコに飴が差し出された。夢中でそれを口に含むビルネコ…これで一山を越せるやつだ。

「助けてくれてありがとう！」

上を向くと一人の少年がいた。…正確にいえば、いかにも熱血つて感じの少年と、少女のよつた少年だ。

「おー、気にするなつて…！…ん？おい、片方の耳が半分とれてるけど…大丈夫か？」

「ん…あつ…！…本當だ…！」

直すのが大変だな…この間メンテナンスしてもうつたばかりなのに

…

はあ…とため息をつくウサコシ…

「よしーじゃあ俺が美穂ちゃんにでも頼んで直してやるのつか？」

「いいの星矢？これから沙織さんの命で…」

「こいんだよ瞬！星の子学園はすぐそこだろ？ヘーキヘーキ…」

そう言つと星矢と言われた少年はひょいとウサコツを抱え上げた。  
仕方ない……といった感じで「デビルネコ」を抱き上げる瞬と言われた少年。

「えつ……あの……」

「大丈夫だつて！美穂ちゃんは可愛いものに困がないからな。」

「か……可愛くなんてないやい……殺すよ……」

「殺せるかよ！？まあ、行くぞ瞬！」

「分かつてゐるつて星矢……はあ……後で沙織さんに何て言おう……」

二人の少年……ペガサス座聖闘士の星矢とアンドロメダ座の聖闘士の瞬は怪人二匹を抱えて、孤児院……星の子学園へと向かつた。

……ウーのよになつたままのYちゃん改を残して……

～ヴァンプのセヒト～

ヴァンプ「みんな～前回からずこぶん間が空いてるナビのコーナー覚えてる？」

今日も簡単な料理を紹介するコーナーだよ。」

カノン「待て待て…前回のサーダーなんぢゅうは、読者に説明するためにやつたんじやなかつたのかよ？」

ヴァンプ「うん、最初はそのつもりだったよ、私も…やつぱり原作でもやつてるから、いつまでもつけて…」

カノン「…………もうこい。勝手にしろ。俺は何も言わん。」

ヴァンプ「そう。じゃあ始めるわよ。」

今日は横浜名物をつかつた『三ッ子ハマサンデ』。」

カノン「待て……ツッコまないといつたばかりだがツッコむが。この話の舞台は川崎だろ？横浜とは違つだろーー！」

ヴァンプ「そりですけど、細かいことほんとにしないで。原作に文句は言つてくれださこよ。」

じゃあ材料を書くわよ。

食パン…1枚 シューマイ(既成品)…適量 からし…適量 しょ  
うゆ…適量

これだけ

作り方も簡単！

シュークリームを温めます。時間は約40秒なんだけど、温める時間はレンジによつて違つから注意してください。

あつー待つてる間に食パンを半分に切つておいてね。それで、温まつたシュークリームにからしを塗つてパンにはさんでからもう一度レンジで5~10秒くらゐ温めて、温まつたらお好みでしょつみをかけて、完成！！

ね？簡単でしょー。」

カノン「…………活[活]できなーいな…………もぐもぐ…………おつ……意外と合[合]つな…………夜食にはいいかもしれん。」

リロ「こつや美味しいなー肉まんみたいだーー！」

カノン「…………なら、パン[パン]にこばいにだら…………つてか、なんでこ[こ]に…………」

リロ「細かいこと気[気]にあるなつて。腹減つたから来ただけだよ。」

ヴァンフ「これからもよろしくねーーー。」

つ二十話...。」れからもよひしへの願いしまか...。

FIGHT 20 監禁された[凶]…?

「はい、終わったわよ。」

「あ…ありがと…」

「」孤児院…星の子学園…

耳を直してくれた美穂という少女に礼を言ひウサコッシ…。  
美穂は「」りと笑うと…

「かわいーーー！」

「可愛くなんてないやーーー殺すよーーー？」

ウサコッシは手足をじたばたさせて抗議をするのだが、ギュッソーッ  
と抱きしめられたままだった。

「おー、美穂ちゃん、そいつ嫌がってるみたいだぜ？」

「」ウサコッシを連れてきた少年…星矢が言ひ。

「でも星矢ちゃん。」の子ものすゞくかわいいのよーーー！で拾つて  
きたの？」

「溝の口の近く…いいから放してやれよ。友達の所にも行きたい  
だろうしさ。」

「…それもそうね…」からウサちゃん、向こうで友達が待つて

わ。」

名残惜しそうに頭をなでると、美穂はウサコツを放した。ウサコツはそのまま向こうで心配そうにこっちを見ているデビルネコの方へ走つて行つた。

「……でも、どうして星矢ちゃんと瞬くんが溝口に？」

「ああ。沙織さんの命令だよ。」

「えつ！？つていうことは、今度は溝口が戦場に！？」

「……いや……そうじゃなくて……実は、行方不明の双子座の聖闘士の代理のカノンって奴の小宇宙が、溝口周辺から微かに漂つてるらしいんだ。だから、俺たち一人でまずは見てこいつて。」

「うん。僕も少しカノンっぽい小宇宙を感じたよ……まあ、どうにいふのかまでは分からなかつたけどね。」

「でも……そのコスモつていうのを感じるだけなら、ヨーローナの邪武つて人とかヒドラの市つて人でも良かつたんじゃないかな？」

少し眉をしかめる美穂。

「邪武や市みたいな普通の青銅聖闘士だと、カノンを見つけることは出来ても、カノンを捕獲するのは不可能だからさ。それこやミトコンドリアと恐竜くらいの力の差があるんだから。」

「星矢！言ひ過ぎだよ。せめてミトコンドリアじゃなくてミジンコくらいにはした方がいいんじゃないかな？」

「……ともかく恐ろしい人なのね……

岩を簡単に粉々にする人が雑魚以下に思えてくるのだから……それで、見つかったの？」

「いいや。見つけようとする前に、アイツら（ウサとネコ）を見つけたんだ。

「でもよお……はつきり言つて探す気がしねえな……」

「おお、どうしたの？」

美穂は驚いてしまつた。

星矢には珍しい……少し悔れを表情をしていたのだ。

「いや……実はカノンの兄のサガつて奴がいるんだけど……そいつのカノンへの制裁が……」

うん、想像するだけで、探す気が失せるよ。  
カノンが哀れに思えて……」

卷之三

……無闇で……とはいっても方の原因は力はあるんだと思ふ  
だけど……家出した罪として、

双子座最強の技・銀河をも碎く『ギャラクシアン エクスプロージョン』を最低5発やられた上に、

「しかし、食料も一切与えられない状態でね。着の身着のまま一週夜になると岩牢の天井まで漬か満ち、溺死の間にあらず。スープン岬の岩牢」に一週間閉じ込められるのは確実だからな。」

それに、牢の奥の穴は、完全に塞いであるから、もう抜け道はない  
しね。」

されるかもな。」

「それって……大丈夫なのかしら……」

『だから廻遊に探しで、いませんでした』にするんだ。

「…………まあね。…………つてあれ?ウサちゃんたちは?」

振り返ると、いつの間にかそこへいた一匹がいなくなっていた。

「はあ……はあ……もう平氣かなあ？」

「うう……乳酸で足がパンパンだよ……」

星の子学園から、かなり離れたところにウサコッシヒテビルネコは逃走していた。

理由は少し前にさかのぼる……

耳を直してもらつたウサコッシはテビルネコのところへ掛けて行った

「だ……大丈夫だつたウサちゃん！？怪我はない？」

「ううん、ないよ。……つていうか怪我を直して貰つてたんだけど……いい人たちだよね！じん君から守つてくれたし……」

「本当にそなうなのかなあ？」

神妙な顔立ちの『テビルネコ』。

「もしかしたら、僕たちを捕まえて……人質としてフロシャイムと交渉するためだつたりして……」

「まさか監禁！？ありえないよ。だつてまだ子供だよ？」

「で……でも、星矢と瞬つて言つたら、あの『銀河戦争<sup>ギャラクシアン</sup>』<sup>ウォーズ</sup>で戦つてたセイントっていう人だよ！？」

「えつ……」

恐る恐る一人の方を見るウサコッシ……確かにテレビでみた銀河戦争出場者の少年にそつくり……というか同一人物だつた。

さあ……と蒼くなるウサコッシ。あの大会はよく覚えている……岩を碎く人間つてすごいなあ～氷を出す人間つてすごいなあ～本当は

正義の味方なんぢやないかなあ～つと思ひながら、女郎の「テレビ」で見ていたのだつた……。

そのセイントが田の前に……しかも何やら話しごんでくる……。

「匹は耳をすました。

「……した罪として、

双子座最強の技・銀河をも碎く『ギャラクシアン ハクスピロージョン』を最低5発やられた上に、

夜になると牢の天井まで潮が満ち、瀕死の目にあつ『スニオン岬の岩牢』に一週間閉じ込められるのは確実だからな。

「しかも、食料も一切与えられない状態でね。着の身着のまま一週間。面会謝絶で。

それに、牢の奥の穴は、完全に塞いであるから、もつ抜け道はないしね。」

「下手すればその上に、アナザーディメンションで、異次元に飛ばされるかもな。」

ぞおつとした一匹……。

「え……もしかして……これから僕ら……」

「に……逃げよつよウサちゃん……このままじや死んじやつよ……」

「うんー早く逃げよつよ、ネコ君……」

つと叫びことで、ずっと休まず走り続けていたのだ。

「おい。」「ひー……」

上から巨大な影が見下ろす。恐る恐る見上げてみると……

「あつ……カノン?」

「なにしてんだ? まつたく…… パチちゃんの奴は向こうでウイーミーな状態になつたまま動かないし……

お前たちはへロへロだし……

「か……カノンは何してたの?」

「俺か? ああ…… FIGHT 3でカーメンマンつて奴の車を引き揚げただろ?」

そしたらアントキラーって怪人が、

『兄貴が世話になつたから、なんかおじつてやるよ』 つてな。駅前のファミレスに行つてきた。

……お前たちは大丈夫か? なんかへロへロだが……

「うん……たぶん平氣!」

「乳酸で足がパンパンだけビ平氣だよ。」

「……平氣じゃないじゃないか……ほら、帰るぞ。ヴァンプが今日は『すき焼き』をつくるといつていたからな。早くしないと肉がなくなるぞ。」

「わ~い!!~すき焼きだ!!~!!~」

「最近、糖尿も少し改善したから……うん……たぶん平氣……」

ウサコツツヒデビルネコは、カノンの正体なんてどうでもよくなつていた。

正体が何にせよ、カノンはカノンだからだ。

自分たちのことを心配してくれる……大切な友達だ。

夕日の蜜色で町が染まるこの……三人は並んで支部へと帰つて行つた。



## FIGHT 21 ヴァンプの誤算！？

忘れているかもしれないが、これは神奈川県川崎市溝口で繰り広げられる、善と悪の壮絶なる戦い…である。

FIGHT 21 ヴァンプの誤算！？

「つたく……イラつかな…」

パチンコで思った通りの結果が出なかつたカノンは、イラつきながら歩いていた。

「あつ！…カノンさん！…カノンさん！…カノンさん！…」

めつむやくつちやカノンの名前を連呼しながら走つてくる、こんなくそ暑いのに紫のマントで全身を覆つた上に、兜までかぶつている変人…じゃなくて、ヴァンプがいた。

「どうしたんだ？」

「爆弾！…」

ヴァンプは手に持つているダイナマイトっぽい奴をカノンに見せた。

「……で？なんだ？俺は今から『パンペー』に行こうと思つていたのだ

が……」

「『ノンベービング』やないんですよ……スイッチの切り方が分からなくて……」

「スイッチ?」

「爆弾の起動スイッチです……」

「……」

確かに、爆弾の真ん中に数字……『4分29秒』と映し出せられた。

「……なんでこいつなつたんだ?」

「じ……実は……掃除をしていたら、掃除機が台所のテーブルに当たつて……それで、その上に置いてあつた爆弾が下に落ちてポツチッと……つて感じなんです……」

「なんでそんなところに置いてあつたんだよ……? つてか、そんなの戦闘員か誰かに聞けば、止めてくれるのではないか?」

「今、支部には誰もいないんです!!

だから起動時間15分中7分を使って、……レッドさんの所に助けを求めに行つたんですけど……

……レッドさんがいなかつたんですね……」

カノンは頭をガシガシかいた。

「あのなあ……お前は悪の組織だろ?」

なんで、そこまで正義の味方に助けを求めてるんだよ……? じやあこうすればよかつたじゃないか。

レッドの部屋の前に置いて来れば。そうすれば、レッドの住処がなくなるし……」

「できませんよ……レッドさんだけが住んでいるならまだしも、あ

そこは、かよ子さんの家なんですよ！？

かよ子さんに迷惑がかかるじゃないですか！？

いえ、かよ子さんだけではないですよー区の人たちにも多大なる迷惑が……

「お前、もう一度聞くけど、悪の組織なんだよな？」

……で、処理に困って、とりあえずマンションの外に出たってところか？」

「はい……あつ！…！あと30秒しかありません！…  
どうしたらいいんでしょうか！？」

「知るか！？」

自業自得といつのではないいか！？」

「……そんな……ひどいですよカノンさん……

ああーーあと10秒！…もつといいです。覚悟を決めました、私

…」

「犬死だな……」

「うう……みんな……あとは頼んだわよ……あと5…4…」

「うう…めんどくさいな！…！」

カノンはヴァンプが握りしめている爆弾を光速で取り上げると、  
空いている方の指で、宙に三角形をかくと……

「ホールデントライアングル！…！」

その中に爆弾を放り込んだ。爆弾は虚空へと消えて行つた。

「……処理終わつたぞ。」

「ビ…ビ…ビ…やつたんですか？」

恐る恐る尋ねるヴァンプ。

全ての動作を光速で行つたため、彼から見ると、急に爆弾が消えた

ようになにしか見えなかつた。

「なに……北大西洋に存在すると言われる「魔の三角地帯」をつくりだし、こことは別の空間に送つたまでよ。」

「つまり異次元ですか……凄いですよ、カノンさん……ありがとうございます！」

あ～よかつた！！誰にも迷惑かけないですんで……

今日の夕食は、カノンさんの好物で決まりですね！！

「なんだよ……命を救つてやつたのに……主婦みたいな礼の仕方は……まあいいか……」

フツと苦笑いを浮かべるカノンだつた。

ちなみに……

フロシヤイム製の爆弾は、飛ばされた瞬間に爆発したのなら、特に被害なしで済んだかもしぬなかつたのだが、

飛ばされて4秒後……飛ばされた先の巨蟹宮の主の真上で爆発したこと……カノンもヴァンプも知るわけない。

## FIGHT 22 智将現る!!

FIGHT 22 智将現る!!

東京都のとある場所……フロシャイムのアジトはこんなところもある。

川崎支部と似た中古の一軒家……そこが、フロシャイムが誇るHQ 150の智将……ヘンゲル将軍が治めるフロシャイム東京支部があつた。

「サミエルよ……」

「はっ！ヘンゲル将軍！！」

軍服姿のヘンゲルの前にひざまずく……人型怪人であり、この支部の参謀……サミエル。

ヘンゲルはサミエルを見下ろした。

「これから所要で川崎支部のヴァンプの所まで行つてくれる。留守を頼んだぞ。」

「はっ！！…………しきしどうこつたご用件で……？」

「つむ……」の間、箱根に東京支部の慰安旅行で行つたことを覚えておるか？

その土産の品……『箱根の田様』とつまんじゅうを渡しに行くのだ。

本来なら帰りの登戸で小田急から南武線に乗り換えるとき、駅で

一回おりて渡しに行けばよいのだが、

あの口は急いで帰らねばならん用事があつたものでな。」

「用事……ですか？」

「クリ……と睡を飲むサミール……サミールは、いつも通り落ち着いた顔でうなずいた。

「アマゾンで注文したアダルトローロが届いたのでな。」

「…………はあ…………」

「では、留守を頼むぞ。サミールよ。」

右手に紙袋。左手に常時着用している巨大なハサミをしてじるくん  
ゲル将軍は、つかつかと指令室を出て行つた。

「ふむ…………まさかまた留守とはな…………」

登戸駅から歩いてきたのはいいが、生憎と誰もこる気配がない……。

「…………ふむ…………」

庭の方を見ると、じんよつとした曇り空なのに洗濯物が干してあつた。

「…………とこう」とは、すぐに帰つてくる……とこうとか。

今にも雨が降りそうだからな。」

「だれだオッサン？」

ヘンゲルが振り返ると、そこにいたのは青い髪の男だった。

「ふむ、私を知らんのか？まあよい。

お前は川崎支部の怪人か？」

「いや……ここに居候の人間だが……」

「川崎支部の者よ。これはヴァンプへの土産の品だ。賞味期限がすぐなので早めに食すがよいと伝えておいてくれたまえ。」

「おい、無視か？」

「では、今後とも努力するがよい。」

男に紙袋を渡すと、ヘンゲルは去つて行つた。

「どなたからのお電話だったのでしょうか？」

ヘンゲルが支部に帰つてきてやうやく、机上の電話が鳴り響いたのだった。

「ヴァンプからの礼の電話だ。なんでも対決をしに行つていたのさうだ。

「対決の後は疲労しきつているため、糖分は必須。タイミングが良かったみたいでほつとしたぞ。

それよりもサミエルよ。『カノン』という名に聞き覚えがないか？「カノン、ですか？いえ、存じ上げませんが……」「ふむ……実は私もどこかで聞いた気がするのだが思い出せないのでな……」

めずらしく悩みこむヘンゲル将軍。

「……そういえば将軍。今月の『月刊・悪の組織』とフロロシャイムの社内報が届いています。」

「うむ……おお……そうだ……思い出しちゃ、サミエル。お前のおかげだ。

カノンというのは数年前、『月刊・悪の組織』で取り上げられた組織の親玉だ。」

「…？ そうなのですか！？」

『月刊・悪の組織』はいわば全国紙……それに乗るほどの人物だったとは……

「つむ……アトランティスといつ滅亡したはずの都の支配者・ポセイドンの一番の部下であり

実質の親玉だそうだ。だが……少し気になるのは、雑誌に載つていた彼の写真なのが、一つも

正面を向いている写真がなかつたのだ。

……あの雑誌のギャラはかなり高いのでな。おそらく何者かが盗撮をした写真が掲載されていたのでは、ないだろつかと考えておつたのだった。

「…？ そうか……あの青年が……」

そういうながら、社内報を読むヘンゲル将軍。

「サミニエルよ…」

「（今度はなんだ？）…はい。」

「知つてゐるか？この少女を？」

社内報に載つっていたのは、大人びた顔立ちの少女。

「ま…まさか…なぜ…」この少女は、グラード財団の総帥ではありますか！？」

「そうだ。城戸沙織というアジア最大の企業…グラード財団の総帥を務める少女だ。

どうやら『アテナ』という女神の化身でセイントという最凶のヒーロー軍団の長だったことが判明したらしい。

危険度スーパーハイレベルクラスの人物に認定されたそうだ。」

「そ…そなんですか！？」

「だが、そのようなことはどうでもよい。」

いつもの変わらない調子のヘンゲル将軍。

（ああ……驚愕の事実を前にしても冷静さを保つていられるとは…さすがヘンゲル将軍！…このサミニエルは一生ついていきます！…）

感動していたサミニエルだったが…

「聞けばこの沙織という少女は十三歳だそうではないか。十三歳でこの中身の詰まつた体型とは…あと数年もしたらどのよつた成長を遂げるのか、期待が高まるところだな。

出来れば、ナース服やセーラー服…バニー服を来てほしいところだ。」

何も言えなくなるサミエル……。

智将・ヘンゲル将軍。

フロシヤイムの東京支部幹部で、左腕に着脱可能な「大なハサミ」を持つことから、「マスター・オブ・シザース」の異名を持つ。IQ150を誇り、的確な観察眼と判断力を併せ持つフロシヤイムが誇る将軍だが……

……その実態は、本人も認める『ドすけべ』であるということを、知る者は少なかつたりする……

# FIGHT 23 太陽の戦士、絶体絶命！！

# FIGHT 23 太陽の戦士、絶体絶命！！

「…………お二…………お、せりわけあるんぢやねえか。」

へらへら笑いながら、いつもの公園に現れたサンレッド。  
そこには、レッドを対決の場に呼び出したヴァンプ達の屍があつた。  
いや……一応、息はあるみたいで、痙攣のようにピクッピクつ  
と動いてはいたが……

ヴァンプも戦闘員も、本日の怪人…ライオン怪人のヨロイジシも血まみれで倒れていた。

「…………ったく…………なんで戦う前からこの状態なんだよ…………あ～～も  
しかしして、この間から居候してるつてテメエが言つていたカノンと  
かいう奴にボロされたのか？」

しかし、ヴァンガ達の反応はない。  
少し、レッドは警戒心を強めた。

いくつも、いくらボコされても懲りずに襲い掛かつて、負ける  
ヴァンプ達だが、弱いわけではない。

実際に結構強くて、口を三ヶ回りながら、馬鹿にしない性の、ほぼ一撃で倒せるほどなの、実力者の集まりだ。

」のヨロイジシも弱いわけではない。

ヨロイジシの纏つている鎧は、『呪いの鎧』と言われていて、持ち主の体力を無限に吸い取る代わりに、最強の防御を誇るという代物

だ。それを平然と纏つていられるだけで、実力は相当のものだと推測するのは容易い。

「一体……誰の仕業だ？」

「あ……アンタ……なんでヴァンプさん達を……！？」

公園の入り口から、悲鳴に近い叫び声が上がる。

そこに立っていたのは、レッドの彼女で同棲している、そこそこ美しい女性……内田かよ子だった。

……実は、彼女とヴァンプは友人関係であつたりする。

「いくらなんでも、ここまでやることはないでしょー！？」

「ちげえって。俺が来たときにはもう、こんな感じだつたんだつての！」

「で……でも、ヴァンプさん達は、そこまで弱くないってアンタが言つてたじゅない！？」

「誰の仕業なの！？」

少し不安やうな顔をするかよ子……

「まさか……アバシリンの……」

「先輩たちなら、こいつらはR-1-8規制がかかるような状態になつてるはずだ。

……一体……

「アンタ……！」

かよ子がレッドにしがみついた。突然のことに戸惑い、顔を……ともと赤い顔をさらに赤くするレッド。

「なつ……」

「私……アンタに万が一のことがあつたひ……ヴァンプさん達がやられるなら……もしこれが……別の悪の組織の仕業なら……次に狙われるのは……」

「俺かもつてか？」

だまつてうなずくかよ子。レッドは、小刻みに揺れるかよ子の背を、そつとそすつた。

「俺が負けるわけないだろ？俺は強いからな。」

「……そうよね……でも……万が一何かがあつたら……

私は……私は……」

かよ子は肩を震わせながら、レッドの胸に顔をうずめた。レッドも彼女を落ち着かせるため、無言でポンポンっと首を叩く。

「アンタを殺しちゃうから。」

レッドの腹に強烈な一撃を加えるかよ子。

不意打ちなのでレッドは少しうづびさせてしまった……が、なんとか態勢を立て直す。

「か……かよ子?」

「うう……レッドさん……か……かよ子さんは……敵です……」

足元に転がっているヴァンプの口から言葉が漏れた。

確かに、田の前にいるのは、かよ子だが、彼女が浮かべるとも思えない、残忍な笑みを浮かべていた。

「お前……何者だ?」

「内田かよ子に決まっておるつが……サンレッドよ……」

さつそつと公園に入つてくる三人組がいた。

「あつ……確かにテメエらは……前にヴァンプ達にボコボコにされて説教されていた悪の組織か!?」

そう……その三人組の怪人達は、悪の組織……デビルアイ軍団……素手でヒーローを三人も倒せる実力があるのだが、ヴァンプ達の足元にも及ばない弱小組織……

「……どうか……ヴァンプ達は、かよ子に負けたのか……おい、おめえら……かよ子に何をした!?」

「別に何もしておらん。すべては彼女の意志だ。」

「ウソつくんじや……」

「やめて!……」

殴りかかろうとしたレッドの前にかよ子が割り込む。

必死に何かを訴えるような表情のかよ子……レッドの動きが止まつ

た。

「田を覚ませーかよ子ー！」

「しつかり田は覚めてるわよーー私は……ただ……ただ……アンタを殺したいだけーーーー！」

レッドは、かよ子の攻撃を避けることしかできなかつた。

かよ子は一般人だ……なのに……その動きは……まるで何年も修行した戦士のよつ……

「……つく……」

殴りかかろうとするのだが、その都度、残忍そうな顔から、おびえるかよ子の顔に変わるので、つい攻撃を躊躇してしまつ。このままでは……

「……なにをやつてゐーー！」

公園の前に新しく現れた男がいた。青い髪を持つた男、……

「ム……何者だ？」

「デビルアイ軍団の長……デビルアイがじろつと男を見る。

しかし、男はひるまない。じゅくじゅくとかよ子を見る。何故か、かよ子は、少しどキッとしたようだ。

「……お前がサンレッドか？少し交代してくれ。」

「……お前は……」

いいから代われ。

一瞬でかよ子とレッドの間に入る男。

「…………お前…………覚悟せできてるんだね？」

がたがたと氣の毒なほど震えているかよ子。

「あ……あの……その……これは……バイトで……」

ハイ? そんな必駆どりにあなた

お前たちの住処の周りには、嫌というほど食料があるではないか。衣類などは、あの世間知らずの坊ちゃんにねだればいいだろうが。

「い……いえ……で……でも……あつしにも欲しいものが……」

レーベンハーフェル、ハーフェル、ハーフェル

「...」の間発売されたゲームを

散  
れ。

「わわわわ!!!!!!おしゃべたれ、お!!」**アリス**那!

11

両腕を空に向かつて伸ばした状態で、クロスさせた男を見た瞬間、必死になつて懇願し始めた、かよ子……もどき。

「問答無用だ。恥を知れ！！！」

「うう……」うなつたら……！

かよ子の姿が揺らいだ。輪郭が曖昧になつたかと思つと、やがてそこから姿を現したのは……

男とそつくりな……といふ

「…カノンよ…」

カノンと呼ばれた男は、  
つて飛ばし始める。

問答無用に隕石を自分そつくりな男に向か

「ええいーー！」

ドカツー！バキイー！バシイー！！！

「いくら正体がカーサだと分かっているとはいっても、すつきりするな！ まるで本物の愚兄を殴つての氣分だ！！」

男を数発ほど、殴つて公園の地面に大きなクレーターがいくつも出来た頃… ようやくカノンは晴れ晴れとした感じで、いつの間にかつた。

「…………か…………力一サ殿…………」

「…………お前がカーサの雇い主か?」

「うへ……あは……今田の所は引地止まるわ……」

逃走を図るデビルアイ軍団……だつたが……

「一応、ヴァンプ達の敵は撃たせてもらひうござ。」

一瞬で三人の前に現れるカノン。

三秒後には、そこには三体の怪人の生ける屍が転がっていた

.....

「..... そうか..... お前がカノンっていう奴なのか.....」

レッドがそうつぶやいた。

「ああ..... お前がレッドか.....」

「アレは、知り合いなのか？」

地面で伸びている、かよ子に化けていた男..... なんか、また姿が変わつていて、いかにもヤラレ役つて感じの顔に変つていた..... を指差した。

「ああ..... 僕の元部下のカーサと言う奴だ。

人間のくせして、相手が大事に想う人間の姿形、声、精神など内面まで完璧に似せた幻影を作り出し、油断させつつ攻撃するという特殊能力を持つ奴だ。」

「その通りでやんすね。」

もう復活..... とはいっても、歩くのもやつとな状態..... したカーサが言つた。

「おい..... カーサ..... お前は海闘士マリーナの心を忘れたのか！？」

「え……えっと……」

「そこ」に座れ……！そもそもだな~~~~~！……！」

正座するカーサに説教をするカノン。

「あ……なんか……いつもの私達みたいですね……」

「お前らも、そこに座れ。だいたいな……避けるくらいする余裕

ねえのかよ？

そもそもなあ~~~~~！……」

正座するヴァンプ達に説教をするレッド。

説教は、5時のチャイムが流れるまで、続いたところ……。

## FIGHT 24 異次元に幽閉！？

FIGHT 24 異次元に幽閉！？

「……つくそ……やられたな……」

ため息をつくカノン……そう……カノンが多摩川のサイクリングコースを歩いていた時の事……

背後から来た怪人……によって、異次元に幽閉されてしまったのだ。カノンも異次元技をつかえるので、それを使って抜け出せばいいじゃん？ って思いかもしれないが、

異次元の質が違う図<sup>ト</sup>ぎるため、アナザーディメンションも、ゴールデントライアングルも、この空間内では出来ないのだった。

……ようは、カノンはヴァンプ達の手によって、閉じ込められてしまっていた……

「……やつぱり、アレが原因か？」

先日のカーサとの会話を思い出す。

前回、カーサをみつかり説教した後、ヴァンプ達とカーサと一緒に溝口商店街にある、居酒屋に行つたのだった。

そこで、あのカーサは、酔つた勢いで、カノンの正体をばらしてしまつたのだ。

…もともとはポセイドンを騙してポセイドンの部下…の中でも最強の戦士…七將軍の筆頭だったといふこと…

…世界を手に入れようとしたが、失敗したといふこと…

…そして今は、この世の中で最強と謳われる正義の味方…黄金聖闘士の補欠だとこいつと…

「なんだかんだいって、奴らは悪の組織だからな…本当は俺の敵なんだよな…」

…カノンの正体を知った時の反応も、好意的なものとは、言い難かつた。

戦闘員は『ええ！？じゃあ敵じゃないですかー！？』

つと言つていたし、ヴァンプも…

『ええ！？あの大雨つてカノンさんの上司の仕業だったんですか！？大変だったんですよ！？何日も洗濯物が部屋干しになつたから、カビが生えない様にするのに、どれほど苦労したことか…』

…なんかツツ「む」ところが違つ氣がするが、まあ、好意的ではなかつたのは確かだ。

「……このまま、ここに閉じ込められて餓死させる作戦か…」

かれこれ、すでに閉じ込められて一時間は経過していただろひ…奴らにしては、頭を使つていると評価するべきなのかもしれない…

その時だった。

ウイーーンという音と共に、ヴァンプの顔が現れた。

「あつ…カノンさ、お腹が減ったと思うので、ビハビ」

出てきたのは白米・漬物・味噌汁といったいつもの食事……毒の気配はない。

「いいのか?」

「いいに決まっているではないですか!…おかわりありますよ。」

「……いい。」

だまつて食事をとるカノン……連中のしたいことが分からない……

ちなみに…食事は結構おいしかった……

そり2時間は経過しただらうか?

「……俺を不安させよ!ひとつ作戦か?」

「こじは真つ暗闇……人やモノ(さつきの食事の食器)だけが浮き上がりしている空間……

長時間、こじに閉じ込められたら、通常の人間なら発狂してしまつだらう……

「ふふふ……俺にはそんな小細工効かないぞ……

この程度で発狂するなら、サガにスニオン岬に閉じ込められた時に

発狂してゐるわ……」

約一週間……天井まで潮が満ち、瀕死の田川あつ井庄に閉じ込められた事を思い出し、遠い目をするカノン……

そのときだった。

「ウイーンヒツンとこつ聞抜けた音と共に……ウサコツツが現れたのだった。

「おい……なんで……」「ヴァンプ様がヒマだらうからって、相手をしてやれって。ねえ、これ読んで……」「

ウサコツツが抱えていた絵本……『長靴をはいた猫』を読むようさせがむ。

「……つたく……なにがどうなつてゐんだ?」

文句をいいながらウサコツツを膝にのせて、読み聞かせをしてやることにした。

まあ……認めたくないがヒマだし……

展開が早いが、さうに2時間ほどたつたこの……

「ねえ！僕飽きた～～」

「それはこつちのセリフだ……」

黙々をこね始めるウサコツツ。

「だいたい、。一時間も同じ絵本を読み聞かせし続けたこの子の身にもなれ!!

俺の方が、とうくに飽きてるわーー!」

ウイーン

「さあ、準備が出来たぞ。出るがよい!」

また、ヴァンプの顔が現れる……その下には出口と思われる穴が……

「なんだ? 一体……」

カノンは警戒しながら穴から外に出た。

「誕生日おめでとうカノンちゃん……!」

パーン! とクラッカーが鳴る。

そこは綺麗に飾りつけされた川崎支部の居間……怪人たちがパチパチと手を叩いている。

「お……お! ……これはなんだ?」

「カノンさんの誕生日のお祝いです!」

……たしかにヴァンプの目の前にあるケーキには

『ハッピーバースデイ！カノンさん！』

と書かれた丸いショートケーキが……

「あのな……カーサから聞いただろ？俺は……」「セイントの補欠だつてことですか？」

「ああ……だから俺はお前たちの敵だぞ？」

「敵だぞ～じやねえよ、敵じやねえんだよ。」

カーメンマンの弟のアントキラーが、ニヤニヤ笑いながら言つ。

「そうですよ。カノンさんは敵じゃないですよ。むひ仲間です。」

「な……仲間？」

「もう、数か月も一緒に暮らしてきましたじゃないですか！仲間ですよ！」

「お前たち……」

なんかジ～～ンと来るカノン……

今まで誕生日を祝つてくれる奴なんていなかつた。

聖域にいた頃は、隠された存在であるカノンは『サガの生誕祭』を横目で見ながら、ひとりで過ごしていたし、

海界時代は、アトランティスの復興やら海將軍の育成でそれどころではなかつた。

こいつして祝つてもらえるのは初めてカモしれない……

「だが、だれから聞いたんだ？」

「ラダメンティスさんに電話で聞いたんです。誕生日は8月16日だつて！』

「……は？」

「すみません。本当は畠中やひつと畠つたんですねけど、畠中は理事  
が入つてて……」

「いや……やつじやなくて……やつから氣になつてたんだが……」

俺の誕生日は『5月30日』だ……」

し～～んとする場……

「え？」

「いや……！」まだしてられて本当にありがたいのだが……」

「ヴァンプ様……」

「……すみません……ちょっと回想してみます……」

——ヴァンプの回想シーン——

「あつ？ もしもし？ ラダマンティスさんですか？」

『……ガー……ガー……む……ヴァンプや……か？』

とつても電波が悪い……が、構わないで続ける。

「すみません。聖闘士のカノンさんの誕生日ついでですか？ 今月  
ですか？」

『……せ……ント？……今月……16日……』

「16ですか！？ もうすぐですね……ありがとうございます……』

——回想シーン終——

「……それ……伝わつてなかつたんじやないか？」

「えつ？」

「……『聖闘士で今月誕生日の奴の田にひ』を聞かれたのかと思つたのではないか？」

実際、8月16日は、獅子座の聖闘士の誕生日だしな。」

し〜〜んとするその場……視線がヴァンプに集まる……

「それなら、少し遅れたパーティーですね！」

「いや、三か月遅れは少しどは言わんだろ！…」

「はいはい、まあ、のめるんだからいいじゃないですか。」

こうして、約三か月遅れのカノンの誕生日会が開かれたのだった……。

## FIGHT 25 ボルネオの脅威！？

FIGHT 25 ボルネオの脅威！？

「…………帰つたぞ……うつー？なんだこの臭い…………」

パチンコで（小宇宙をつかってズルしたおかげで）勝ちまつくて上機嫌だったカノンは、鼻を覆つた。

なんか川崎支部の中が…………臭い…………

甘い臭いが充満しそぎていてクラクラする…………

「あつー！カノンさん！よかつたー！」

戦闘員が…………おそらく一号が中から出でてきた。

「なんだ？このむせ返るような…………」

「バナナです…………」

「…………バナナ？」

「ボルネオ産のバナナです…………あの…………カノンさんは、存知ですかね？」

先日からアジトに来ている野生児のモルグを…………

「ああ…………あのサルか…………」

思い出すだけでイラつくサル…………といつかボルネオから来たオラウータン型怪人・モルグ。

しそつちゅう『ウホウホウホウホ』「るをく走り回つてゐるか、モグモグとバナナを食べていたサルだ。

……一度、ヴァンプに文句を言つたことがある……

「お前の部下なんだろー? しつかりしつけろよー!」

そしたら、ヴァンプは青ざめた顔でこりこりついたのだ……

「……無理なんです……野生児のモルグ君を調教するには、『猛獣使いのティマー君』でないと……」

「じゃあ、その怪人を呼べばいいではないか! ! !

「呼びました! ! ! ちゃんと金属探知機に彼の象徴の『鞭』が引っかかるで渡航禁止にならないように、鞭だけは荷物扱いで先に別ルートで送つて……ほり! ! ! これです! ! !

ヴァンプの手には、金属の鞭が握られていた。

「……で……肝心の猛獣使いは?」

「……昨日日本に着く予定だつたんですけど、

ボルネオが嵐で飛行機が飛べず……来週になりそつだと……

何も言葉が返せなかつた……

「……で、アレがどうしたんだよ?」

「……実は……一つ問題が起きて、ボルネオに帰ることになつたんです……」

「問題?」

「はい……」

「言ことくやうに下を向く戦闘員……

「まず、猛獸使いのティマーさんなんですけど……

飛行機に乗る寸前に体調を悪くして、渡航できなくなつたんです。だから、モルグとレッドとの対決も延期になるなーーって思つてたら……

今度はモルグが……」

「なんだ？あのサルも風邪をひくのか？」

「……ホームシックになつたらしく……すっかり瘦せてしまつて……」

「……道理でここ数日、静かだつたんだな……」

「オラウータンはジャングルに住む生き物ですからね……」

ヴァンプ様が言つてました……

『コンクリート・ジャングルには勝てなかつたんだね』つて。

「……なにくだらないこと言つてんだよ……」

で、それとこのバナナ臭さどどいつ関係が？』

「……見た方が早いですね……」

戦闘員が手招きをする。カノンは戦闘員について行き、居間に通じる襖を開けた。

「……」

「あつ……モグモグ……カノンさん……手伝つてください……！」

「うぐ……4000年生きてて……こんなにバナナを一度に吃べるのは……もう無理……」

「僕、バナナ飽きた～」

「ちやぶ台の上に……天井に着きそつなくらいのバナナの山……」

……バナナの量を減らさうと悪戦苦闘する支部の面々……

「……なんだコレは……」

「……モルグがボルネオに帰つたから……彼のバナナが余つてしまつて……」

「余つたというレベルではないだろ……」

こんな量……一度に食べたら、絶対途中でリバースすると間違いなしだ。

「……そうだ！！カノンさん！！カノンさんの知り合いにバナナ好きの人いませんか！？」

「……いや……いないな……こんなにバナナだけを一度に消費できる奴はいない。」

大食いの奴がたくさんいるとこらなら知つているが……」

「……実は……あと物置一つ分のバナナがあるんです……どうしても腐らせたくないんです、私！！」

だから、カノンさんがこの間、私を助けてくれた、ゴールデンなんたらで、大食いの人の所に送つてくれませんか？」

「俺は運送業者か！？……そんなもの、近所で分ければいいだろ？」

「……もう可能な限り分けました！！かよ子さんにも、森末さんにも、そのほか区の人たちにも！！」

「……つたく」

カノンは頭をかいた。

「あれは、どこにつながるか分からぬ技なんだぞ？」

「そりや……集中すれば多少コントロールできるが……」

「大丈夫です！カノンさんを信じます、私！！」

信じる信じないの問題ではないんだけどな……

と思いながらも、カノンは物置のドアを開けた。

とたんにむせ返るようなバナナの匂いがカノンを襲つ。

(……集中しる……集中しる……)

さすがに、これから三食以上バナナ生活は嫌なカノン。  
これ以上ないくらい集中力を高める。

送り先は……サガの住処……双児宮……

……としたいところだが、あとが怖いので、多少の事なら許してくれそうな『聖域唯一の常識人・牡牛座のアルデバラン』の住まう  
金牛宮……

「『『『アルデントライアングル』……』

すばやく三角形を宙に描くカノン。

その中へバナナが、あれよあれよと吸い込まれていく……

「うわー凄い凄い……」

ウサコロッソがはしゃぐ。

「……わて、たぶんこれで平氣だ。」

「ありがとうございますカノンさん……」

「よかったです、少しでもバナナが減つて。」

とはいっても、まだ居間には積み上げられたバナナが残つてゐる。

「じゃあ、このバナナを減らすわよ……」

支部の面々……とカノンは、一生分のバナナを食べることになったの  
だった……。

——その頃の聖域では——

「なんだこれは……！」

地球の裏側まで響きそうな悲鳴が金牛宮から……ではなく……

「！？どうしたんだよ！？」

「わ……私の魔宮薔薇が……！」

真っ青になつてうろたえる魚座のアフロディティー。

そう……確かにカノンが集中したおかげで、あの大量のバナナは聖域の十一宮に送られた……

が、どこをどう間違えたのか狂つたのかは分からぬが、なぜか一番上の宮……双魚宮の……それも猛毒バラで知られる魔宮薔薇の園に落ちたのだった。

ボルネオ産の大量のバナナに押しつぶされた纖細なバラは、壊滅的なダメージを被つた。

……だけならない。

問題は、バナナがすべて、魔宮薔薇の毒に侵されてしまったのだ。  
つまり……このバナナは耐毒性のあるアフロディー<sup>テ</sup>しか食べられ  
なくなってしまったのだ。  
むろん！！一人で食べきれるわけもない。

解毒薬でバナナを解毒すれば、他の人間も食べられるのだが、バナ  
ナは足が速い。  
ちまちま一本ずつ解毒していたら、腐つてしまつ。

結局、このバナナの三分の一は、半泣きになりながらアフロディー<sup>テ</sup>が食べ……  
残つた三分の一は、魔宮薔薇の肥料になつたのだった……。

## ――川崎支部の掟――

仮面と防災頭巾のようなマントをしている人型怪人…ヴァイナーが、ヴァンプの前に現れた。

「ああ、ありがとう。」

ヴァイバーが下がっていたスーパーの袋を受け取るヴァンプ。ヴァイバーは、そのまま台所で皿洗いを始める。

—  
h  
?

袋の中を確認していたヴァンプの手が止まる。

そして、きりつとした威厳のある顔立ちになって、鋭くこう言い放つたのだ！！

「ヴァイヤー君！」

ウチでアイスと言つたら、  
ハーゲン ツツじやなくて、レディーボー  
ンでしょ！――――――



FIGHT 26 冥府の使者

... ||| - λ ||| λ ||| λ ... ||| - λ ||| λ ||| λ ...

エアコンがガンガン効いた部屋で、アイスを食べる川崎支部の面々

「ଫିରୁପାତ୍ର」, ପାତ୍ରିକାରୀଙ୍କରେ ଏକାକିନ୍ତିରେ

「あつ！ほんとだ！おいしゃ～」

いつもの賑やかな支部

し  
た  
し  
…  
…

## ピンポン

何者かの来訪を告げるチャイム……これが、日常を大きく変えた。

「あら、やだ。誰かしら。」

立ち上がるヴァンプ……玄関へ小走りで向かうその後ろ姿をながめるカノン……

「ん……この小宇宙は……」

「あつ……あなたは……立ち話もなんですし、あがつてください……！」

「い……いえ……俺は……」

「いいんですよ。暑いですし、Hアコの空気が逃げちゃいますし。

「…………では、お言葉に甘えて……」

ヴァンプに次いで部屋に入つてくる男……その男を見て、カノンはため息をついた。

「…………なんでお前が、またここに来たんだ？」

そこにいたのは、冥闘士じやうとうしき天哭星ハーピーのバレンタインだった。バレンタインはカノンを目にすると、嫌そうな顔をした。

「なんだ……貴様、まだ連れ戻されていないのか。」

「ふん。お前には関係ないな。」

ところで、冥闘士がなんで、ここに来たんだ？」

「決まつていてる……俺の主君……ラダマンティス様の命令だ。」

「お前の主はハーデスではないのか？」

「いや、一番はラダマンティス様だ。その次にハーデス様だな。ラダマンティス様は俺のすべてだ。」

「…………」

殺氣のこもつた鋭い目でカノンを見るバレンタイン。何も言えないカノン……。

「…………」

バレンタインはカノンに好印象をもつていなかった。

理由は聖闘士云々よりも、聖戦の際に、彼の敬愛するラダマンティスを殺したのが、カノンだからであろう……

しかも、その時の殺し方が、『心中』っぽいやり方だつたため、復活後、ラダマンティスとカノンに関する、あらぬ噂が飛び交つたのだ。

カノン自身は、『噂なんてそのうち自然消滅する』と思い、相手にもしなかつたのだが、

敬愛するラダマンティスの名誉のため……その火消しに飛び回つたバレンタイン……何もしなかつたカノンに好印象を持つわけがない。

「どうかしたんですか？」

間の抜けた声で、話に入つてくるヴァンプ……

「あつ……いえ。忘れるところでした。  
実はヴァンプさんに、頼みたいことがあります。」

「頼みたいこと? なにそれ?」

「実は……」

しつかりと姿勢を整えるバレンタイン……まっすぐヴァンプを見る

「冥界で、家庭料理なるモノを作つてほしいのです……」「はあ……! ?」

カノン…と支部の面々が絶句した。

ヴァンプも、予想外の言葉にホゲーーっとしてしまっていた。

「え……えつと……詳しく述べを聞かせてほしいんですけど……」

正気に戻つた一号が、バレンタインに問いかける。

「……実は數十分前の事……」

——回想シーン——

「「「家庭の味…ですか!?!?」」

冥界二臣頭の声がめずらしくそろつた。  
彼らを見下ろす女主人・パンドラは重々しきつぱずく。

「そ、う、じ、や。……、実、は、ハ、ー、デ、ス、様、が、『家庭の味』とい、う、も、の、を、味、わ、つ、て、み、た、い、』

と申して、いるの、じ、や。……、』

「家庭の味ですか……、ま、ず、ど、こ、で、その、言、葉、を、知、つ、た、ん、で、し、ょ、う、ね、?、」

ミーノスがもつともな発言をする。

「最近お読みになつた本に書かれていたそ、う、じ、や。……、  
しかし、私は料理などやつたことがない。」

「だから、お前たち…はやく家庭の味とやら作つてしまいれ…！」

「そんな……俺、料理なんて出来ないよ！」

カップ麺とかインスタントなら出来るけど……」

「安心しろ……最初からお前はあてにしていないぞ、アイアコスよ。」

「……」

「先に申しておきますが、私も無理ですよ？」

料理に関しては全て召使にやらせておりましたので。」

「なに!?……まあ……言われてみたらそうかもじやな……」

「つか、お前ボンボンだつたんだな！」

「……アイアコス……お前、見て分からんのか？

こいつが一般企業の中堅管理職の息子に見えるか!??

どう考へても田舎金持ち貴族の長男……もしくは末っ子だらうが！」

「うへへん……実は俺、チベットの山奥で育つたから、サラリーマンってよく分からんんだよな。」

「サラリーマンというのは、ラダマンティスみたいに、朝から晩まで上司にこき使われて働いている人たちですよ。」

「あへへそつなんだ。」

「お前らな……」

「そつか……では、ラダマンティスはどうじや?」

「家庭の味……ですか……」

自分の小さじ……食べた料理を思い返してみる……

……本来の食感がわからなくなるほど茹でてある野菜……

……油で黒くなるまで揚げてある魚や肉……

そこそここの味で食べられたのは、たった一回だけ連れて行つてくれたレストランのローストビー「フヘリ」……

「無理ですよ、ラダマンティスの実家はイギリスですから。」

「……ミーノスには言われたくなかったが……事実だな。」

パンドラ様、俺には無理です。

唯一、ハーデス様の口に合ひそつたローストビーフは、家庭の味とは言いません。」

「……たしかにな……」

「ふむ……困ったのあ……」

悩みこむ一同……その時、ラダマンティスの脳裏に、ある人物の顔が浮かんだ。

「一人……家庭の味を作り出せる人物を知っています……」

「まことか！？」

「し……しかし……人間というか……怪人……」

「なんでもよい！早く連れてまいれ！！」

「はっ！！では、さっそく、バレンタインに行かせます！！！」

——回想シーン終了——

「……といふことだ。」

しーんとなる空間……

「あのなあ……ハーデスの奴、何やつてんだよ！？」

「俺に聞くな。」

「つまり、料理を作ればいいのね、私？」

「はい。普通の料理で構いません。」

「どうか、お願いします！！！」

頭を下げるバレンタイン……

「分かつたわ。」

「おい！ヴァンプ！！

分かつているのか！？帰つてこられないかもしないんだぞ！？」

「大丈夫ですよ、カノンさん！

では、支度させてください。」

……本当に大丈夫なのか？

一抹の不安を覚えるカノンだった。

## FIGHT 27 黄色の悪魔 襲来！！

FIGHT 27 黄色の悪魔 襲来！！

「なに笑ってんだ？」

カノンと一緒にドラマ『HER』の再放送を見ていた人型怪人  
・ギョウがいきなりクスクス笑いを始めた。

「いや～、聞いた話なんだけどあ～、『きむり たくや』って

名前の正義の味方がいるんだってよ…」

「はあ～？ ふざけてるのか？」

「いやいや、マジだつて！」

ピンポーン

「ん？ 誰だ？」

カノンが玄関に行くと…

「あ～、すまへん。ヴァンプはんは、いまへんか？」

見下ろすと、ビール腹の黄色のヒーローがいた。……なんか、頭の位置がカノンの腹くらいの、低い背の男だった。

「……ヴァンプは今、出かけている。」

「え……そなうなら仕方ありまへんな……どんくらいで帰つてくるん

でつか?」

「...どうぐりいだ?.....べつと.....」

「ねつ...イエローさんじやないですか!...」

カムハビンプが帰つてました。

「あつ...ヴァンプはん!...久しふりでな~」

「イエローさんじや!...今田がどうして川崎に?」

「こや~仕事の関係で、ちよつくり来てたんや~。  
んで、近く寄つたから顔見ようと思つたんや。

そんでもつてヴァンプはん、この兄ちゃん誰や?怪人ではないみたいやけど.....」

汗を拭きながらイエローと呼ばれたヒーローは尋ねた。

「ああ。紹介しますね。

彼はカノンさん。人間なんだけど、ちよつと醜陋してゐるよ。  
カノンさん、こやうはイエローさん。

本名は、『せむり たくや』さんつてこつんですけどよ。」

「せむり まあ、ようじへな.....つて.....なこい~~~~~  
!~?」

カムハビンプが、ビーローの前の小僧なヒーローを見る。  
「せむりか、うーん、ビーローでも、ビーローでも、オッサン.....」

「.....本当にキムタクなのか?」

「ほんまやで。こや~このお前とマスクのおかげで、営業面で結構  
好感を得てるんですねわ。」

「営業?もうヒーローではないのか?」

「引退したんや。んで、今は家業の建築業を継いでるんやで。」

「

「…………」

なんか、何も言えなくなってしまったカノンだつた。

「それで、ヴァンプはんは、どこに行つてたんや?」

「ええ。ちょっと冥界まで行つてたのよ。」

「えつー?冥界つて……大丈夫やつたんか?」

「平氣平氣。ちょっと料理作りに行つていただけだし、私。それに、世界征服の手伝いをしてもらえるように、頼んできたから。」

「おっ……まだ企んでおりますなあ~」

「おかげさまで」

ハハハッと玄関に笑い声が響く。

「あつ……そうだ。」れ…イエローさん」にあげます。たくさん貰つて  
きちゃつたんで。」

盾の内部から一つの小さな包みを取り出した。

「これは……」

「冥界名物の『ケルベロスまんじゅう』ですつて。ファラオさんつて人が、たくさんくれたのよ。」

「……(あいつ…何作つてんだよ……)……」

「あ…おおきに~。すまへんな……何も持つてきておらんや……」

「気にしないでくださいよ~」

「……あつー!せやー!~

礼つてことで、わいが稽古つけたるつか?

人間だからつて、これからの中、護身術ぐらい出来んかつたら  
飯くつてへんで~」

何故か、さあーーっと顔色が変わるヴァンプ……

「い...いえ...そんな...悪いです...」

「気にせんでええっちゅうねん、ヴァンプはん。電車の時間まで、まだ時間あるんぢし。」

「あ、俺いいつか？」

中から話を聞いていたギョウが出てきた。

「恐るべくお前はんが？」

もられるなんて、めったにないですよー！

「これで一気に俺有名人で感じ……」  
まあ、カオーミングアッパーだ、お頬ーするか

数分後……いつもの公園

「ほりほら、もうギブかいな～？」

ひいいいい

ギョウをコンクリートブロックで連續強打してから、今は左手にスタンガンを…右手に栓抜きを持つて、ギョウの背中をグリグリグリグリ押しまくっているイエローがいた……。

「…………おい…………性格かわってないか？」

まずは、見ているだけのカノンが、蒼い顔をしているヴァンプに尋ねた。

「……いえ、変わっていません……」

普段は人のいい方なんですか、戦闘になると一変……悪徳レスラーミたいな戦い方をするヒーロー……ウェザーハロー……通称『イエロー・デビル』……」

「……おい兄ちゃんはやらんのか?」

ギョウを殺しかけて……いや、ギョウに稽古をつけてくるヒーローが、笑顔でカノンの方を見た。

「……ふ……いいだろ?」

「ゴキ……ゴキ……と拳を鳴らすカノン。

「雷の戦士の実力みせてやるで……」

カノンの頭の上に、スタンガンを振り上げるヒーロー カノンは、動こうとしない。平然と立っている。

「か……カノンさん……!」

ヴァンプが悲鳴に近い声を上げる……

「よけへんと、終わりやで……!」

すかつ

「あれ?」

スタンガンを振り下ろした手は、畠を切った。

…………そこには、だれもいない…………

「どうした？お前にそ、その程度か？」

イエローの背後にカノンが立っていた。

「なつー？」

「次はこいつの番だな」

カノンは少し小宇宙を高めた。……イエローの顔色が変わった。

「ちょっと……本気でいかんと、まずいかもしれへんな…………」

栓抜きを持ち直すイエロー。

「す……す……」

あつけにとられるヴァンプ、……。

彼の視線の先では、すさまじい戦いがおこっていた。

イエローの栓抜きとカノンの拳が、ものすごい勢いでぶつかり合っているのだろうが、動きが早すぎるせいで、何をしているかよく分からない…………

「くつーーー！」

拳の雨を防ぎきれなかつたのか、イエローが公園の端まで吹っ飛ば

された。

「「つ、……やつぱ、身体がこびつてるわー……」

兄ちゃん、強いなあ～

「お前もな。」

立ち上がるイエロー。

「こや～～兄ちゃんなら、レッドも倒せるかもしれんな～。  
ん……あつーーもう電車の時間やわ……

ほな、おねえに～～アンパンにカノンはんー。」

手を振りながらイエローは去つていった。

「か……カノンさん……凄いですーーあのイエローさんに一発入れる  
なんてーー。」

感激するパンプ。

「今日は、カノンさんの好きなモノを作りますねーー。」

「いや、何度も言つたが、お前の思考は主婦かーー。」

カノンの呆れた声が公園に響く……。

天体戦士サンレッド

これは、川崎市高津区溝口で繰り広げられる、轟と轟の壮絶なる戦いの物語である。



## Special FIGHT ヴァンプ、冥界へ行く！

薄暗い……紫がかつた霧の立ち込める室内で、ヴァンプは壁にかけたフロシャイムの口「」を背に立っている……。彼は、ある一枚の写真を取り出した。

「この方が、われわれが今回会いに行く『ハーデス』という方だ。」

そこに映っているのは黒髪の美少年……

「……しかし……ヴァンプ様……なぜ俺たちも付いていかなくてはいけないのですか？」

「……それはだな……カーメンマンとメダリオよ……」

お前たちが、ふざけて支部の窓ガラスを割つた罰だ……！」

Special Fight ヴァンプ、冥界へ行く！

・アーケロン川

「おい、あんたが報告にあつた、ヴァンプっていう怪人『』一行様か？」

対岸が見えない大河……アケローン川の渡し守の天間星アケローンのてんかんせい

カロンはオールを片手に問ひ。

「ええ。ちょっとバレンタインさんに頼まれて。  
あのへ通してくれますか？」

「いいぜ……だが……」

カロンは右手をヴァンプに突き出した。

「金があればな。」

「えつ！？ ただじゃないの？」

「当たり前だよ、ウサギ！！」

「えへへ ケチだな。」

「ケチじやねえ。これが世の中の通りつてもんよ。さあ、有金全部  
早くだしな。」

「仕方ないわね……」

ヴァンプは財布から一万円を取り出した。

「これで足りないようなら、『世界征服資金』の中から出してもら  
えるように申請するけど……」

「十分だぜ。乗りな！！」

船に乗り込むヴァンプ。続いてカーメンマンが乗り込もうとしたが

……

「おおっとーーお前たちも払えよ。この将軍様と同じくらこな。」

「はあーー？ 意味わからんねえよ、溶かすぞーー！」

「いいじやねえか、一人や二人くらい、呪うぞーー！」

「いや、ごちや言つてねえで、早く払いやがれーー！」

「……つたく……仕方ねえな……ほらよ。」

あ～～あ、今月の食費はアント（弟）においりてもりおつ。

「おこーすりにぞー！俺も混ぜやがれーー！」

「わちや、わちや言いながら、今月の生活費・一万円を支払うメダリオ・カーメンマンも船に乗り込んだ。

残るは……ウサコッシュのみ。

「わあ、ウサギも金をだしな。」

「うう……どうよつ……三十円しかなこ……」

十円玉を三つ出すウサコッシュ。カロンは大きな声をあげて笑い始めた。

「ハハハー！そんなりつけな金で渡りつとへふせけんじやねえ！

！」

「うー、めんなさこー……」

うぬうと涙をこじませて謝るウサコッシュ……

(か…かわい…)

デキンッときたしまったカロン……

「あ～～し…仕方ねえなー！特別だー！乗れよ。」

「ありがとうーーーー！」

「おこーすりにぞーーー！」

「俺たちの一万円返しやがれーーーー！」

戦闘態勢にはいる一休

「はいはい、喧嘩しないで。……じゃあ、お願ひします、カロンさん。」

「おひ。出発するぜ。」

オールをはじめるカロン。……ヴァンプの冥界の旅が幕を開けた。

・第一獄・裁きの館

「いいか。くれぐれも中では静かにしろよ。くしゃみ一つも立てるなよ。」

「」の案内役、雑兵のマルキーノが再び口を酸っぱくして言ひ。

「そんなに静かにしないといけないのか？」

「当たり前です！……臣頭のミーノス様の代行官として、ほぼ不眠不休で『裁きの館』を訪れる亡者どもの相手をしていらっしゃるルネ様は、静肅を好むのです！」

だから、くれぐれも静かに通り過ぎてください。」

「分かったわ。……みんな！静かにね。」

「はい、ヴァンプ様！」

「」して亡者たちに混ざつて、裁きの館に入った一行だが……

「あつ……」

突然……しかもルネの田の前を通過するときに、ヴァンプが大声を上げたのだ。

「ちよ……ヴァンプさん！？静かに……」

「どうしようつ……お鍋の火を消したかしら、私……」

「どうだつたつけ……？ウサは知つてゐるか？」

「えへへ！？知らなゐよ？」

「携帯電話で確かめてみますか？」

「あつ……そうね……やだ～～困る～。圈外になつてゐる。」

「大丈夫ですよ。きっと誰かがとめてくれて……つて痛つてえ……足を踏むんじやねえよ、メダリオ！……呪うづぞ……」

「わりいわりい。」

「静肅にとつておひつが……」

ドンドンドンドンドと机を連打する音で、よつやく話すのをやめた一行

……

「マルキーノ……」

「はつ……申し訳ありません、ルネ様……再三言つたのですが……」

「貴様……何度も私に怒鳴らせれば氣が済むんだ？」

ルネの様子から察するに、すでに数回、『静肅にするよつ』ヴァンプ達に言つていたらしい……が、彼らの声の音量が大きすぎで、聞こえなかつたようだ……

「……この裁きの館を……」

「あつ……見てみて……一本だけだけど、アンテナが立つたわよ……！」

「じゃあ、今のうちに……」

「お前ら、静かにしろ……ルネ様はお怒りだぞ……」

「お前が静かにしろ、マルキーノ！」

「あばばばば～！ お、お許しをルネ様～」

「問答無用だ……」

バルロンの鞭を振り下ろすルネ……だったが……その攻撃が彼に届くことはなかつた……

ドサッ

「る……ルネ様！？」

マルキーノが恐る恐る近づく……一応……息はあつたが、田は白田だし呼吸も浅かつた……正直・よく今まで法廷に立つていられたなあ～～つと思つくりい死相がはつきり出ていた。

「し……しつかりしてください……すぐに救護室へ……」

「だ……だめだ……マルキーノ……」

私がここを空けたら……い……以前、私が休暇をとつたら……ミーノス様の手抜き裁判で……冥界が大変な事になつた……のを忘れたのか？

「で……ですが……」のままだと死にますよ？」

「いや……私は……仕事を……亡者がミーノス……様の……マリオネットに……ガクッ」

「ルネ様？……ルネ様！？おい……だれか救護班を……ルネ様が危篤だ……！」

いつになく騒がしい裁きの館……だつたが……

「ああ良かつた。ちゃんと火が消えてたつて……！」

うれしそうに『らくちんほん』の通話を切るヴァンプ……だった。

・ジユデツカ

玉座に腰を掛けた黒髪の美少年……もとい、冥界を統べる神・ハイデスの目が、くわあつと大きく開かれた。

彼の前に立っているのは、ヴァンプとお伴のカーメンマン・メダリオ・ウサコッソだった。

……裁きの館から 救護班……というより、その場に偶然居合わせたミューのテレビショーンで、一気に瀕死のルネと一緒に、救護室があるジュデツカまで来たのだった。

「美味!! なんというべきだらうか…… 質素で安物の料理のはずな  
のだが、不味くない。  
今まで味わつたことのない味だ…… デコか不思議な温かみを感じ  
る。

見事であるぞ、ヴァンガとやら。

「おひかわいいわーある

……このアーティもしけるそ

「ああ、わが家の味噌汁ですか? あいかどいいわ。」  
これは、ちゃんと『かう味噌汁』で出汁をとつてますから。

どうだ？このまま私の専属料理人にならないか？」

ヴァンプは困った顔をした。

「お気持ちは嬉しいです。……でも……世界征服をしないといけな

いんです、私達！！！」

「ヴァンプ！！ハーデス様に逆らうのか！？」

ラダマンティスがキレて立ち上がった。

「でも……将軍だし、私……」

「だが、これは滅多にない幸運……」

「よい、ラダマンティスよ。」

ハーデスが茶碗を持つてない方の手をあげて制する。

「も……もうしわけありません……」

ラダマンティスがさつと跪いた。

「ヴァンプよ……では、世界征服が終わつたら、私の専属料理人になつてくれるか?」

「はい!よひこんでお引き受けしますよ、私。」

「そりが……なら、出来る限りだが、余もフロジャイムの世界征服の手助けをしよう。」

「本当ですか!?」

「ああ。……おい、例のモノを!-!」

パンツと手を叩くハーデス。

すると、先程までBGMとして琴を奏でていたファラオが立ち上がつた。

彼はたくさんの箱を抱えていた。

「?これは?」

「ハーデス様が『土産として何か用意し?』と言わされたので作りました『ケルベロスまんじゅう』です。

少ないものですが……」

「いや……多すぎだろ……」

「いや……多すぎだろ……」

まんじゅう6つ入りの箱を10個ほど、彼は抱えていた

「いや～私のケルベロスは本当にかわいくって……  
いつもは彼用に100個単位で作っているんですよ。  
あっ……でも、安心してください。人間が食べても全く害はないんで。

# 「俺たち」聖人なんぞナビ

「たぶん大丈夫でしょう。」

「阿彌陀佛是無量壽佛」

「いいじゃないか、ミーノス。腹が減つてたんだよ。」

「ありがとうございますー！ー」これだけあれば、かよ子さん達の所

久遠の日記

「…………うと皿、うど、うのめんじゅう、おこしですねーーー。」  
「本物にねこしーーー餡子も作りじゃないーーー。」  
レシードの嫁、やとい、かよ子の嫁で、めんじゅうを焼く、パンとかよ子。

卷之三

「……つーか、こんなのはつてる暇があるなら、冥界の仕事しつか  
りやれよ……」

カノンとレッドは、ため息をついたのであつた……。



Special FIGHT ヴァンプ、冥界へ行く！（後書き）

30話達成記念！—リクエストの外伝です。遅くなつてすみません

……

これからも、精進していきたいと思います！—

FIGHT 28 参謀の来襲!!（前書き）

.....参謀って言つても『ギーガス』つていう人ではありますん。

## FIGHT 28 参謀の来襲!!

FIGHT 28 参謀の来襲!!

「……フロシャイムが誇る怪人達よ……」

普段とは打つて変わり何やら怪しげな空氣の立ち込める薄暗い居間。ヴァンプは壁にかけたフロシャイムのロゴを背に立っていた。そしてそれを囲むように怪人達（+カノン）が集まっている……。

「本日、急に招集をかけたのは、この手紙が届いたからだ。」

……といつてヴァンプが取り出したのは一枚のはがき……

「……おい、それって『暑中見舞い』ではないか?」

「その通りだ、カノンさん……」これは、『フロシャイムCEO』と『キングフロシャイム』からの暑中見舞いだ。」

……もう九月に入つてから結構経つ……まあ……せめて『残暑見舞い』にしろよな……つと思うカノン……しかも字が汚い……小学生の字か!…つと言いたくなるよいつな字だつた。

「し……しかし、それと今回の招集とどう関係が?」

戦闘員一号が遠慮がちに尋ねる。

「…実はこのはがきに書いてあるのだが……明日、フロシャイム参謀の『フイリップ』様が川崎支部に来る」となったのだ…」

辺りがざわつく。

「おー……そいつってそんなにヤバいのか？」

そつと隣にいたアリジゴク型怪人でカーメンマンの弟のアントキラーに尋ねるカノン…

「ヤバいのか～じゃねえよ、ヤバいんだよ。

フイリップ参謀って言つたらな、その…まあ簡単に言えば、『クレンン～んちゃん』に出てくる隣のおばさんみたいな性格の噂好きで

『歩くワイドショ―』って感じだな。」

「その通りだ、アントキラーよ。

『川崎支部つて怪人たちがゐるくて散らかってるのよね～』と言わ  
れぬように、しつかり隅から隅まで掃除をするのだ…！」

「…だから俺も招集掛けられたのか…」

「すみません、カノンさん……ですが、これには川崎支部の評判が  
かかつているんです…！」

「分かつた分かつた…で、何するんだよ。」

「ゴホン…と息を整えるヴァンプ…

「では…」

「待つてください、ヴァンプ様…！」

「どうした？モスキーよ？」

「明日のレッドとの対決はどうすんですか？」

「あつ…！…そ娘娘た…！」

キャンセルの電話してくる、私！――

すたすたと電話に向かうヴァンプ

「……あつーもしもし…あつー…レッドさんですかー?…なのですね…明日の対決…延期してほしいんですけど…えつ?私達から頼んでおいて、断るなつて…」つちにも事情があるんですね!…はい…本当にすみません…はい…はい…」

びつ

「…ふう…なんとか了承してくれたよ…」  
では、改めて本日の作戦を語り、まず戦闘員一団は、徹底的に支部の窓という窓を拭け。

台所の戸棚に、使い捨てのメラミンスポンジがあるからそれと、バケツに綺麗な水をくんで、窓とは知らずに激突してしまったやるくらいきれいにするのだ!――

「「キイー」」

戦闘員は答えた。

「次にアントキラーとモスキートはフローリング担当だ。  
から拭きだけではなく、フローリングの床は、ワックスまでしつかりかけるのだぞ?」

「はい!」「了解ツス」

「次はモグラとモギラ…お前たちには風呂を掃除してもいい。  
使い古したブラシで力まかせにこすつたり、風呂掃除用の洗剤を大量に泡立てたりはするな。  
『水垢とりダスター』というアクリル製の水廻り専用の雑巾があるから、それを使え。」

とにかく水垢とこつ水垢を一網打ぬけるのだ……  
「あ……あの……なんで風呂まで？」

モグラ型怪人のモギラが尋ねる。

「……フイリップ参謀は、お泊りになるのだ……」  
「えつ……？」

全員の顔が一斉に引きつる。

「次にカノンさんは玄関の掃除を頼みます。  
下駄箱の中までしつかり綺麗にしてください。  
それから、ギョウは来客用の布団を干すのだ……一時間たつたらしつ  
かり裏返しにするのだぞ……！」

「……分かった……」「了解しました……！」  
「では、かかれ……！何が何でも……」

リリリリ～～ン……！

「もつ……なんなの……？」

少しイライラ氣味のヴァンプは、鳴り響く電話をとる。

「はい、フロシャイム川崎支部です……えつ……！フイリップ参謀  
！？  
ど……ども……明日は我が支部に来ていただけると……えつ？え  
えつ……！？対決が見たい！？」

……ヴァンプの顔が青ざめる……

「災難だな……」

カノンはつづぶやくと、真っ白い雑巾を手に取った。

「ああん！？ どうなんだよ！？ やるつたりやらなつたり言つたりよお……！」

レッドがヴァンプの首根っこをつかんで怒鳴りまくる。

「…………」

「あつ、カノンさん……でしたつけ？ もつと食べたらどうですか？」

「あつ……では、いただくとしよう。」

ヴァンプの付添いで来たカノンは、命の危険を感じてこるヴァンプを見ながら、かよ子と一緒にせんべいを食べていた。

「だつて……いろいろと都合があるんですね！？」

「こつちだつて、なんでお前に振り回されないとけねえんだよ！？」

「私だつて、上司に振り回されでこな」とになつてゐるんです！？」

「…………」

「もついいでしょ？ 許してあげたら？」

かよ子が助け船を出す。カノンため息をつく。

「俺の口から言つのもなんだが……結構必死でヴァンプは謝つてる

ぞ？」

「…………」

レッドはしぶしぶ、乱暴にヴァンプから手を放した。

「あの……レッドさん？……あと一つ頼みがあるんですけど……」  
「うちの立場つていうものもありますし……その……」  
「ああん！？なんだ？負けるつて言うのか！？」

今にも殴りかかりそうな勢いのレッド。

「い……え、負けるつとは言つていません！」  
ただ……私たちの手でピンチに追い込まれて欲しいといつか……  
その……もつと正統派特撮ヒーローつて感じで……」  
「よつは八百長しろつていうのか！？ふざけんな！！」

まさか飛びかかりそうなレッド。かよ子が止めよつとするが、彼女の力では止められない。仕方ないのでカノンが、殴る！？ができる様に、後ろからレッドの腕を押された。

「い……え……ただ……『いい勝負だつたな～』って言われるような

……」

「ふざけんな……」

「ヴァンプさん！帰つた方がいいわよ……なんだかんだ言つてるけど、協力してくれるはずだから……」  
私からも説得しておくし……」  
「やつだぞ、ヴァンプ……とつあえず逃げろ……」

「……す……すみません……本当によろしくお願ひします……」

ヴァンプが頭を下げるが、少しレッドの力が弱まつた。やつやが、

なんとか怒りの中に押し込めたようだ……こつ決壊するか分からな  
いが……

カノンは押さえていた腕を放す。

「……ちつ……今回だけだぞ。」

「ありがとうございます……！」

あ……それからもうひとつ……

今回の対決では、バトルスーツ着用で……」

レッズの中で何かがキレた。

「ふやけんな…………！」

ヴァンプが一皿散に走り出す！あとを追いかけるせレッズ。

「逃げて……ヴァンプさん……！」

「…………もう逃げてるぞ？…………ん？」

チヤララララララララ、ランラジララララーン

ヴァンプが忘れて行つた携帯の着メロが流れた。

カノンは携帯をとると、マンションのエントランスに向かつて歩きながら、通話ボタンを押す。

「誰だ？」

『あつ？カノンさん！？ヴァンプ様は？』

戦闘員一喝……のようだ。

「ああ……レッズと命の危険がある鬼！」心中だ。

何かあつたのか？俺は今すぐ大掃除に戻るが…………」「

『いえ…………実は…………先程参謀からまた電話があつて…………急用が出来たので、来れないそつで…………』

なんといつか…………ヴァンプとレッドには言えないな…………カノンは「そうか」としか返せなかつた…………

「次の日」

いつもの公園…………そこに集まるのはいつもの怪人達とカノンとレッド…………

「もへ、うんざつ…………行くって言つたり、行かないって言つたり…………」

ヴァンプがグイッと飲み物を飲む。

…………結局予定の空いた彼らは、公園でバーベキューをすることになつたのだ。

「あ…………レッドさん？…………ありますよ？」

モグラがビールをレッドに進めるが…………

「いらぬえよ…………」の格好で飲む気になれるか…………」

彼はいつものTシャツにズボン…………といった格好ではなく、しっかりバトルスーツを着て来ていた。

「おー、ヴァンプー！」

「いいじゃないですか！！！」

「ほらー！これ（携帯電話）で、かよ子さんも呼んでください！！！」  
今日はとことん飲むつて決めたんです、私！！！」

そつとつて彼がグイグイ飲むのは……

「それって……『一ラだよな？』

カノンが一応ツッコむが、無視するヴァンプ……

天体戦士サンレッド……これは善と悪が繰り広げる壮絶な戦いの……  
物語である。

## FIGHT 29 封印されし虎の過去

FIGHT 29 封印されし虎の過去

まだまだ蒸し暑い今日この頃……節電体制も一応は解かれ、ガンガンと川崎支部ではエアコンを使用していた。

「ガルル……涼しいな。」

虎型怪人アーマータイガーが気持ちよさそうに言つ。

「俺の実家には、エアコンなんぞないからな。」

「えつと……たしかアーマータイガーさんの実家って……インドのベンガルでしたよね？」

戦闘員一号が聞いた。

「ああ。 そうだぞ。」

「なんで川崎に来たんですか？ずっと疑問に思つてたんですけど……」

「……そうだな…… 神に近い少年のおかげ…… とでも言つておこひへ。

「……なんですか？」

「……あれは、十年以上昔のことだな……あの頃の俺は、フロシヤイム・イング支部にいた頃だ……

（回想シーン）

アーマータイガーがフロシャイムに入つてから、すぐに妙な噂を聞いた。

『この先にある寺には、絶対に近づかない方がいい。近づいた者は、五体満足ではいられない』……という噂だ。

……まだまだ怖いもの知らずだったアーマータイガーは、笑いながら、寺に向かつたのだ……肝試しのような感覚で……

「ガルル～なんだ。なにもねえじゃないか！！」

寺を開けても、そこには人がいなかつた。

……大きな仏像が一つあるだけ……いや……よく見ると、仏像の前に

美しく輝く金髪に黄金の鎧を纏つた、やせこけた少年が……

「へつ……ガキが一人いるだけだな。」

……殺してしまおう……ニヤリと笑うと、アーマータイガーは拳を上げた……が、すぐにおろしてしまつた。

「なぜ、下ろすのかね？」

「…？お前つ……なんで俺が手を挙げていたとわかったんだ！？」

その少年は目をつぶつたままだつた。

「私は『何故下ろしたのか』と聞いている。」

少年から、ものすごい威圧感を感じたアーマータイガー

「……貴様のよつなガキを一人殺したところで、世界征服につながるとは思えん。」

「ほつ……君の目的は世界征服なのか……ふつ……愚かな事よ」

「なんだと!?」

少年は、かすかに笑つた……よつに見えた。

「君みたいな雑魚に、世界征服ができるとは思えん。」

「何を!?」

「私は事実を伝えたまでだ。私にも勝てぬ雑魚が、世界征服など笑止千万よ。」

「俺がお前より……」

「弱い。疑つのなら、試してみるかね?」

「……いいだろ!つー!後悔するな!ー!」

アーマータイガーは少年に殴り掛かつた。

……が、勝負は一瞬だったといえるだらう。

「なつ!?」

渾身の力を込めたはずだった……なのに……

「なにい!?な……なんだ!?……何か空氣の圧力みたいなものが、オレの拳を……とめている!?」

そう、アーマータイガーの拳は、少年にすら届いていなかつた。

軽々とアーマータイガーの拳に対して手を飾しているだけだ。…それだけなのに、見えない何かに押されるように拳は防がれていた。

「もうすぐそのままで、いすれお前の手の皮が裂け、骨が碎けるぞ。それから、肉が爆ぜて腕が消し飛ぶのだ。」

「ぐわあああ！」

軽く飛ばされ、地面にめり込むアーマータイガー。

「分かつたなら、さっさと帰るがよい。」

「？五体満足で帰してくれるのか？」

「君はMかね？五体不満足になりたいのかね？」

「なりたいわけないだろ！…！」

つというより、お前は何者だ！？人間ではないだろ！…！」

「いや、人間だ。…『神にもつとも近い』と言われているがな。」

「神……だと？」

そんなのありえないだろ……つと思ったアーマータイガーだつたが、先程の戦闘と呼べない戦闘を思い出すと、あながち嘘ではない気がした。……歳の割に態度がデカすぎだし。

「……で、名前はなんというんだ？一応、人間なんだろ？」

「私はシャカという。ところで君はいつまでそこにいるのかね？もしかして私の説法を聞きに来たのか？」

「なんでそうなるんだ！？オマエな……保護者はいないのか？親の顔が見てやりたいわ！…ガルル……」

「私は親を知らん。」

「……そうか……それは辛いことを聞いて悪かつたな……」

「ふむ。分かつたのなら、大地に額をこすり付けて私を拌め！…！」

「うん。お前が不憫な奴だと一瞬でも感じた俺が間違っていたのか

もしけないな……

お前は神のつもりなのか！？

「さつき言つたであろうが。神にもつとも近い人間だと」

「その基準が分からん！？」

「さて……説法をしよう。まずは、そこにひざまよきたまえ。」

「聞けよ……人の話をな……」

お前をあ、普段そちらへんの人と話してないだろ……

「……なぜわかつた？」

ピクリ……と動くシャカ……という少年。

「なぜ、私が普段から人ではなく神仏と対話しているのを知つてい  
るのかね？」

「そつちか！？」

「他に何かあるのかね？」

「…………はあ……お前は同じ年齢の人と話したことはないのか？」

「愚問だ。あるに決まっておろづ。」

「そいつらは、お前みたいに偉そうじやなかつただろ？

もつと年頃の子供みたいにふるまえよな？」

「私に、あのような『脳みそ筋肉馬鹿』じもや『羊の皮をかぶつた  
悪意の塊』と仲良くやれと？

いくかね、ポトリと？」

ゾクゾクつと背中の毛が恐怖で逆立つた気がした。

「……自分をマジで殺すかも……

「さて……ずいぶんと脱線した話を戻すとしよう。本日の説法だが

……

「どんだけ説法したいんだ！？」

「というより、俺が『なぜ俺を見逃そうとした？』という質問に答

えてないぞ！！」

「アテナの聖闘士は、無益な殺生を好まぬからだ」

「……本気で言つていいのか？」

アーマータイガーにはセイントというのが、どういう職業なのかは分からぬが、目の前の少年は確実に一人・一人は天に送つている気がする。

「無論、本気だ。」

「……セイントとはなんだ？」

「いちいち質問が多い獣だな。まあいい。特別に答えてやろう。聖闘士とは世界の平和を守るギリシャ神話の女神・アテナを御守りし使える者の事だ。」

「お前、仏教徒ではないのか！？」

「仏教徒だがどうかしたのかね？」

「……」

もつし「む気にはなれなかつた。

「……もうこゝ俺はかえ……」

「こんなところにいたのか、シャカ！？」

部屋に大きな声が響き渡る。振り返ると、なにやらシャカ同様、黄金の鎧で身を固めた影がいくつか立っていた。

「……なぜ君がこゝにいるのかね？」

「教皇様の命令だつてば。『迷子になつたシャカを連れ戻して来い！』つて」

「迷子？』の私がいつ迷子になつたのかね？」

「今だよ！お前が任務に行つたつきり帰つてこないから、俺たち

が搜索に出されたんだ。」

「私は迷子になどなつておらん。

ただ任務帰りに何故か見知らぬ森に入ってしまっただけだ。そこで住み良さそうな廃寺を見つけ、しばらく『神仏との対話』と『愚民どもに説法』をしていただけよ。」

「それを迷子というんだよ。帰れなかつたから、その場所に居座り続けたんだろ?」

「危険な時こそ動かないと習わなかつたのかね?」

「危険な時こそ攻撃!! つて習つたぜ。」

「俺もだ。だいたい、お前に危険な時なんて存在するのか!?」

「そのようなものあるわけなかろう。」

「じゃあ……」

「だが、人生は何が起きるか分からんのだ。いつこのシャカに危険が迫つてもおかしくなかろう。」

よく分からぬ対話が続いている……アーマータイガーはシャカの関心が移っている今、移動したかつたのだが、生憎と出口には仁王立ちをしている巨漢がいるので出られない……

「……だいたいさあ、ムウが家出したのも、ひょっとしてシャカと喧嘩したからなんじゃないのか?」

「何を言つておる?…そもそも彼には、秩序ある団体行動をとるなどという調和を求める精神が欠如しているのだ。だから勝手にふらりと出て行つたまま戻つてこないのだ。」

「そつくりそのままお前にかえすよ。」

「お前にも十分あてはまるだろ!! 偉そうにしてるんじゃねえ!!」

「偉そうに? 何を言つている。私は神にもつとも……」

「知つてるよ!! 聞き飽きたつてば!!

もういい!! カづくで連れて帰る!!』『ライトニング・プラズマ』

!!』『

「あつ……するこそ……俺だつて……『スカーレッド・ニードル』！……」

「はあ……仕方ない『オーロラ・ヒクスキューション』……」

「愚民どもが……私を挾むがいい『天魔降伏』…………」

「うわあ……！『グレート・ホーン』…………」

「つぎやああああああああ…………」

いくつかの光の閃光が……真紅の衝撃が……絶対零度に近い凍気が……強大なエネルギーが……猛牛を思わず拳圧が……決して広いとは言えない寺の中で炸裂した。

謎の鎧を着ている異常な彼らはそこまで被害はなかつたかもしだいが…………

それらすべての攻撃を浴びたアーマータイガーは、その衝撃で一気に日本……溝ノ口付近まで飛ばされたのだった……

（回想シーン終了）

「……それでヴァンプ様に助けてもらつたのだ。」

遠い日をして言つアーマータイガー……

「まあ、この支部は、俺にとつて命を救われた場所。全力で恩を返そつと、この支部の怪人になつたわけだ。」

「そうですか……」

「じゃあ俺はいく。いまからバイトだからな。」

戦闘員一号は、アーマータイガーの背中を見送りながら、こう思つた。

(そんな半端ない攻撃を耐えたアンタも異常だよ…)

## FIGHT 30 悪魔猫の憂鬱

FIGHT 30 悪魔猫の憂鬱

「あれ？あれはどこにしまったんだっけ……」

『レモンとタンスの中を探すカノン……

「ヤバいな……歳だな……いやいや！俺はまだ歳じゃない！……まだ二十路一步手前っというだけで、まだまだ若い……！この物忘れはたまたまだ……！……とはいっても……最近、多いんだよな……物忘れ……」

はあ……とため息をつくカノン……

「僕も同じだよ、カノン！」

丁度外出先から帰ってきたデビルネコが話しかけてきた。

「そうなのか？」

「うん。すぐどの薬を飲んだか忘れちゃうのー。ほり、僕ついたくさん薬飲んでるでしょ？」

えっと……ほら、糖尿の薬・痛風の薬・胃腸の薬・高血圧の薬・関節痛の薬……

「ああ、もういいから。」

次々に手に提げていたビニール袋から薬を取り出す「デビルネコ」。

「…………ん? なに落ち込んでいるんだ?」

いつになく、不幸オーラ全開の「デビルネコ」に気が付いたカノンは尋ねてみた。  
まさか……病状が悪化して……最悪の事態にならうだ……とこうのことか?

「うん……なんで、僕だけ人気がないんだろうって……」

「人気?」

「うん。『ぬいぐるみ型怪人』ってみんな人気があるの……若い女の子に。」

「お前だって、ファンの子がいるのではないか?」「……」

「…………」

「今日もね、この薬達をもらいに病院に行つたの。ほら、高津警察署の前にあるでしょ？あの病院。

「ならないではないか。可愛がってくれる人がいて。俺なんて、そんな二となかつたぞ。」

「えつ？」

「ああ……生まれてから13年間は女人と接点を得ることが出来な

い生活だつたからな。

遠い目をする力ノン……。

「あ～～サガの奴が憎い……俺がコソコソ隠れて生きている中で黄  
金聖闘士として青春を謳歌しやがって……  
しかも俺が必死に海界復興して、あの馬鹿ガキどもを教育している  
間にも、教皇として裕福な生活をしてたしさあ……ブツブツ……  
…………カノンも大変そうだね…………」

「デビルネコに同情される力ノン。」

「それに比べたら、お前は可愛がられて幸せだと思つぞ？」  
「うん……でも、僕だけ可愛がってくれる人の年齢層が違うのが嫌だな…

ウサ君は若い子に好かれているし、タレ////君もホストやるへり好かれてるし……」

「タレ////へ。」

「うん。歌舞伎町で「レイジ」という源氏名でホストをやっているの。店のナンバー1ホストなの。そこで、働かせてもらおうと思つたんだけど……落とされたんだ。やっぱり僕は可愛くないんだ……」

「なんでそりなる?」

他に理由があつたのではないか?例えば……都合がつかなかつたとか

……

「……そうだよね……」

でも、なんで都合がつかなかつたのかな?

『糖尿だから朝9時から働いて、夜にはしつかり上がりさせて貰いたい』

つて頼んだんだけど……」

「……ホストつてどうこう仕事か知つてるのかよ?』

はあ……こいつダメだ。と内心思つカノン……なんでだろつか……  
ものすごく疲れる。  
こちら今まで不幸になつたうな感じ……

「……よし、じゃあ……その『タレ////』とこいつ奴の所へ行くぞ。」  
「えつ~」

カノンは立ち上がつた。

「 もう、お前の不幸面はつんざりなんだよ。」

『不幸』って感じでふるまう前に、行動に移しやがれ！

その『タレミミ』というモテ男にコツ聞きに行けばいいではないか。

L

デビルネコの顔に納得の文字が浮かんだ……が

「でも……教えてくれるかな？」

「教えてくれるだろ。減るモノではないしな。それに……俺もついで手つてやるから。

ヒマだし、遊びたいしな。

ニヤリと笑うと、デビルネコも立ち上がった。

「ありがとう、カノン！！」

二人というか、一人と一匹は歌舞伎町に向かつた

「ねえ、お兄さん! うちの店に来ない?」「いやよ、アタシの所で遊びましょ? よ~」「ダメダメエ~! ウチの店に来てよ!」「はいはい。あとで行くから。」「もう~! 今来て欲しいの!」

「意地悪う~」

カノンは美女に取り囲まれていた。腕をつかまれたり、腰をつかまれたり……カノンは振りほどけようと必死……のようだが、なぜか顔が笑っている。

「悪い悪い、デビルネコ。

で、その『タレミミ』という奴がいるクラブはどうなんだ?」

「…………もういい。」

夜のネオン輝く歌舞伎町……

いつになく、不幸なオーラを醸し出している『デビルネコ』だった……。

## FIGHT 31 試練

「はあ～！？ テスト？」

カノンは自分よりはるかに小さな影を見下ろした。

「そうだ！！ テストだ！！  
重要なテストだから今すぐ……」  
「ちょっと待つた！！」

黒い影が2人の間へと割り込んできた。

「そのテスト……俺からやらせてもらおう、カノンよ……」

FIGHT 31 試練

「……スライディングまでして、やりたいテストなのか？…ナイト  
ール。」

カノンは割り込んでいた元・ヒーローの怪人、ナイトールに言った。

「ふふふ……分かつてないな、カノンよ……  
俺がこの田のために、どれほど修行を積んできたことか……」

ナイトールはそうこうと、小さな影に向かって頭を下げる。

「ああ、お願ひします……ウサ兄さん……」

「よひし……」

小さな影……こと、ウサコッシは重々しくうなずいた。

「…………で、なにやつてるんだ？」

「見て分からぬのか？」

「いや……その……なんだ？それがテストなのか？」

そう……『テスト』といつから、なんかもつと……ググッつと手に汗握るようなバトル系テストかと思つたのだが……  
ただ、ウサコッシがナイトールのビザの上に座つているだけ……

「うう……」

ウサコッシの表情が微妙になつていく……

「どうですか？ウサ兄さん？」

「うう～ん……ウサコッシ・ランキングでは……161位……」

ウサコッシは叫ぶとナイトールの膝の上から飛び降りた。

「ひや……161位ですか！？」

「そうだよ！前より下がつてるじゃん！？」

「一体何をしてたの！？修行したんじゃなかつたの！？」「

ブンスカ、ブンスカと怒るウサコッソ。

「前より下がつてるつて…前もやつていたのか？  
というより……今のがテストだったのか？」

「そう…『ウサコッソ的・膝の上の座り心地ランキング』のテスト  
！！

前回のナイトールは153位だつたんだけど…  
ホントに何してたの！？」

「うう……とりあえず、自分の家で、ぬいぐるみを膝の上に座らせてシユミレー・ションを重ねたんですけど……」

「それしかやつてないの！？」

「オマエな……修行したことが凄いと思うぞ？

正直、俺なら何を修行していいのか見当もつかん。」

「じゃあ、次はカノンの番だよ…！

さあ、早く座つて座つて…！」「

「……はあ…」

乗り気ではないカノン……地べたに座り込み、胡坐をかくと、ウサコッソがチョコソソと座つてきた。

「うーん……これは…」

一瞬黙り込むウサコッソ…

「3位！…凄いよ、カノン！…」

「ええつ……いきなりですか！…！」

「……凄いのか？？」「

状況が理解できない（とにかく、理解したいと、あまり思わない）力ノン。

「もうだよーーー3位とこつたら、アントキラーと同じレベルの『ソフアークラス』！！

膝の上で映画を見ながらカー を食べたいーーって思えるレベルーーちなみに、2位は、かよ子さんとヴァンプ将軍で、1位に輝くのはレッドだよーーー

「…………レッドはお前の敵じゃないのか？」

昨日だつて『レッド抹殺！ーー』とか言つていただじやないか？

「まったく……敵ながら、あつぱれだよーーー！」

あの座り心地は『Hの椅子』ーーあーー本当にいいよ……

ほわわん…とした顔になるウサ「ツツだつたが…………」  
次の瞬間、キリッと厳しい顔つきになつた。

「それに比べたら…………なに？ナイトール？なめてるの？」

君のは『公民館のパイプ椅子』を通り越して『公立中学校の落書きだらけでガッタンゴツトンつるさい椅子』だよーー嫌悪感すら覚えるよーーー

「そ…………そんな」

ズウーンっと落ち込むナイトール。

「また、次までこ、もつと修行して、少しそマシになつてよねーーー」

「こうじと、ウサ「ツツは飛んで行つてしまつた……」

「…………修行つて……あれ以上何をしたらいいんだよ……」

ボー然とするナイトールだつたが……

「そうだ……カノンさん……」

「ん？」

「お願いします……どうか3位の『ソファークラス』に座らせてください……」

「はあ！？」

「お願いします……どんな感じか知りたいんです……」

ナイトールが土下座して頼んでくる…  
カノンは若干引いた。

「お……それなら……あれだ！

お前の先輩のレッドに頼めばいいだろ？アレの方が順位上なんだし

…

「！」の間、拒否されたんですよ……

で、かよ子さんには悪いし、ヴァンプ様には恐れ多いし……アントキ  
ラー兄さんは先輩だから、座りにくいし……  
ということで、カノンさんしかいないんです……」

じつじつ……と近づいてくるナイトール。……正直言つて気持ち悪い。

「お……お……近づくな……」

「いいじゃないですか……減るものじゃないし……」

「ああもう……気持ち悪い……」

『ギャラクション・エクスプローション』……

ドッカーン！

カノンが生み出した隕石が、顔面にクリーンヒットしたナイトールは遠くへ飛んでいく……

それを見届けたカノンは、はあ…とため息をついて、新台が入荷したパチンコ屋に足を向けたのだった。

更新遅くなりました……。

本編でも行っていた「ふりん帝国」との「ババ」ですーー！

## FIGHT 32 異界からの来襲者

青い星… 地球…

「この王者にならうと企んでいるのは、悪の組織・フロシャイムや冥王ハーテスだけとは限らない…

やつ… IJの広い宇宙にいても不思議ではないのだ…！

FIGHT 32 異界からの来襲！？

「あ～～ヒマだ…」

カノンはふあ～～つと大きなあくびをした。

…今日はフロシャイムの社内運動会…だ。

フロシャイムは悪の”組織”であつて”会社”ではないのに、”社内”運動会というのは、間違つているかもしれないが、実質的に会社と変わらないので”社内運動会”の名称なのだそうだ。

で、ヴァンプを筆頭に何人かの怪人が”川崎支部代表”として今、参加しに行つてゐる。

カノンは留守番を頼まれていたのだ……元正義の味方の怪人・ナイトールと一緒に……。

「もう……なんでヴァンプ様は連れて行ってくださらなかつたんでしょうか？」

僕、席取りとか荷物持ちをしないといけないのかな～～って思つていたのに……」

「あ～～きつとあれじやないか？」

お前つて元・ヒーローだろ？だから氣を使つてくれたんじやないか？

「あつ～～なるほど……さすがヴァンプ様ですね～～ますます尊敬しました！！」

「尊敬するのか……アレを？」

ピンポーン

「はいはーい！……今出ますよ……」

風のように玄関へ向かうナイトール……仕事熱心なことで……とカノンがせんべいをかじつていると、部屋にナイトールと……よく分からぬ三人組が入つてきた。

「誰だ？」

「えつと……以前、ヴァンプ様と知り合つて今日ドイツから遊びに來た「悪の組織”ふりん”」の人たちだそうです！！」

「……ドイツ？ドイツなのに”ふりん”か？プリンといつたら「イギ

「リスト」だろ？」

カノンは胡散臭そうに入ってきた三人組を眺めた。

1人は重そうな鎧で身を固めている奴。杖を持つているちつこい奴。それから…なんか角の生えている奴。戦闘力はヴァンプ達とどんとん…というところか…

「そうなんですか？」

でも、以前、ヴァンプ様も言ってましたよ？「ドイツには”ふりん”っていう組織がある」つて！！

「…まあいい。で、名前は？」

「えつと…こっちの鎧の人が”帝王”さんで、杖の人が”ジャバ”さん。そしてこっちが”ベルムズ”さんです…！」

「…ベルムズです…」

「あつ…すみません…」

「で、お前たちってどんな目的で来たんだ？」

「いやあ～～私達全然はかどらなくて……よその人たちはどうなのか気になりますねエ…」

ジャバが答えた。

「あのなあ……お前たち…」

ガラガラガラ

「おい、ヴァンプー！かよ子が今日、昼飯作ってくれねえし、金が

ねえから昼飯食わせろ！！

玄関のチャイムも鳴らさず、まるで自分の家のように入ってきた男  
……サンレッド。

一同は一瞬、固まつた。が、

帝王を指差すレッド。その迫力に帝王はビクッと震えた。

「……帝王様に誌を向けるとは……」

ベムルスがカツとなり立ち上がる。

「へえ～～じやあアンタが保護者ならアンタが弁償しろよ、かよ子のジャージ。」

へらへら笑うレッド。

「弁償！？悪の帝国…いや、悪の組織が弁償などするか…。」  
「レッド先輩！その人たちは…」  
「レッド！？もしかして”天体戦士サンレッド”か…？」  
「なら好都合だ！今のうちにシネエエエエ…。」

ベムルスはレッドに攻撃を開始した……が、

「ハハセえーとつと弁償しやがれ……」

ガツツウウン……

ベムルスは2秒で地面と“じんにちは”をする畠田になつた。

ベムルスは結局、なけなしの金をはたいて弁償することになつたの  
だつた……。

「へえー、あのヤローは留守か……」

ふうはーーっと煙草を吸つレッド。

ちなみにベムルスが帰宅するまでジャバと帝王は川崎支部で待つて  
いることになつていた。

「ふうーん……偵察つてわけか……

で、分かつただろ？俺もひとり倒せねえのに世界征服なんて出来な  
いつて。」

「なにをおーーふりんの科学力をつかえば、こんな星……じゃなくて  
世界なんてあつていう間ですよーー。」

憤慨するジャバ。

「あのなあ……レッドだけじゃないんだぞ……強このは……」

遠い目をするカノン……

「お前たちが本氣で世界征服をするなら是非しておくれ。

ハツキリ言ってそれは不可能な望みだ。」

「なつ！？なんですか！？少し聞きたいですね！――」

「……ギリシャにはな……」

「もつすべ三十路なのに』『愛だ』『正義だ』つと言ひ裸族がいてな……それだけなら『ただの変態』なのだが、そんな男に限つて『銀河を破壊する力』を持つていいのだ……。

他にも『致死量をはるかに超える濃度をもつた毒バラを栽培している男』や、『光速億単位の拳を持つ脳みそまで筋肉で埋まっている男』がいる。

酷いのは『神にもつとも近いといわれているのに、慈悲だけ持つていない男』や『あじやぱーつとか言つてゐるが相手を一瞬で死後の世界へ招待できる男』なんてのもいる。

しかも全員がそろそろつて黄金に輝く鎧を完全装備しているのだ！

「……へ……へえ……」

あぜんとしているジャバ・ナイトール……

ちなみに帝王は寝ていて、レッドは

(面白そつだな…戦いでえー)

つて思つていたりする。

「が、こんなのは序の口だ。」

「じょ…序の口…？」

「あ…本当に恐ろしいのは…あの女だ。」

「女…ですか？」

「あ…いや…あれば女と言えないな…」

心臓で矢を貫かれても生きていて…つてか生き返つてるし…  
世界中の雨を一身に受けても平氣だつたうえに、途中から肺呼吸ではなくエラ呼吸をしていたし…  
血を吸い取る聖なる大甕に閉じ込められながら、自力で血を吸い戻してゐるし…

最期にはアレを守護していた奴ら（星矢達）でも歯が立たなかつたラスボスみたいな奴ハーテスを杖の一突きで殺していたし…

うん…やつぱりアレを女とは言えないな。それ以前に、アレを護る必要もない氣がしてきたぞ…」

遠い目をするカノン…あつににとられたジャバたち…レッドでさえ引いていた。

「だから、世界征服なんてやめた方がいいぞ。」

思わず「いい」でジャバが「はい」とと言ったのをやめたのは当然のことだったかもしれない……。

## ・帝王

ふりん帝国の帝王。本名は不明。物凄く重量のある鎧を常に着んでいる。背中のマントには「P」の文字が描かれており、鎧の胸には「ていおう」と書かれている。基本的に無口な性格で、初期は喋っている描写があるが、後半になるにつれて殆ど喋らなくなり、その代わりに胸の文字がセリフ代わりになる、「～と帝王は思った」とモノローグがある等、帝王の考えが読者に伝わるようになつている。先代帝王の死により急に王位を受け継いだ。いかつい見た目に反して非常に子供っぽい性格であり、何かとうるさいジャバを面倒に思つたり、勝手にあちこちに行つたり、部下の怪人たちと遊んでいたりする。その子供っぽりにはジャバも頭を痛めてはいるが、根は優しい人間であり、時折ジャバを気遣う場面も見られる。そのためか国民には好かれている。甘いものとジャージが好き

## ・ジャバ

ふりん帝国の長老的存在。常に杖を持っており、服の胸には「P」のマークが描かれている。帝王に代わり、帝国を取りまとめている。帝王のお目付け役でもあり、子供っぽい帝王の行動には頭を痛めている。思い込みの強い一面もあり、地球の事柄について度々誤解する。また、妻に先立たれている。

## ・ベムルス

ふりん帝国軍団長。闘いにおいては強く、頼りになる男だが、私生活においてはホステスのたえ子に貢いでいるために、貧乏生活を送っている。スーパー・マーケットなどの家庭的な事に関する知識が豊富。貧乏な料理が得意で、野草を食べる事もある。

神奈川県川崎市高津区溝口

平和そうなこの町の公園で、今……嘘と嘘の辯論なる戦いが幕を開けよつとしていた……

……「……」、読者の顔をこね

「また」の圧だししかね……」、「つーか、ビーフサガツンパイがヘタぢりかしてレッジドボコボコされるんだろう?」

つと黙つかもしれない。

だが……

……〔冗談なしで今回は一味違つたりする……

……」との始まりは先週の「」と……

「つたぐ……もつとましな戦いできねえのかよ……」

おなじみの光景が広がる公園……

レッドが仁王立ちになって、正座をするヴァンプ・戦闘員・アーマータイガー・ガメスに向かって、ガミガミガミガミガミガミガミと永遠に説教をしている。

「いつもいつも、負けて悔しくねえの? どうなんだよそこ?」

「悔しいに決まってるじゃないですか! ! !」

「で、お前たちはそこでお仕舞なんだよな! いつもいつも! ! !」

『負けました』『悔しい』『じゃあ、気を取り直して次いつ襲うか決めよう』『決行』『負けました』『最初に戻る』……の繰り返しなんだよ! ! !

あのさ……前向きなところはいいよ。だがよーーー反省できてねえだろ! ! !

「レッド! ! ! ヴァンプ様を悪く言つな! ! !

他の怪人は知らんが、少なくとも俺は鍛錬してるぞ! ! !

アーマータイガーがガルルッと唸りながら憤慨する。

「だがよ……テメー……本氣でやつてねえだろ?」

「えつ……?」

ポカン……とするアーマータイガー……

「お前の場合や……『その鎧がまた壊れたひびきよつ』って思つて  
るだろ?」

「そんなことはない!……だいたい、この鎧は破損したら『カーラン  
ニクラブ』に持つていけば、経費で直してもいいやのだからな!」

!—

「くえへへ……んじやあ、もつ少し壊しておひつか。」

「ぐはああああああ!—!—!—

アーマータイガーの腹を重點的に蹴るレッジド。

「ちょ……レッジドさと……あんまりですよーー。」

見るに見かねたヴァンプが抗議する。

「ああん?」

「あんまりつてビリコウヒーとだ?つてめーら、悪の組織だろー?」

「でも……それとこれとは別ですよ……」

今日のレッドさん、なんか機嫌悪いですよ……」

「そ……そうですよ……ヴァンプ様の言うとおりです……」

「なんつーか、こつものレッドさんと違います……」

「なんつーか、こつものレッドさんと違います……」

ヴァンプの味方をする戦闘員。

「はあ……」

デカいため息をつくレッド。

「……俺もさ……もつと強い奴と戦いたいわけよ。

アバシリン先輩じゃねえけどよ、たまには自分と同等レベルと戦いたいんだよ！

もつと……こう……正義の味方VS悪の組織の白熱した戦いがしたいんだつての……」

「　　」

一瞬静まり返った公園……

で、この場で一番最初に口を開いたのは……

「なんだ～！やつこいつことだつたんですね～！」

……やつぱつ「問題解決した～！」って感じの笑顔満面をうかべるヴァンプ

アンプだつた。

「やうなはやくこつてくださいよ！」

言わないと分かりませんつて、私。」

「いや……言つても分かつてくれねえ氣が……」

「大丈夫ですよー。」

じゃあ、次はレッドさんも手こざるような子を連れてきますんで。

「ホントだな？」

「本当ですよーーー。」

そうこつと、少しだけレッドの機嫌が直つたよつだ。

「ん……じゃあ、来週な。」

「分かりました……あつーーー待つてください、レッドさんーーー。」

公園を去るつとするレッドに向かつて声を張り上げるヴァンプ。レッドは立ち止つて振り返つた。

「何？」

「ふふふ……来週こそが貴様の最期の時だ。サンレッドよ……

せいぜい残り短い命をたのしむがよいーーーさらばだーーー。」

やつこと、ヴァンプと戦闘員・アーマータイガーは去つていつた

……

で、約束の日になつたわけだが……

「……どうしたんですか……ヴァンプ様？」

もつすぐ対決だといひの……ウロウロしてゐるヴァンプに声をかける戦闘員。

「ど……どひょひ……一弾……」

「へ? どうしたんですか?」

それより……もうすぐ対決……」

「そう! ！ それがね……」

今日到着予定だつた怪人の子が……インフルエンザで倒れちゃつたみたいで……」

「い……インフルエンザですか! ?」

「そうなのよ……予防接種に行こいつとした矢先にかかっちゃつたみたいなのよ……」

真つ青な顔をしたヴァンプ……

「どうしよう……代役として、すぐに連絡がつるのはモスキー君しかいないし……」

「またモスキーさんですか! ?」

それこそレッドが前回より機嫌が悪くなりますよ……」

いつも代役として呼ばれ、レッドとの戦闘回数が多い蛾型怪人モスキーニ……

彼は一応、強いのだが……なにぶん相手がレッドなので……瞬殺されてしまうのだ。

それに、戦闘回数も多いので、レッドの方もモスキーが『代役』として現れる度に

『またそいつかよ……』『見飽きたんだよ、その顔……』『他にいねエのかよ……』

みたいに、怒り度が上がってしまう……。

「……レッドさんの機嫌が悪くなつたら……かよ子さんにも迷惑かかるし……

あ～～～なんで悪の組織が正義の味方に氣を使わないといけないの……！」

ブンスカ、ブンスカ怒るヴァンプ……。

「ふあ～……今日の占い……ザツー双子座は12位かよ……」

そんなヴァンプの近くで朝の占いを見る男が一人いた……

「つたく……ラッキー・ポイントは『朝風呂』だあー?  
……愚兄じやあるまいし、朝つぱらから風呂に入る男じやねえんだつ  
てのーー!」

男はぼりぼりつと頭をかく。

「…………そうだーーーその手があつたーーー」

ヴァンプが男を見て叫んだ。男はいきなり声を上げたヴァンプに驚く。

「な……どうしたんだよーー?」  
「すみません……あの……じつは……

カノンさん……レッズさんと戦つてくれませんかーー?」

……神奈川県川崎市高津区溝口……にある、とある公園……

「……ふん… よもや正義の味方と拳を交える日が来るとはな……」

「……まさか、ヴァンプが用意した強者がお前だつたとはな……」

……不敵に笑う赤い男と青い男……

そんな二人をかたずをのんでも見守るヴァンプと戦闘員……

天体戦士サンレッドジーハードと双子座の聖闘士シーデラゴンの予備であり海龍のカノン……

2人の戦いが今、幕を開けようとしていた！――

## 第34話 わよなりは言わない

FIGHT 34 わよなりは言わない

「……ヴァンプ様、どうなると想こますか？」

戦闘員はさりとて隣にいるヴァンプに、耳打ちした。

「えつ？ なにが？」

「だから… カノンさんが勝つか、レッジが勝つかですよ。」

「そりや… カノンさんに決まってるでしょ！…」

「でも… 勝つたら、どう上に報告するんですか？」

「あ…」

『部外者がレッジに勝利した』つとキングフロジャイムに報告するのは、川崎支部のわずかに残っているプライド（？）が許さない… でも、レッジがまた勝つのを見たくはない… ヴァンプは唸つた… そして…

「あ～～！… もうこいつのことを相打ちになつちやえぱこいの元…！」

「何言つてんだよ…」

2人からツツ「むまれるヴァンプ。

カノンはため息をついた。

「調子が狂う……が、始めるとするか。」

小宇宙を高めるカノン……

それだけで、あたりの空気がガラリと変わった。

レッドは久々に鳥肌が立つのを感じた。

アバシリンの2人と会う時に感じる鳥肌とは一味違う……そう……この感じは……

幼い時……黄金の羽が付いた鎧を着た不審人物が地元の超常現象を解決しに現れた時によく似ている……

その不審人物がまだ、十代半ばにもなっていないと知った時、嘘ではないか?と疑つたし、外人なのに日本語がペラペラっということも変だと思った。それよりも驚いたのは……

人外を越えた強さを持っていたということだ……

自分の目の前で強暴化した四国の化け狸を一瞬で倒したのだった。

……自分は……あのレベルに届いだらうか……

「何をボサツトしている?」

そのカノンの一言で我に返つたレッシュ。

「わりいな……ちよつと昔のことと思い出してな。」

「昔のことだと?」

「いや……昔出会つた黄金の羽を付けた鎧を着た不審人物のことをな

……」

「黄金の羽……?……ああ……あの馬鹿か……」

カノンの脳裏に、能天気な顔をした教皇候補者が浮かんだ。

「知り合いだつたのか?」

「……聞かなかつたことにしてくれ……」

この世に復活してから、アイオロス彼に開口一番で言われたこと……

『ああ……たしか、ポセイドンを騙したり兄を騙したりしたんだつけ?  
あつ……つてことは俺が死ぬ遠回しな原因を作つた人なんだな。』

……つてことを悪意のつて感じの笑顔で言われたのだ……

天然なのか?つてか、アレは嫌がらせか?いや……あの、アイオリアの兄だぞ?アイオリアが皮肉を言つようと思えるか?

……結局、よく分からぬまま、『苦手』の分類に入ったアイオロス……

正直言つて、あまり思い出したくない相手だ……

「……あつ……そうだ。

どうせなら、必殺技出してくれよ。」

物思いにふけっていたカノンを現実に引き戻したのはレッドだった。

「……いいのか？」

「いいぜ。必殺技見てみてエしな。」

レッドの珍しく真剣な声を聴いたカノンは、『幻魔拳』の構えを解き、両腕を前でクロスさせた。

「……初めに言つておくが……手加減はするが死んでも知らんぞ。」

「俺が死ぬ珠だと思えるか？」

だいたい、ギャグ漫画では人は死ないんだ。銀とか見てみる。

何回も主人公たちが爆発に巻き込まれてんのに死んでねえだろ?」

「……だが……一応、『星矢』の価値観が入ったギャグ話だからな……

どうなるか分からんぞ?」

「でも、主人公は死なないっての。ほら、撃てよ!怖いのか!?」

最後の一言にカチンつときたカノン。目に『本気』の2文字が映る……

「こぐゼ……受けたのがいい……銀河をも碎く力……！」

『ギャラクシ』

「『ギャラクシアンエクスプロージョン……』」

ズガアアアアン……！……！

銀河の星々が現れ……あまたの隕石が襲つてきた……！

……カノンに向かって……

「ぐはあああ……！」

カノンの体はブランコにぶつかり、滑り台にぶつかり……そしてシーソーを破壊したところでは地面に衝突！  
血を吐いて戦闘不能となつた。

レッドもヴァンプも呆然としている中……

「『んのおお愚弟がああああ……』」

「……カノン……？」

一人の男が瀕死状態のカノンの背中を踏みつけた。

ズシャン！――つという効果音と共に、地面の形が変わった……

カノンから声が聞こえないのも気になるが……それよりも……

男の姿が彼らには気になつた。

なぜなら彼は仮装大賞も真っ青な金ぴかの鎧でバッカリ身を固めて  
いる上に……

カノンと同じ顔をしていたのだった。

「えつ……もしかして……サガさんですか？カノンさんのお兄さんの  
？」

ヴァンプが恐る恐る聞くと、その男は驚いた顔をした。

「なぜわかつた？」

「いや、分かるだろ……顔同じだし……」

レッドがツツ「//」を入れる。

「フロシャイム川崎支部の將軍ヴァンプともうします、私。

以前は弟がお世話になりました。」「

すると、サガと呼ばれた男の憤怒の表情が、一気に和らいだ。そつ…その顔は…まさに神のよつた優しい表情だった。

「ああ…ヴァンプさんでいらっしゃったか…。

この愚弟の兄…サガだ。いや…いい弟さんでしたよ。私の愚弟もああ育つてくれたらよかつたのですが……」

「いえいえ。カノンさんはものすごく働いてくれましたよ。」

「いえ！それはまやかしです！！」こつはそんなことする男ではあります！」「

キッパリ言い放つサガ。

「だいたいこの愚弟は、勝手に家を飛び出して…それだけではなく、異次元を通じて爆弾やらバナナやらを1-2回に送り込んで…

ここ数か月本当に迷惑をおかけいたしました。

ここにはこの後、しつかり折檻しますので安心を。」

瀕死で白目をむいているカノンの長い髪をつかみ、笑顔で立つているサガ…なんとなく『首狩り族』に見えてきたレッドと戦闘員だった。

「あ…あの…カノンさんがいて助かつたので、その…そこまで折檻しなくていいと思いますよ。」

ヴァンプが、マジで死にそうなカノンを弁護すると、サガは悲しそうな顔をした。

「ありがとうございます。ですが…これは私達、兄弟の問題です。迷惑をかけた罪は償わなければなりません…それでは。」

サガ（+死にかけカノン）は一瞬で公園から、消えた。

…まるでもともと誰もいなかつたかのように…

だが、破壊された遊具の数々と変形した地面が、ここに人がいたことを物語っている…。

「つたく…どうすんだよ、対決…。」

まだ続けんのか…つとこつ意味でヴァンプに向かつて叫びレッド。

「いや…よかつた…代役のモスキー君を一応、呼んでおいで…」

木の陰から現れるのは、よく見る蛾型怪人…

「またソイツかよ！…！もう見飽きたよ！…」

この後、結局……3秒で負けたヴァンプ達は、いつもより短い説教の後……  
サガが破壊しつくした公園の修理をしたのだった……。

第34話 ものなきは言わないわ（後書き）

次回、完結予定です。

## FINAL FIGHT つかの間の平和

### FINAL FIGHT

「……いや～…本当にカノンかと…ビ�しつこむんでしょうが…」

そついい、茶をする戦闘員。

……彼が本国に強制送還（？）されてから早く週間が過ぎようつとしていた…

川崎支部はそれまでと変わらぬ日々を送っていた。

つまり、レッドを倒す計画立てたり、町内会の清掃行事に参加したり、レッドにボコされ説教喰らったり、森末さんのところの猫のミーちゃん等のペットを預かつたり……

今までいたはずの”カノン”という存在がなくともフリーに過ぎていた。

が、それは彼らことつて苦でもなんでもなかつた。

怪人が派遣されてすぐに移動つてことはよくある話だ。まあ…それと同じよつて考えていた。

「それにしても今日は暇だね……」

今日は特にせむ」とも思いつかないヴァンプはボーッとしていた  
……が……

「そうだ！ 久々にサーダー・アンダギーを作りつか？ 」

「いいですね！ ！ 」

「おいしいですからね、サーダー・アンダギー！ ！ ！ ！ 」

「じゃあつくつつか！ ！ ！」

ピンポン

玄関のチャイムが鳴り響く。

「あら？ 誰かしら……？

はいはーい、新聞ならこりませんよ？」

そういうて開けると……

「頼む……かくまつてくれ……」

玄関の所で黄金の鎧を纏つた1人の青年が土下座をしていたのだった……

～とこひる変わつて少し前の聖域～

「カノン……君のせいだ私のバラが……魔宮薔薇<sup>デモンローズ</sup>がバナナの下敷きに……！」

「俺だつて全治2日の怪我したんだぞ……！」

さつさと慰謝料よこしやがれ……！」

「それよりも、お前のせいだサガがいらっしゃばなしで私たちまで迷惑がかかつたのですよ？」

罰としてこれから一か月、ジャミールの亡靈の相手をしてもらいましょうか？」

それでも、聖衣の修復に必要な『血』を貰いましょうか？」

「そういえば、イライラしたサガのせいだ氷河から来た手紙が読め

なかつたな……

罰として私が氷河に会いに行つてゐる間の職務を頼むぞ。  
「ははは……サガにもカノンにも悪氣はなかつたんだつて。  
でも、あの程度で逃げ出すなんて男じやないぞ?  
よしーー今からお前を俺が鍛えてやるーー！」

「あの程度のレベルですむ話じやなかつたんだーー！」

思わず突つ込んでしまつたカノンだった。

「つたく……悪かつたて……」

「そうですか。ではさつそく血を……」

「待てよーー誰が血をやるつといったーー？」

さつそく採血にかかるつとするムウを止めるカノン。  
一方ムウの方は平然とした顔をしていた。

「大丈夫ですよ……体の半分ほどの血を貰うだけですから。」

「死ぬーーそれは死ぬからーーー！」

ただでさえ、さつきサガから何発もギャラクシアンエクスプロージヨンをくらつて貧血気味なのに……

「なんとーー貧血でしたかーー？」

それなら三分の一を貰わないと……足りませんね。」

「この羊の皮をかぶつた悪魔めーーー！」

「待て……」

ムウの肩に手を置くシャカ……」の刹那、シャカが神に見えたカノンだつたが……

「」の裏切り者には我が処女宮の雑用を一ヶ月やつても「」となつてゐる。

だから死なれては困るのだ。」

「そつちか！！

つてか、なんで俺がお前の宮の掃除を……

「シャカ！！何言つてやがるんだ！！！」

一步前に出てきたのはデスマスク……

「死なねえとこいつの保険金が手に入らねえんだよ。」

「この男に保険金などあつたのかね？」

「海将軍の長だつたんだろ？」

保険くらい入つていてもおかしくなくね？」

「それなら……保険金の3分の2は私とデスで分けようか？」

「今回の一一番被害があつたのは私達だし。」

「何を言つてゐる！？私も被害にあつた！！神仏の対話をサガのイライラした小宇宙のせいで何度も妨げられたことか……」

「クールになれ皆……ここは平等に11分にした方がいいのではないか？」

「待つてつてカミュ！！」

老師は被害ウケてねえんだし、アルデバランも何も言つていないと  
だから……9分じゃねえ？」

「ミローーお前はかくまつていたという罪があるぞ？」  
だからお前の分を差し引いて8分だ。」

だからお前の分を差し引いて8分だ。」「それよりも!!!私のバラの貢獻賛賞を

—それよりも!! 私のハテの損害賠償を保険金で……

……カノンは脱力して何も言えなかつた。

なんでーーいつら……俺が死ぬ前提で話してんだよ

「……さて……保険金の話で向こうは盛り上がっているみたいでし

やつを採集しようつか?

さあ――――とカノンは青ざめていった……  
につ、つ……つと笑うムウ……

「いや、ま、待て、！」

「問答無用ですよー。」

「おい！みんな！！！」

天からの声……アルデバランの声が響いた。

しんとうなる一回

「あ…アルデバラン…助けに来て…」

「すまん…今の状況だと助けた奴も同罪になつてしまつのでな…  
助けられん。」

意外にも非情だったアルデバラン…

「それよりも、見てくれ…獅子宮で見つけたんだが…」

アルデバランの大きな手の中には一枚の紙ツキレ…

そこに書いてあつたのは…

『探さないでください』

「え…これどこにあつたつて?」

「獅子宮だ。」

「…………アイオリア…!!…!!

何故だ…!!兄さんに言えない秘密でもあつたのか…!!…!!

発狂し始めるアイオリアの兄のアイオロス。

「……え……なんでこうなったんだ？」

「あれか？魔鏡にふられたとか……」

「振られているのはいつものことだらう？」

「……兄がつざかつたからではないか？」

カノンの事から関心が移つていいく面々……にほつとするカノンだつたが……

「……さて……始めますよ。」

万年血液提供者不足で困つてゐるムウだけはカノンを忘れずにいたおかげで……

カノンは一か月……目覚めることがなかつたそうだ……

（そして川崎支部では）

「すまん……もつあそこにはいられないのだ……」

「はいはい……落ち着いて……」これは安全だからね?「

真っ青な顔をした黄金の獅子の肩を優しく叩くヴァンプ……

「もひいやだ……

夜な夜な上の宮からは（乙女座の聖衣を継ぎたがらない一輝に対する）呪いの経が聞こえ……

下の宮からは、浮遊霊が大量に上がつて来るし……

カミユに氷河とアイザックの話を何時間もつき合わされるし……

『人がいいから』ってムウに何度も血液抜かれるし……

アフロディーテの新毒の実験台に付き合わされるし……

シユラが俺の顔を見るたび『すまなかつた!!』って言ひのもつんざりだし……

ミロの能天氣つぶりにはヘキヘキとするし……

兄さんの修行を通り越した地獄の鍛錬に毎日駆り出されるし……

それに魔玲がまだ俺の気持ちに気が付いてくれないし……

「大丈夫だよ……ほら、おかゆでも食べなさい。」

「でも……近所が最悪ですね……それって……」

「同情しますよ。」

「うう……すまない……」

ものすごく衰弱していた黄金聖闘士アイオリア……  
それを優しくいたわるヴァンプ達……

……しばらく新たな居候が加わることになった川崎支部なのでした

……

END

これで完結です

なんかさびしい気もします……が、これでこの話は終わりです。書いていて楽しかった作品なので、また機会があつたら短編を書くかもしれません。

「J愛読ありがとうございました！――――――

（オマケ）

ガラガラガラ

レッド「ヴァンプ――

今日はかよ子がいねえからお前の所で飯……」

言葉に詰まるレッド……

レッド「……新しい……怪人か？」

戦闘員「違いますよ。

カノンさんの家の近くに住んでいたアイオリアさんです。」

レッド「……なんかめっちゃややつれてねーか？」

ウサ「ツツ「なんか物凄く近所の人たちがつらくなつて来るんだつて。」

レッド「……でもカノンの近所といつたら黄金聖闘士のいる十一富  
だろ？」

むしろ極楽なんじや……」

アイオリア「極楽だと……？」

あそこには冥界よりひどい地獄だ！……」

真っ青な顔をして震えるアイオリア  
に若干引くレッド……

レッド「……すまねえ……」

アイオリア「うう……思い出しただけで吐き気が……」

ヴァンプ「しつかりして、アイオリアさん……！  
ほらー、レジドさんもほーっとつってないで、これ買つてきてくだ  
れこーー！」

レジド「……クラッシックCDか？」

ヴァンプ「アイオリアさんは不眠症なんです。  
不眠症にはクラッシックがいって聞いたことがあるんですね……！」

レジド「……もはやアレは病院レベルだら？」

戦闘員「でも……病院だと、逆探知される心配があります……」

2号「僕たちを頼ってくれたんだから……協力してあげないと……  
それに本当に放つておけないです……！」

レジド「……聖闘士って正義の味方だよな……？」

はあ……つとため息をついた、『悪の組織』の家に夕飯を食べに来

た『正義の味方』だつた。

（本当に終わり）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9450t/>

---

世界征服を企む漢達

2011年11月27日14時47分発行